女鐸



第十七年第六號

本誌は主義を一貫して十七年間繼續發行し來りたるを祝し。別項記載の如く大々的發展を試むるについて。その紀念として諸名家の賛助を得。女子教育講演會を催し。文筆以外にもまた。女子教育に裨補する所あらんとす。

女子教育講演會

六月廿二日（土曜日）午後正一時より、神田美土代町青年會館にて第一回講演會を催す

出演者

文學博士 井上哲次郎君

農學博士 法學博士 新渡戸稲造君

法學博士 和田垣謙三君

醫學博士 岡田和一郎君

下田歌子君

餘興 和洋樂數番

演題曲目等は、追つて新聞紙に廣告すべし

▽傍聽者は女子に限る

▽聽講料 本券を所持せらるゝ御方は無料

第一回女子教育講演會

入場券

一枚一人限

女鑑編輯局

日本赤十字社が 列國環視の下に 如何なる發展を爲し如何なる好績を收めたるかは 世間既に 定評あり今や日本赤十字社第十五回の總會に際し我が發行所は 紀念繪葉書を 發行し既往の成績を永遠に保持すると 同時に 將來益々向上の思想を喚起し以て日本赤

日本赤十字社 第十五回總會 紀念繪葉書

●美麗石版
十五度刷り
●四枚一組
●定價金貳
拾錢●送料
金貳錢

十字社の前途益々 隆盛にして 一層の光輝を發揚せんことを祈る

此の葉書には總會當日の紀念『スタンプ』押捺しあれば參列せられたる諸君には實に好個の紀念品にして一般人士も 必らず之れを座右に備へ以て博愛同仁の 趣旨を 翼贊せらるべきを望む

東京築地二丁目二十一番地 日本赤十字發行所 電話新橋八八、二六九三

女鑑　第十七年第六號目次

文藝

雜錄

誌友

裝畫


THE BEST POCKET MEDICINE
SEIKAIGAN
（犬の聲！）
何と云ふ藥が
欲しいのですか
（令嬢の答）
私は高橋盛大堂の
清快丸が欲しいのです
あの藥は勉強して肩が凝たり氣が欝いだりした
時に能く奏効ますからね
清快丸
價金十錢、廿錢、五十錢、一圓
捻布着二十錢藥罐廿五錢

井上巽軒博士の家庭



學習院女學部卒業生





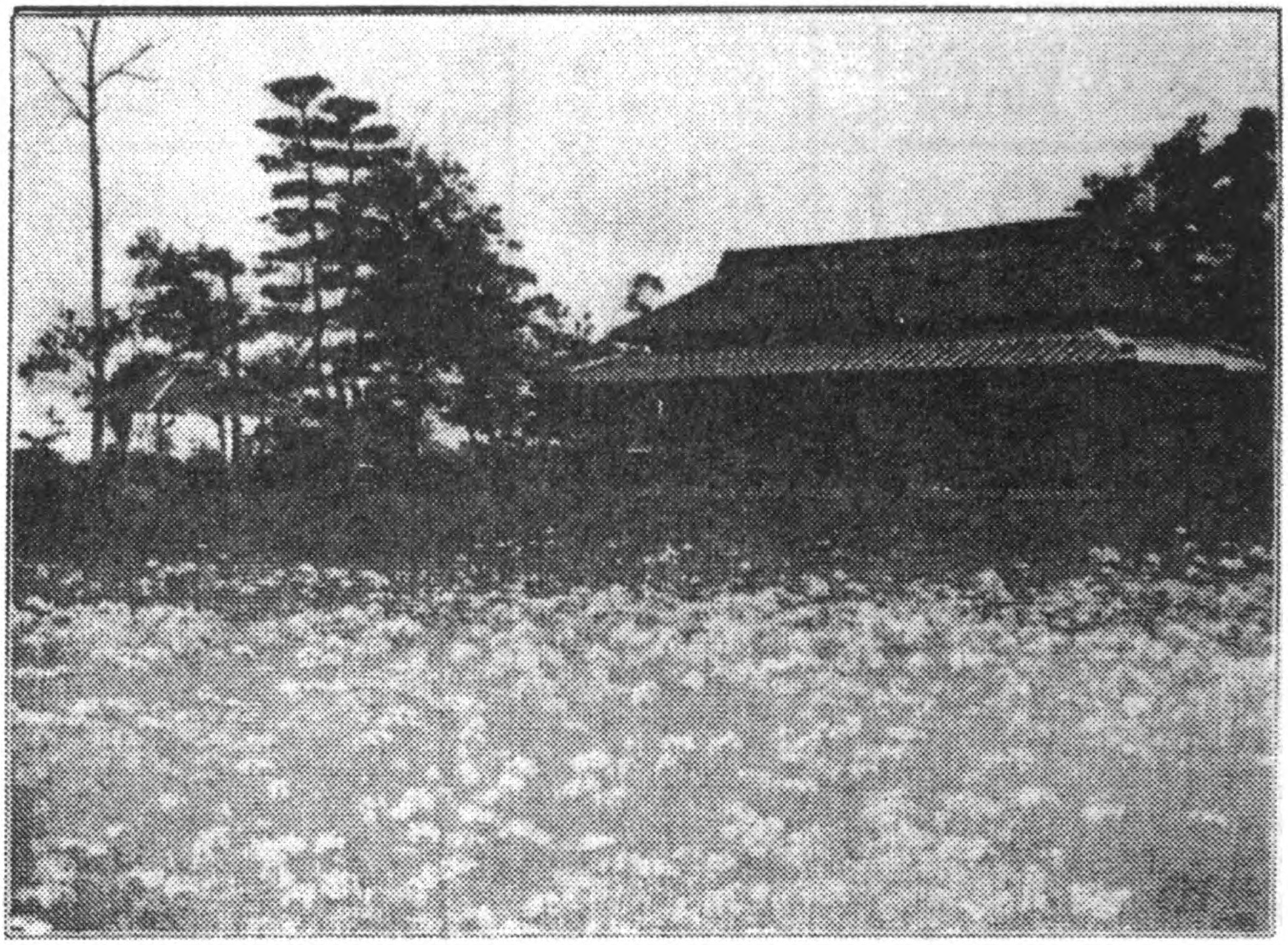
大久保子爵令孃　阿津子君　嘉根子君



幼兒百態　其十一

（[illegible]力君撮影）

堀切の菖蒲

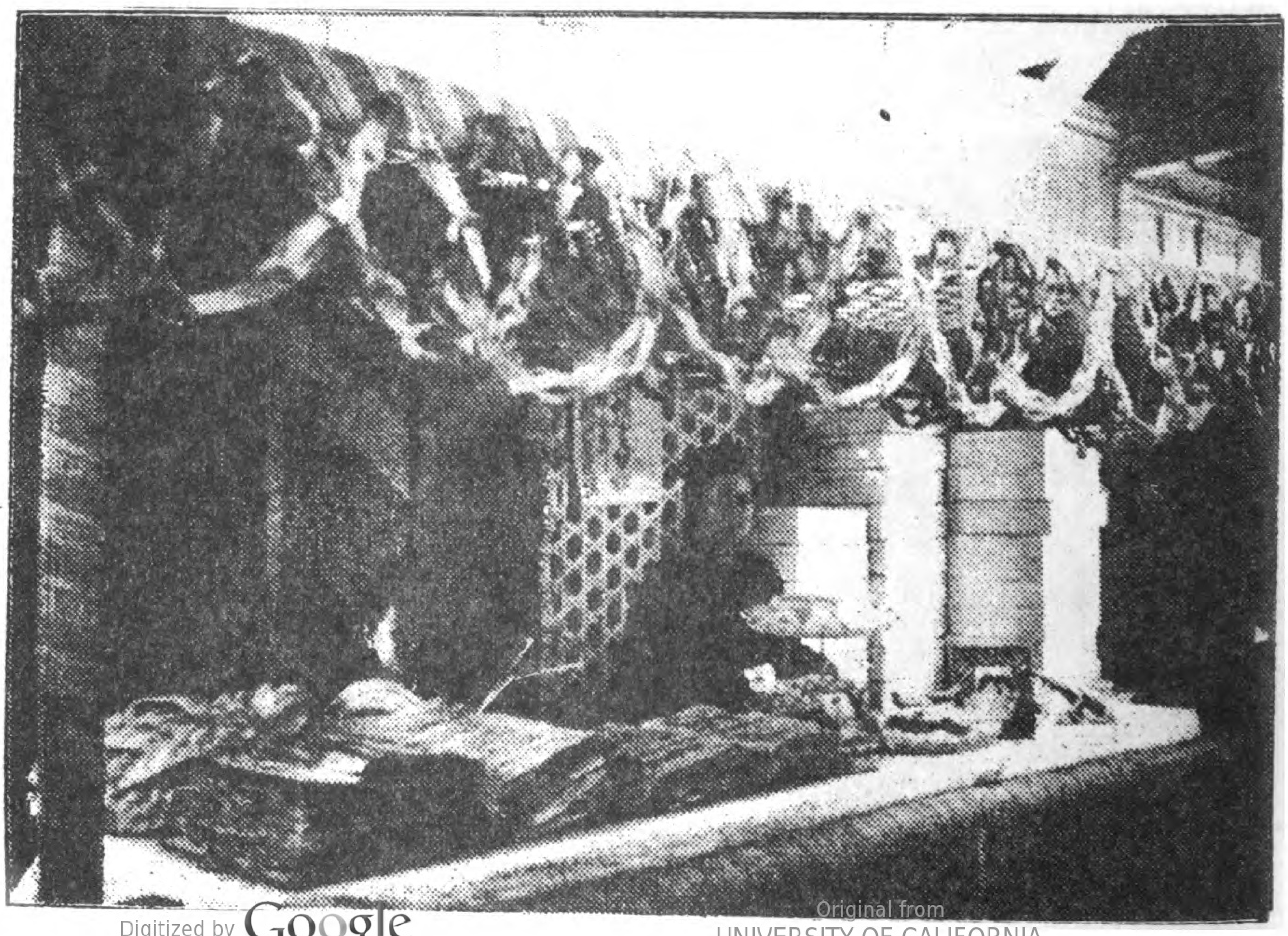




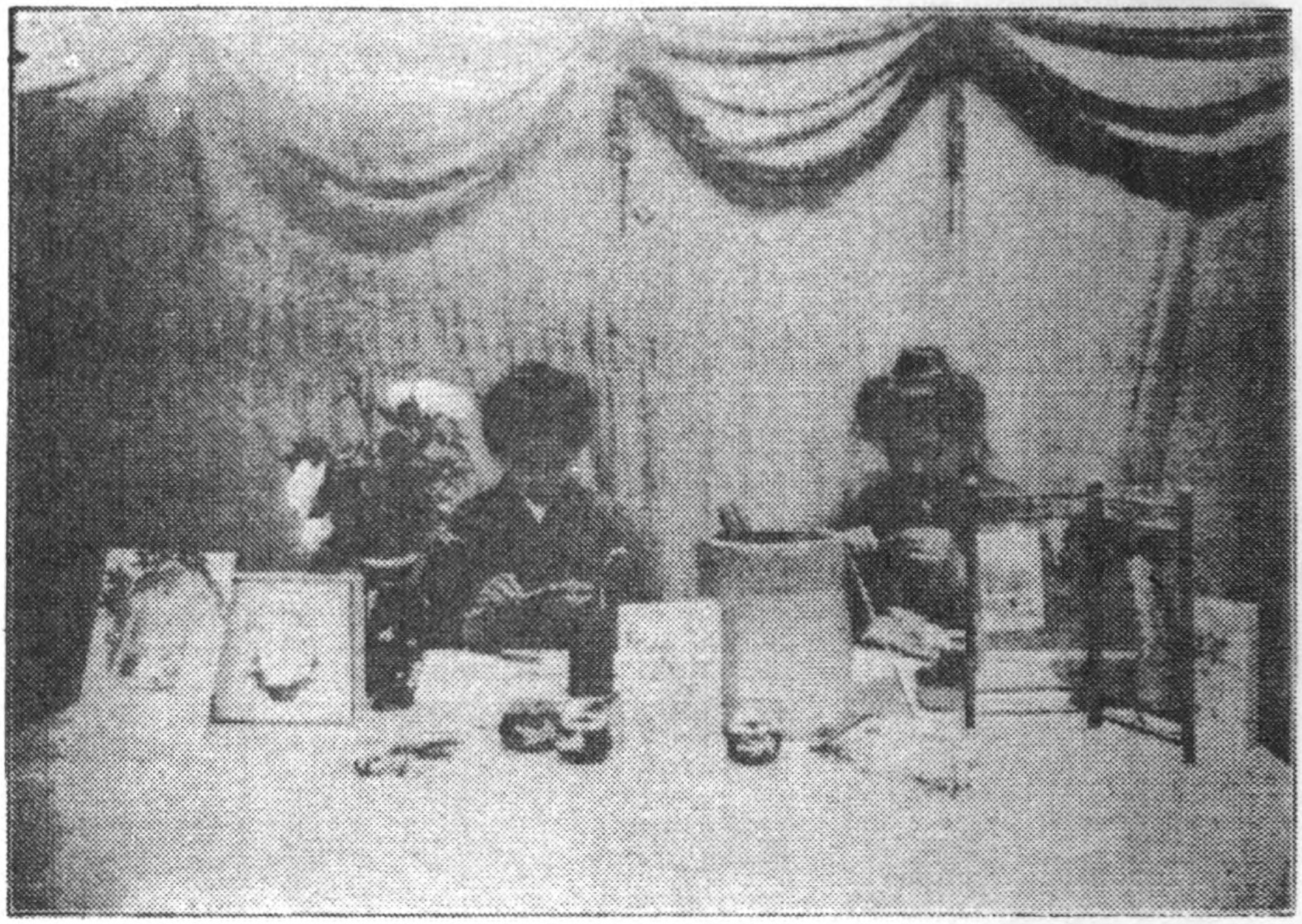
繪畫と經木細工

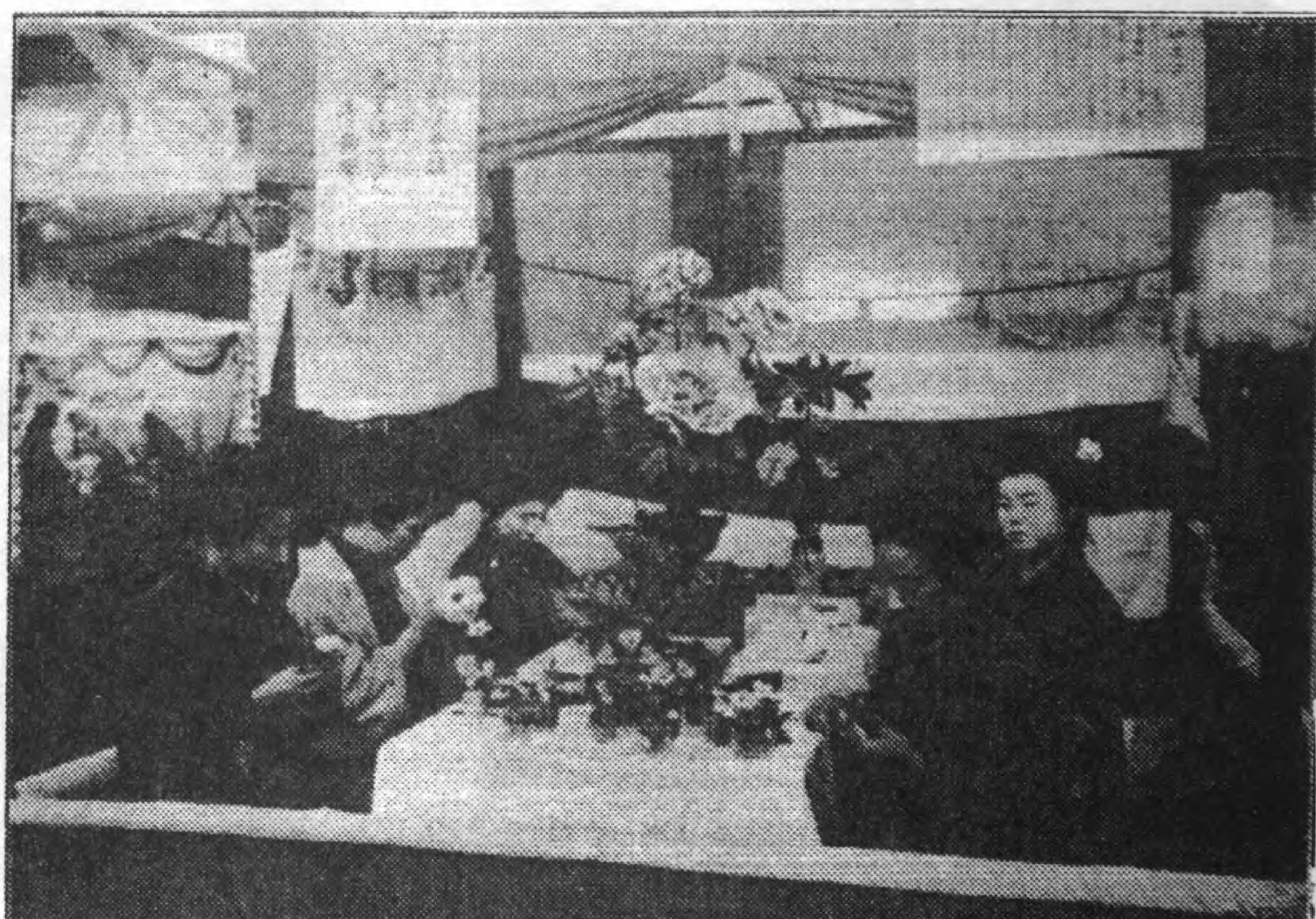
▽婦人技藝の實演　和田垣博士の會長たる婦人博覽會にては、會場にて女子の技藝を實演せしめ且つ之を販賣せるより、一は實地研究の資料に、一は好奇心よりして、之を觀覽する爲に入場するもの多く、即ち同會の呼物となれり、その實況を撮影したるが左の六圖なり、



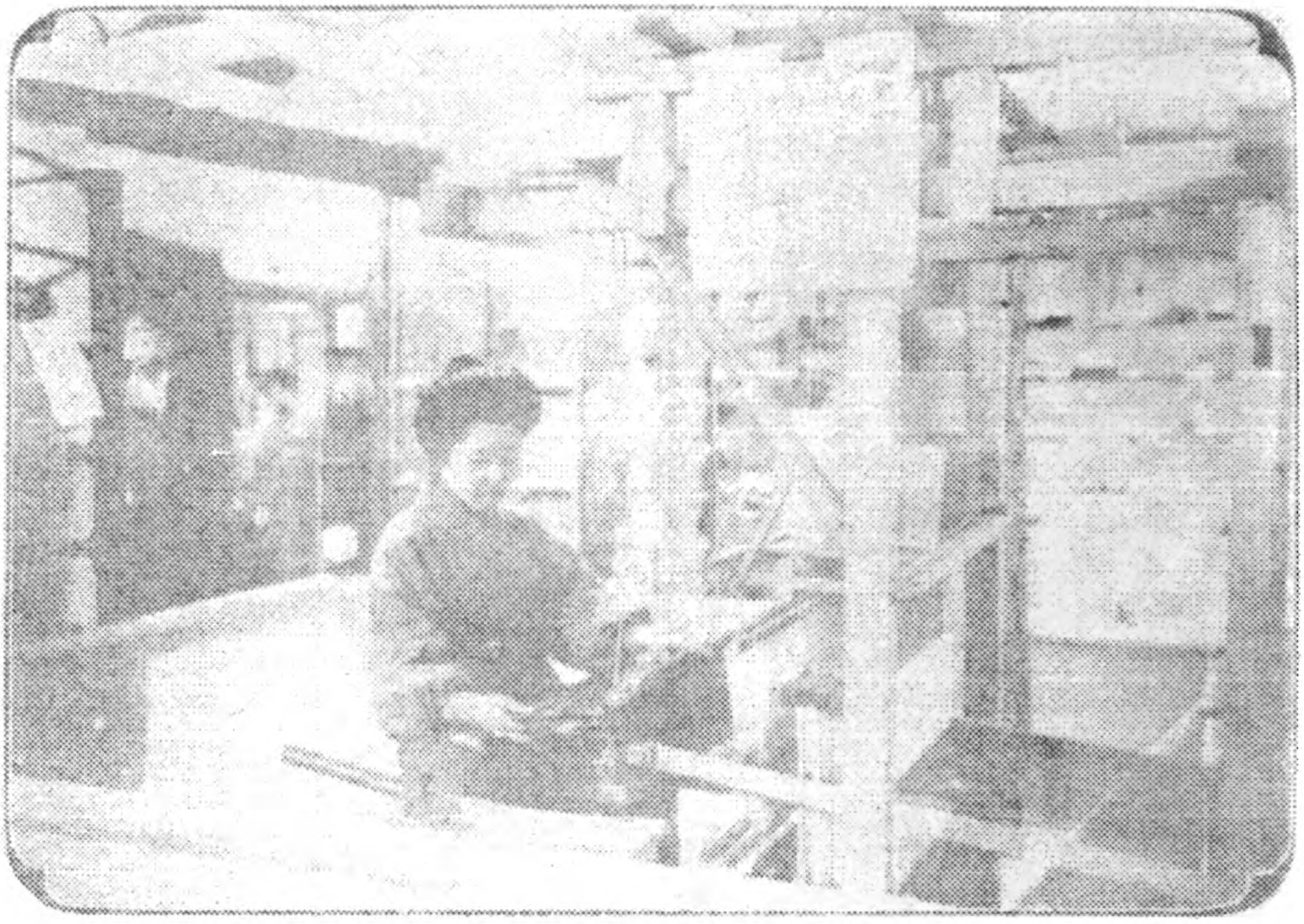


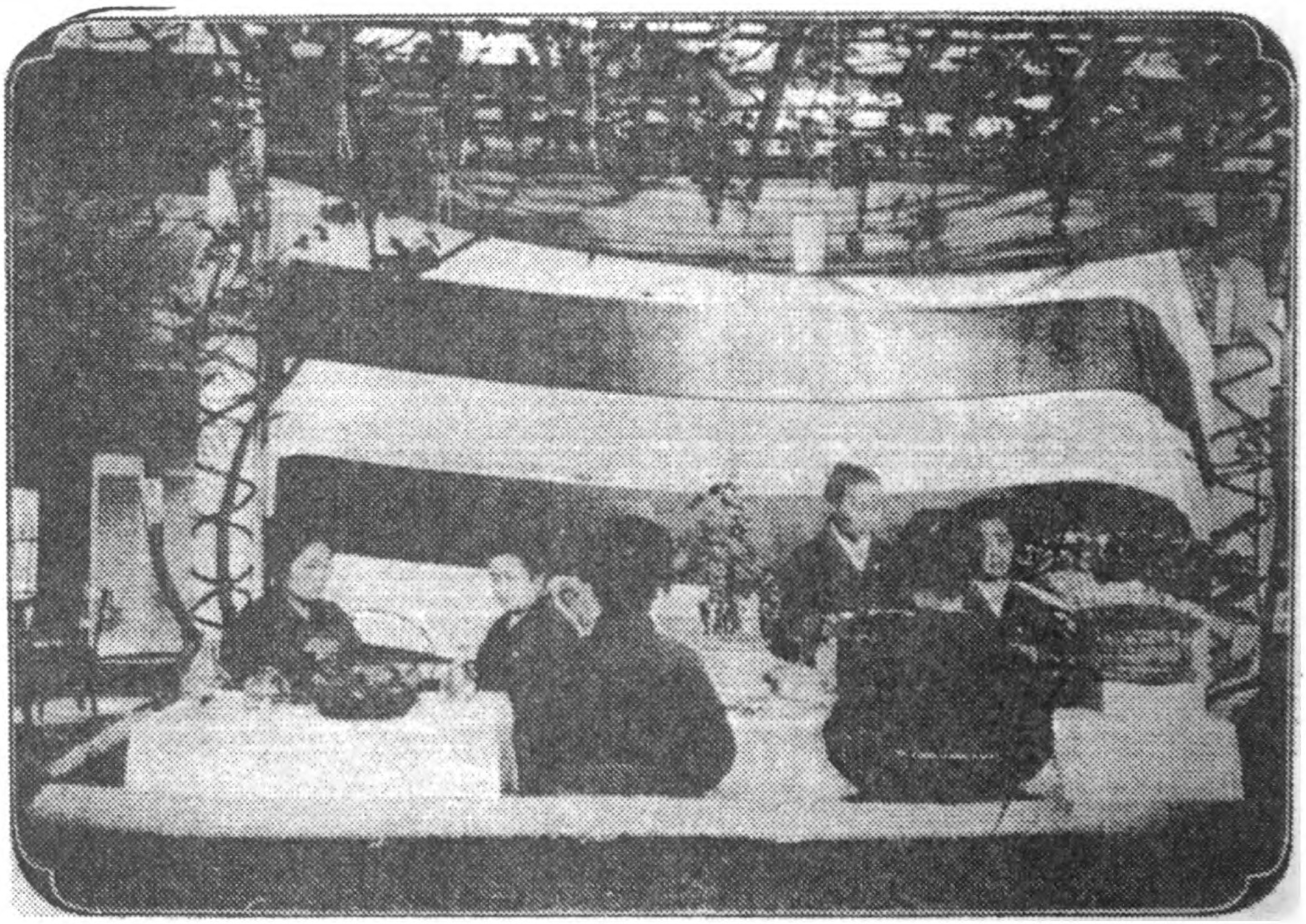
摘細工と九重式編物



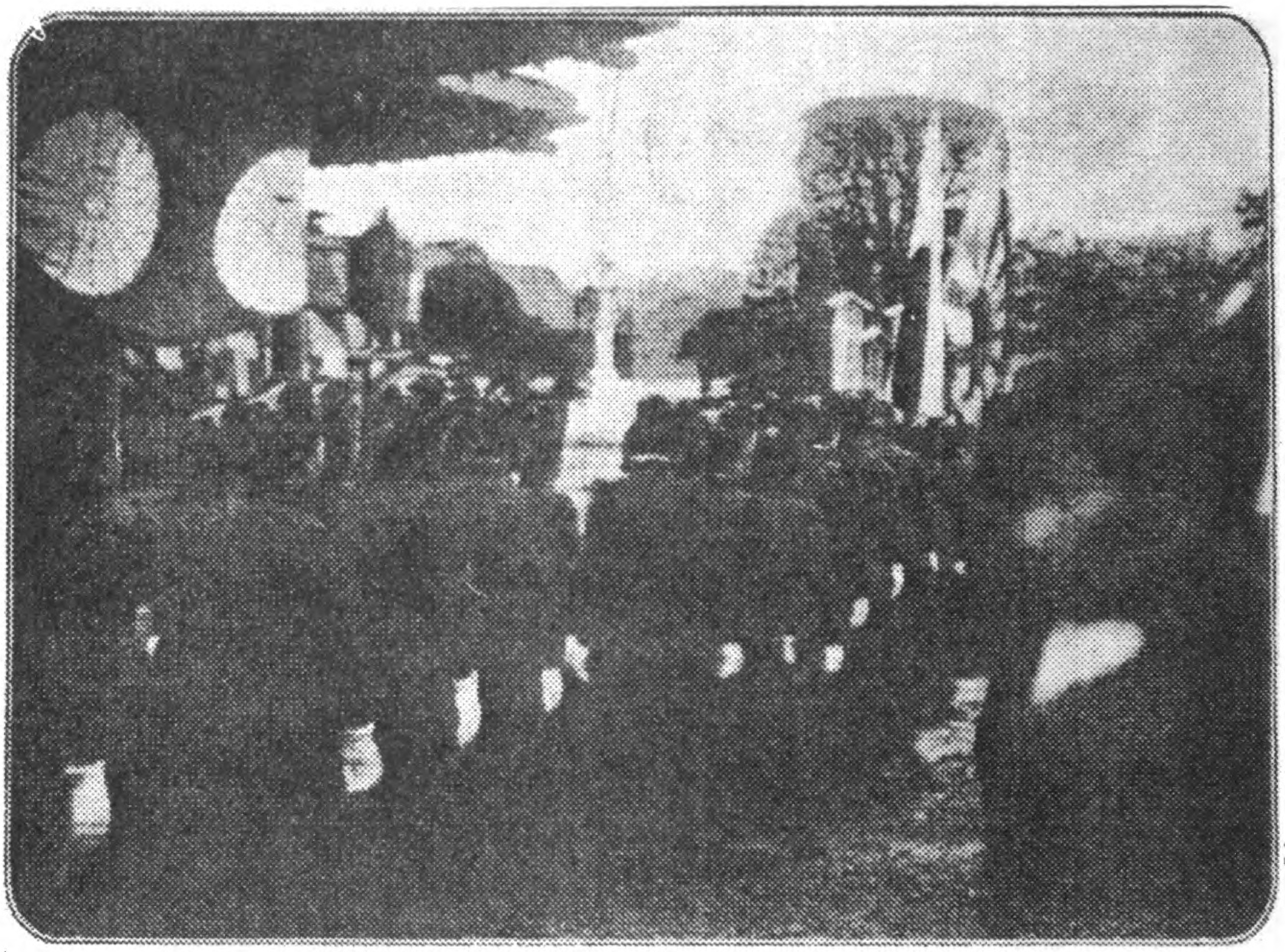


機織と果實細工

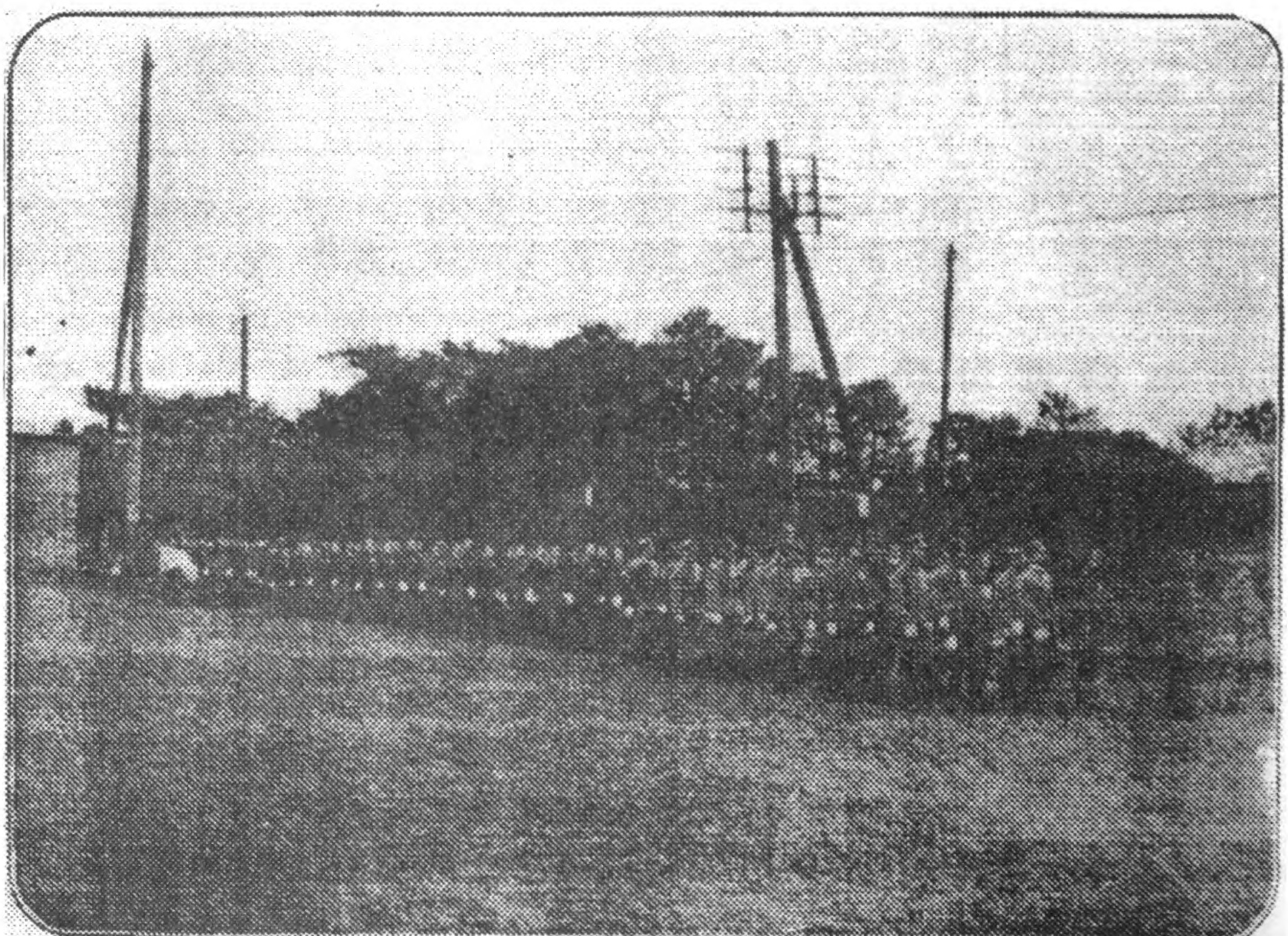




靖國神社



（日本赤十字社救護員參拜）



福羽美靜序文
下田沈天頬校定　指原乙子編纂

女子文章軌範

全壹冊
和装美本
定價金卅錢
郵税金四錢

本書は上長徳の頃より下明治初年に至るの九百年間に輩出せし名媛紫式部、清少納言、相摸、阿佛尼、鵜殿よし子、弓屋しづ子、三島そや子、荷田蒼生子、西三條實公後室、栢原氏の母、馬場存義の母千代、梶女、千代能、その女、河内萩子等の傑作中に就き其の最も精を拔き粹を收めて消息、紀事、紀行、哀傷、序跋、教訓論文の七門に分ち毎葉に其の作法を詳解し倘難句古事地名等には一々其の句意語法出所本源を注釋して、我國文の構造及雅趣を會得するの捷徑たらしむ加之善く本書を熟讀せば又以て本邦婦人獨得の長處たる終身齋家の一助たらん乎、

近來同名類似之品數多相見へ候に付御愛求の節は人魚の商標と高木與兵衛の名義に御注意被下度候



定價

箱入　金壹圓
同　金五拾錢
ニッケルカン入　金參拾錢
同　金拾五錢
紙包　金貳拾錢
同　金拾錢
同　金五錢
ピン入　金拾貳錢



女鑑

第十七年第六號

螢の光

たそがれてゆく窓近く　軒のわか竹ふくかぜに
ちれる雫のそれならで　飛ぶやほたるの影一つ。
あるひは高くまた低く　あるひは遠くまた近く
或はひかりまた消ゆる　行方をしばし打見れば。
空よりおろす黒とばり　あやなき中に一すぢの
光をさへも見とむなり　おもへ世のみち人の道。
ほたるあつめて幾巻の　書よまむより世の暗を
てらすはおのが心ぞと　たゞ一すぢに研けかし。

（（中川愛氷作））



女學生の修養

文學博士　井上哲次郎

近來女子教育が段々盛になるに隨つて、色々女子教育に對して非難をする人もある、所が固より其内容はどれ迄進んだか容易に斷言し難いのであるが、併し内容も進んで來たに違ひない、啻に就學女子の數が増加したのみならず、女子の教育といふ物が一體に高くなつたに相違ない、其方は甚だ測量することが容易で無いからマア推測に止るのである、さう云ふ際に非難をする者が多くなつて來るといふことは、甚だ女子教育の爲に不利なることである、以前女子教育がズッと勃興する徴があつた時に、お茶の水の高等女學校で男女混合の舞踏會を開き、大變失敗を來したことがある、その爲に女子教育が一時一頓挫を來した事がある、ところが其後女子教育が又次第に盛大に赴くやうになり、遂に今日に至つたのである、此際に復た世間の非難を受け一頓挫を來すやうなことがあつては、女子教育の爲に甚だ歎かはしいことであるがその非難も私の考ふるところでは太した事では無いと思ふ、多く非難するのは女學生が生意氣になるとか或はハイカラであるとか、或は輕薄であるとか、或は不品行であるとか、さう云ふやうな色々のことを舉げて女子教育に打撃を加へるのである、併しそれは一つは女子の就學する者の數が非常に増して來たところからして、隨つて其中には幾人か良くない女學生も出て來るといふことは、是は已を得ぬことであらう

と思ふ、どうあつても良くない女學生が出て來るといふことはいけないが、併しながら何分女學生の數が大變に多くなつて來れば、其中にはどれ丈かの屑を出すといふことは今日の不完全なる社會であるから已を得ないことである、けれどもそれにしてもさう云ふことの爲に打擊を受けるのであるから用心をせねばならぬ、

それからモウ一つは女學生と云ふ者が大變に增加して來たところからして一の流行を來した、女子教育が一時の流行となつて、さうして廣く世間の女子を席卷する有樣であるから、田舍の女子が段々東京へ出て當今の教育を受けて見やうといふやうな野心を抱いた、さうして段々集つて來たから益々女子教育の流行が甚だしくなつて來た、さう云ふ所からして此女學生の眞似をする良くない女子が世間にあるやうである、即ち本當の女學生で無い世間の女子が女學生の風をして居るが爲にそれで世間から見ると恰も本當の女學生が惡いことをして居る樣にあるけれども、段々糺して見るといふと其實は本當の女學生で無い者が女學生の風をして世間の風潮に伴つてさう云ふ事をして居るのである、それも確かに今日の女子教育が非難を受ける一原因となつて居る樣である、それからして又多少生意氣になるとか輕薄になるとか色々なことの批評があつても、それは何れも辯護すべきことで無いけれ共、大勢の女學生の事であるからして、どれ丈かさう云ふやうな惡弊も決して無いとは言はれぬ、どれ丈かさう云ふ傾きもあるであらう、隨つてさう云ふやうな色々な女子教育の隆盛に連れて起つた弊害に對しては充分警戒を加へなければならぬ事である、

そこで、今日身體、智識、道德と云ふ三方面に對して、少しく思ひ附いたことを述べて見やう、身體に付ては先づ健康と云ふことに付て少しく考へて見ることを要する、此健康が總ての基礎である、學問とか道

徳とか其他大事なことがあつても、どうしても先づ健康といふことが無くては何にもならぬ、如何程學問が大事であつても健康が充分でないと用をなさぬ、又道徳が如何程大事であつても健康が不充分であると云ふと道徳を實行することが六つかしい、自分の本務を成遂げることは健全なる身體を持つて居つて初めて出來る、健康が充分で無い以上はナカ〱自分の本務を成遂げることが覺束ないのである、それでどうしても第一に健康と云ふものが必要である、健康といふものが充分備つた以上學問、道徳、總て人間に必要なものが用をなして來るのである、要するに健康が基礎である、ところが日本の女子に對しては特に健康を重んずるの氣風を養成することが必要である、日本の女子と雖も一體に健康が劣つて居るなどゝいふことは、容易に言へないけれ共、併し歐米諸國の女子に較べるといふと、どうしても外見上どれ丈か劣つて居るではあるまいか、斯う云ふ感じがするのである、尤も日本人は一體が歐米人よりは小い方であるからして、ひとり女にのみで無いけれども、歐米諸國の女子は餘程身體の發達も立派に出來て居るし、又立派に出來るやうになつて居る、彼國の習慣がさう云ふ工合になつて居る、何分今までは日本の習慣が身體の發達に依り都合好く出來て居らなかつた、夫故に身體の發達を餘程阻害した所がある、どうしても今後日本の女子の身體と云ふものを益々良くなして行かなければならぬ、女子教育の任に當つて居る人から聽くと、女子の身體の健全なる者が比較的少いといふことである、それが果して事實であれば愈々此健康といふことを第一にする考が厚くなくてはならぬ、それに此西洋と雖も國々同じではない、國によつて餘程違ふ、マア私の見たところでは獨逸の女子は概して身體が餘程丈夫に出來て居る、ナカ〱丈夫である、若い時分に丁度程よい位に丈夫な身體を持つて居る、段々年を取ると其代りに隨分困つた事がある、それは段々と肥大になる病氣がある、段々肥大になつて殆ど際限がない、それで非常に困るからどうかして肥

えない樣にといふ事ばかり考へて居る、是にはバタを喰はない、馬鈴薯を喰はないと云ふやうに特殊の食物を避けるより外仕樣が無い、お婆さんが非常に肥えてさうして馬車に乘ることが出來ない、馬車の入口に身體が一パイになつて這入らない、人が後から推してやる、それで漸く馬車に這入る、それから汽車の中に乘ると、二人の場所をタツプリ一人で占めて居る、ナカ／＼大きな身體である、さう云ふ人が大變困ることは西洋の家は日本のやうな低い家ではない、五階六階七階といふのが歐羅巴では通例である、ナカ／＼高い梯子がある、之を攀登る時には恰も小山を上るやうで幾つも／＼梯子がある、お婆さんの肥えて困る人は中休を何度もやる、梯子の眞中まで行つて大息をしてゐる、大儀であるけれ共自分の內が高い所にあれば仕方が無い、佛蘭西の若い女子は通例痩せて居る、尤も年取つた婦人などにはナカ／＼肥えた人がある、英國の女子は若い時はスラリと脊が高くてサツパリして居るが、年取つた婦人には隨分肥えた人があるやうである、それで歐羅巴と雖も一概に論ずる譯にはいかぬが、併し大抵あちらの女子は日本のより強大であるやうである、何分日本の女子は今までの風俗習慣の爲に充分發達をすることが出來なかつた其習慣はどう云ふのかといふと、今日では袴を穿いて大分運動が自由に出來るけれども、それは近來のことで、以前は袴も穿かないから、どうしても充分に足を自由に動かして運動をする譯にいかぬ、小さく步む、さうして而も內股で步いて居る、甚だ不自由なる動き工合であるから、充分身體の爲になつて居らぬ今日は袴を穿いて居るから、其點は大分自由になつて居るが、何分長い間不自由なる習慣で來て居るからいけない、其上に婦人が家の內で坐つて居るに足を曲げて坐らねばならぬ、血液の循環を妨げると云ふやうな不都合なる情態である、さう云ふ事があつてどうも甚だ今まではいけなかつたのである、これから先は充分に發達することを少しやらねばならぬ、それは子孫に影響することはナカ／＼尋常でない、固より

日本では從來美人と言へば痩形で頸などの長いのを理想とした、美人の標本はさういふのである、鶴の頸のやうに長い頸をしたのが美人の標本となつて、餘り肥えたのはいけない、痩せたスラリとしたやうなのを美人と致すものだからどうしてもいけない、女子といふ者はどうかして出來る丈け容貌態度を立派になりたいといふ者がある、虚榮心がナカ〳〵充ち滿ちて居る、女子はどうか出來る丈け肥えない樣にしたい短い頸も成る丈け突出して鶴の樣に見せたいといふやうな風である、さう云ふ所に理想があつた爲に餘り好くなかつた、それは變へなくてはいかぬ、さう云ふ痩つ細いやうな女を理想にしてはいかぬ、もう少し身體の發達した體格の能く調うた所の女子を理想とせねばならぬのである、それならばと言つて又無暗と肥つたから宜いといふのでもない、勿論それを反對に取られちや困まる、お爨婦のやうに唯々無暗に格好惡く肥つて居るのも必しも宜いといふ譯でない、併しながら從來美人として人が考へて居つたのを理想としては充分でない、今後日本の國民が段々强大な國民となつて行かうといふに、女子の體格が今までよりはズッと丈夫になつて來なければならぬ、

それから裝飾であるが、身體の飾りに付て一二を述ぶれば、どうしても女子と云ふものは一方から言ふと矢張り社會の飾りである、矢張り自然界に花があるやうな工合に、人間社會に女子があつて飾りとなつて居る、自然界に櫻の花、梅の花、桃の花、海棠の花、牡丹の花アヽ云ふ物が無ければ實に寂しい、常磐木ばかりではどうしても自然界は寂しい、折々は常磐木の間に櫻だの桃だの海棠だのといふやうな非常な奇麗な花が咲いて、さうして自然界が本當の自然界を呈するのである、さう云ふ工合に女子といふ者は矢張り人間社會の花になつて居る、それでどれ丈かの裝飾といふものは矢張り必要である、其裝飾をなすといふことは、女子の自然の性に出づる、總て妙齡になれば必ず優美なることに向つて精神が傾いて來る

總て美しいものを愛して身體の裝飾をするといふことは自然の性に出るので、強いて之を撲滅してはいけないのである、それならばと言つて徒らにそれを增長させれば際限が無い、今度は奢の方に傾いて來る、驕奢となつて經濟を搆はぬ樣になる、それは亡國の基である、だから其邊は程度がある一方に於て驕奢を戒めて行かねばならぬが、或程度までは裝飾することが必要である、驕奢に傾いてはならぬけれ共、亦殺伐に陷つてはならぬ、總て飾りと云ふものを棄てゝ仕舞つて、男のやうな風をして行くといふことは宜しくない、それは又年齡に依る、段々年取つた人は次第に裝飾を減じて質素にすべきである、總て目立つものを次第に除いて行くといふことは、矢張り年齡と共に相須つて行かねばならぬ、お婆さんが白粉を附けて赤い着物を着けてはいかぬ、

裝飾と云ふものは矢張り年齡と略々伴つて行く事が必要である、秩序を紊すといふことはいかぬ、裝飾は或程度まではどうしても無くてはならぬ、奢はいかぬけれども或程度まで裝飾を心掛けることは女子に取つては已を得ざることである、併し女學生などが其裝飾の度を過して色々な事をするのは餘りドツとしない、色々な物を塗る、日本では白粉を附けることが普通であるが、是は仕方が無い、唯々其他に或は眉毛を書どり、目尻を描き、蘇枋で頰を少し赤く染める、其他色々なアーチフヰシャルの手段を加へて、さうして裝飾するといふことは餘りどうも宜しく無い、西洋ではさう云ふことをするのは良くない、女役者とか何とか少しいけない方の女のやることである、どうも餘り其やうなことをするといふことは決して女學生の爲に取らぬ、裝飾をスッカリ廢する譯にもいかぬけれ共、併し餘りアーチフヰシャルの手段を用ひて自然にあらざることを矢鱈にして得意で居るといふことは決して宜い事で無いと思ふ、

それから身體を保つて行く態度の上に付ては別段言ふことはないけれ共、餘り女學生が男の樣な風をし

て行くのはどうであるかと思ふ、書物などを持つて肩を怒らしてえらい勢ひで風を切つて行く女學生がある、どうも餘程男子と紛ふやうなことがある、矢張り女子は女子らしくして居る事が大變宜しいのである男子の及ばぬ所を、女子が補ふべきものである、男子が又男子の特色を失つて稍々女子の態度を執る者がある、羽織の紐をリボンにて飾る、甚だしきに至つては、男子で白粉を塗つて居る者があるさうである、どうもさう云ふやうなことは大變に忌々しいことで、男子は男子らしくなければならぬ、男子は男子らしい所に男子の好い處がある、女は女子らしい處に女子の好い處がある、所が男子が女子のやうな態度をなし、女子が男子と同樣な風をしてえらい勢ひで行くのがある、どうもそれは餘り宜い事で無い、と云ふのは元來男子は女子の出來ぬ事をする、現んに兵隊に行つて居る、女子が兵隊に行くことはナカ〳〵六つかしい、マア女子の出來ぬやうな方面を男子がするけれども、又小供を育てるとか何とか家庭の側の事はそれはナカ〳〵男子では充分出來ない、女子は男子の出來ない大事な家庭の仕事を受持つて行かねばならぬ、それで相互に性質に於ても自ら違つて居る、兩々相助けて家庭が出來、社會が出來、人類が出來、そこで本當の進歩をなして行くことが出來る、男女性質を異にして居る以上は、其分業地位、秩序等を紊亂すると云ふことは宜しくない、それも亞米利加などは餘程酷いやうである、我日本にあつては一方に於ては歐羅巴の風が這入つて來て居るけれ共、又一方に於ては亞米利加の風が這入つて來て居る、亞米利加の女子は男子見たやうな者で餘程自然に反したやうな有樣が見えるのである、マア日本の學ぶべき所は何處までも英國獨國あたりであらうと思ふ、此英國獨國は寧ろ日本に近い、先年英國のヒユースが日本に來た時に英國と獨國と日本が一番女子の風が好いといふことを言つた、誠に其通りである、私などもさう思ふ、英國と獨國と、日本けれども日本の今までの風が完全であるといふやうに考へてはいかぬ、日本にも好ことがあ

る、けれ共亦西洋の好い處を採つて日本の短所を補はねば、日本の女子の風俗は進んで來ない、それから是は小さな事であるが、私は獨逸に居つた時にチヨツと眼に附いて喜ばしく思うたのは、女學生が町を歩く時に必ず足を揃へて居る、男子も足を揃へて歩くが、女學生が三人四人歩く時にはチヤンと足を揃へて行くので非常に優美に見える、兵隊のやうな工合に足を揃へて行く、所が日本の女學生を見るに一人が右の足を出せば一人は左の足を出すと云ふやうな事で、肩がカチ合つて行く、それではいけない、是は小さなことであるけれども、ナカ〳〵外見に關係がある、それをどうも一人は先へ出る一人は少し遲れる、モウ一人はモウ少し先へ出で肩がチグハグになつて居る、どうもいけない、チヤンと並んで三人ならば三人揃つて行く、それはなか〳〵優美である、私なども日本の習慣を持つて居つたから向ふの人と足を揃へて歩く時に時々間違ふ、間違ふと又直す、さうして行く事にした、それが態度の上の注意である、

次に智識に付て少し思附いたことを述べて置かう、智識といふ者は分てば學問、技藝、此二つに分れるさう云ふ學問技藝を覺えねばならぬ、それが爲に學校へ行くのである、其必要は言ふ迄も無いことである併しながら學問技藝が唯々必要といふことを今更に述べる必要は無いが、併し之に對し注意すべきことは斯う云ふ事である、女子はシヨツペンハウエルなども言つて居るやうに、男子に較べるとどうしても比較的遠い所は見えぬ、女子と雖も遠い所の是える人もあらうけれ共、概して男子のやうに遠い所が見えないそれはどうしても女子は比較的感情に富んで居つて、遼遠なる結果だの錯雜せる關係抔を考へることが出來ぬのである、我々はさう思ふ、併ながら其代りに女子の長所で男子の缺點を補ふことが多い、男子は非常に遠い先のことを考へて心配して居る、それと反對に女子はさう云ふことを見ないで唯々近い所の同情

を以て慰める、さう云ふ先々の事を考へぬでも宜いぢやありませぬかといふやうな風に感情一方に男子を慰藉することが出來る、男女の相互の缺點がかやうにして補はれるのである、併ながら女子と雖も智識を磨きさうして或程度までは、遠い所が見え無くては駄目である、どうしても遠い所を見やうといふには學問に依る外は無い、女子と雖も冷靜なる頭腦を以て前後を考へる智識を持つて居らねばならぬ、どうしても女子は感情に驅られ易い、其感情を常に制して行かうといふのに、何が一番宜いかといふと學問より外はない、智識さへあれば自分の感情を或程度までに制して行く事が出來る、爲に學問をすることが大切である、固よりそればかりではない、一體學問は女子の品性を高める上に大に必要である、さうして學問と云ふものは女子の意外な所に好い結果を及ぼすことのあるものである、例へばそれは女子の容貌に影響を及ぼす、それは大に考ふべきである、女子に取つては容貌といふものが大事で、男子とは大變違ふ、男子は容貌が隨分まづくても構はぬ、が女子に取つては容貌といふものは非常な大切なものである、所が大事の容貌といふものが智識が進んで居らぬといふと、どうしても充分でない、目鼻だの顔の形が揃うて居つても、何處やら愚昧愚鈍に見える、聰明なる精神が身體に宿つて居るやうに見えない、それで智識の有無は容貌に影響する、西洋では美人といふと必ず眼が大きい、唯に大きなばかりではいかぬ、大きな眼があつて聰明なる精神が内に宿つて居ることを示す、それが必要で、唯々目鼻が綺麗に出來て居るといふ丈ではいかぬ、さうして愚昧ぢやいかぬ、聰明なる精神が内に宿つて居ると自ら顔面に光彩を現はす樣に見るそれで相貌に文を附ける、美人と云ふものは智識なくして決して完全なものは出來ぬ、それだから學問の心得に付ては際限が無いが、唯々一つ二つ私の思付いたことを述べて置く、それから技藝、是は學問も同樣であるが、技藝の一點に至つては尚更女子に必要なことがある、此技藝といふ中でもあらゆる技藝の事

で無くして、美術即ち繪畫、音樂、刺繍、造花さう云ふ者は何れも女子に適して居るものである、女子が充分自分の長所を發揮しやうといふには、美術の方面に向ふといふことが宜しい、其他美文なども勿論習うて宜しい、昔から小説家や戯曲家にはえらい婦人が出て居る、第一流の婦人が出て居る、其方面に向つては女子が充分伸びて來る餘地がある、女子は自然に美的の趣味を持つて居る、自分自ら装飾するのでも分る、それで美術美文の應用、それから美術と云ふやうな方面に向つては、ナカ〳〵技倆を顯はす事が出來る、西洋と云はず東洋と言はず、此方面に於ては第一流の女子が出て居るが、之に反して或種類の學術には餘り女子が出て居らぬ、例へば數學、星學、物理學、化學、工學といふやうな方面には出て居らぬ、どうも著名な人は餘り無い、中には化學などでは明かに例外があつて、彼ラヂオムを發見したのは重に婦人である、キユーリー夫婦が發見したけれ共、主としてキユーリー夫人ださうである、して見ると彼のラヂオム發見は二十世紀劈頭第一に於ける非常な發明であるが、それは婦人がやつた、さう云ふ聊かの例外はあるけれども、餘り化學に於てはその他にえらい婦人のある事を聞かぬ、美文美術等に於ては大層あるどう云ふ人があるかと言へば、我々の知つて居る小説家にはジヨーヂエリオツトだの、ゼオルジサンだのが出て居る、日本にも紫式部だの清少納言だのいふ人がある、色々斯う云ふ美術文藝などを以て世に卓絶した女子がある、數へ來れば澤山ある、さう云ふことは又別に秩序を立てヽお話しなければナカ〳〵思ふ所を盡すことが出來ない、唯々一二適例として姓名丈を擧ぐる位に致して置かう、

　それからモウ一つの學問技藝、殊に技藝は女子の獨立といふことの爲に大變必要なことである、女子が若し獨立しやうとすれば技藝が殊に必要である、技藝の中でも殊に美術なり、何なり覺えてさうして獨立の生活に關することを、工夫すべきである、日本では近來女子の獨立といふことを言ふものが殖えたが、獨

立といふ事は女子にナカ〳〵さう容易に出來やう筈がない、兎に角女子の獨立は日本では西洋程必要はないマア概して言ふと矢張何處へか嫁入することが目的で無くてはならぬ、其大目的は變るべきでない、即ち目的は矢張結婚して家庭を作る、斯う云ふ事になつて來る、此目的が總てのことに影響して來る、身體を大事にするとか、學問技藝を覺えるとか道德を修めるとか云ふやうな、總てのことが此目的に依つて支配されて來る、此目的が日本に於ては未だ變らぬ、所謂賢妻良母といふことが一般の法則として、決して變るものでないと云ふことは明かである、併ながら又例外も一つ考へなければならぬ、と云ふは或女子は生來學問又は技藝が好きであるといふ樣な事がある、一つ大變にやつて見たいといふ自然の嗜みがあるさういふ人は自分で獨立して學問なり技藝なり專攻して、專門家になつて進んで行く自由を持つて居る、それは勝手である、だから其道を開くが爲に高等女子敎育が備はつて居る、かうして段々女子敎育が進めば帝國大學に這入れる、今までは志願した者が無い、本當に志願して來ればそれが問題になつて大學に入れるであらう、獨逸では私が初め行つた時に女子の傍聽は稀にあつたけれ共、本當の學生となつたものはなかつた、其後段々に矢張り女子が大學へ這入る樣になつた、本當に各大學の學生となる事になつて、日本と雖も決して帝國大學が未來永劫女學生を拒絕すると云ふ譯で無い、今では帝國大學令に單に學生とあるが、あの學生は女學生も包含して居るか、或は男學生に限るかといふことの規定は無い、今までは固より男學生の積りである、併しながら女學生が出來れば女學生が其中に這入つてならぬといふことは大に問題になつて來る、そこで特殊の學問、技藝に對して趣味を持ち、又天才を持つて居る女子であれば、皆自分の自由に依つて何處までも其專攻の學科を修めて行くが宜い、其爲には女子高等師範なり、又女子大學なり又更に進んで帝國大學に入る事も他日出來るであらうと思ふ、それともモウ一つは不幸にして不具である

とか、又は容貌が極めてまづいとか云ふやうな時には嫁入が少し覺束ない、さう云ふ人は早く何か特別に造花なり、刺繍なり、裁縫なりを專攻して、假令結婚が出來ないまでも、一生の間自分で暮す丈の事を仕込んで置かねばならぬ。どうも早く決心をして置かぬと先きに行つて困るのである、さう云ふ人の爲めには獨立といふことが必要である、良妻賢母ばかりでない、

それで此智識のことはそれ位にして置いて、道德のことに付て、私の思附いたことを一つ述べませう、それは女子はどうも自然の性質としてナカ〳〵情愛が深い、其情愛の深いといふのは宜いのである、好く用ゐれば大變宜いのであるけれ共、一方に感情の脆い所があるが爲に、又非常に嫉妬心が深い、私の察する所では、女學生と云ふ者は、兎角相互の融和が六かしい、女子の集つたところでは融和といふことが大變六つかしいといふことを聽くが、女子同士寄つて何か事を始めるとどうも旨く行かぬ、そこに男子が這入つて操縱すれば旨くいくけれども、女子丈集つてやると感情が衝突して、小さな爪の先位のことまでも感情が融和しないといふ事である、それは決して日本丈では無いであらうが、總て女子はさう云ふ性質を持つて居る者であらう、それで大成を期する時にはどうしても嫉妬猜忌の念を押へねといかぬ、どうも女學生間の一つの弊は一人の人が能く出來ると云ふと多數の人がそれを嫉む、ナカ〳〵快く其人の長所を認容することが出來ない、何となく心の中でどうかしてあの人の出來ないやうにしたい、ア、云ふ人が出來るのは邪魔であるといふ感じがある所から、其人の勉强するのが自分の氣に入らない、兎角人の長所を嫉む、此點は女學生が大に抑制して行かねばならぬ所である、

殊に日本の女子にあるところであらう、英語で言ふフランクと云ふことは缺げて居る、固より人は誰も秘密を持つて居るから、何もかも云ふ必要は無いが言つて差支へないことまでも言ふことが出來ないとい

ふ風がある、兎角愉快に打開けて話することが少い、さう云ふ所から聊かのごとも内に噛んでそれが一種の感情となつて蟠つて居るが爲に、融合一致といふことが出來ない、それが女子の一つの弊、男子にも嫉妬猜忌は無いとは無いであらうが、男子の方は餘程淡泊である、女子の方は餘程執念深い、それも固より或程度までは必要である、女子に取つてはさう云ふとが何處までも無くてはならぬのであらう、必要なる精神狀態であらうが、あまりそれが強いと、どうも甚しく進歩を妨げる、女子教育の前途の爲にならぬのである女子の怨みと云ふものも、又非常に深い何か怨があるとナカ〳〵融和せぬ、それで女子教育に深く通曉して居る人の話を聞くと、女子は信仰すれば其信仰はナカ〳〵厚い、長く保つ、けれども一旦怨みを受けると其怨を解くことがナカ〳〵容易でない、男とは其點が大變違ふ、これは女子の大に誡むべき所である、

（文責在記者）

家庭に注文の二ケ條

農學博士 法學博士　新渡戸稻造

各家庭に向つて、お頼みしたいことは、時を定めて家族がより合つて、五分でも十分でも書物を讀むことである、それを朝の食事後とすれば、その時間は客があらうが無からうが、もし客が來たならば、僅かの時間故待たして置いても、それを勵行する、耶蘇教信者なれば聖書の一節でもと云ふ所であるが、さうでない家庭には、わかり易い教訓の歌とか、徒然草の一章とか、經書の中からでもよい、その日の思想を養ふものを、家族一般に、今日はこの主義でやらうではないかと云ふことを暗に示す、たとへば短氣は損氣と云ふことの話をすれば、云ふた人も言質をとられて居るやうなものであるから、その日は少々腹の立

つことがあつても、勢ひ勘忍袋の緒を締めるやうになる、私は毎日紙片へ注意すべきことを書いて、今日はこれだぞと臺所へ貼出し、その說明をするやうにして居る、さればその日は一つの善事が行はれる、それが毎日の事であるから、自然家庭は自分の理想に近づくやうになる、それは召使の者も一つにしての話である、

それから今一つと云ふは、家族より集つて、朝なり夕なり、五分間か十分間か、皆寄合つて坐禪をするやうにして心を落つけることである、銘々がひそかにやつて居るのはあるが、一人でそれをすることは別として、私の注文するのは家族一同が、耶蘇敎の默禱のやうに、無言で端坐する、就中忙がしいからそんな事はして居られぬと云ふ人もあらうが、忙がしければ忙がしい人ほど餘計にそれをして、心を落付けねばならぬ、仕事をしたり遊んだりして經つ五分や十分は、瞬く程にも思はないが、その間無言で端坐して居ると、その一日の迷が減ずるやうに思ふ、何うしても我々凡人は迷ひ易いものであるから、毎日僅かの時間を利用し瞑目端坐して精神を鍛る、これを妻君とか子供とかは一人づゝでは出來ないから、家族より合つて、細君にも、子供にもその癖をつけるやうにする、必ず精神の修養に利する所がある、

以上の二つの注文は、一日に僅か十分か十五分を費やすに過ぎないが、これによつて一家に規律立ち、一家を團欒することが出來る、私は經驗上多大の効果を得て居るから、これを更に多くの家庭に試みらるゝやう希望するのである、

翫具と兒童教育

鷹田東京幼稚園長談

近來中流以上の家庭に於ける小供の間に歡迎され居る教育玩具と稱する魔術箱、模型軍艦、自働車等の玩具は一個二三圓よこり十五圓位までありて中等以下の家庭には容易に需めらるべき品にあらざれど、子煩惱の親達は、兎角身分不相應の玩具を買與へて嬉しがり居る樣なるが、こは頗る考へものにて、常に小供の云ふがまゝの玩具を買與ふる時は、子女は何物をも得らるべきものと増長し、遂には矯正し難き我儘者となる事あり、然るに親達の方では、頑是なき小供心に僻み根性を起させては可愛相なりとの懸念より、小供の要求する毎に、無下に斥けかね、小言を云ひ乍もつい其希望を充たさすが常なり、されば小供は追々見る程のものを欲しがり、果ては珍奇なる玩具は他より先に求めざれば、承知の出來ぬ我儘ッ子となり了るなり、彼の身分不相應なる服裝をなし、柄にもなき贅澤をしたがりて、自らも苦めば人よりも指彈せられ、遂に不料見を出して社會に貌出しも出來なくなる、青年男女は、往々斯る習慣より養ひ來る事多きものなれば、人は幼少時より不自由と艱難に耐ふる習慣をつけしめ、殊に玩具の如きは、實物を買ふて與ふるよりも、成べく自分に製ばせしめて、意匠と發明と工風との心を養成せしむるは、小供の將來に就て大に益する處あるべし、若し代價の高きも厭はず贅澤の玩具のみ與へおく時は、小供の智識は却て阻害せらるゝ傾あり、彼の美麗に裝飾したる刀劍、精巧に組立たる軍艦なども最初こそ珍らしきまゝ、大切にして嬉しがりもすれ、間もなく倦き果てゝ、永くは同一の玩具に滿足するものにあらずされど今假りに一本の棒片を與へんか、棒は杖刀にもなり槍にもなり、鐵砲にもなれば天秤棒にもなる故、時に蕎麥屋の眞似をして泥を打伸べる事も出來るべく、又女子ならば一個の紅猪口が皿になり、椀になり、盃になり、茶碗にもなりて土饅頭を拵る型に代用さるゝなり、恁の如く種々勝手に想像上の形態を附加して、其用途を變化せしむる餘地あるを以て、小供は比較的複雜精巧なる玩具よりも、却て一片の木竹又は球、小箱の如き單純なるものを好む習慣あり、然に高價な物でさへあれば、何時迄も喜ぶものゝ如く思ひて、ソチ壞しても惡いとか打放てはならぬとか、玩具の保管方に干涉する家庭も少からざるが、コハ未だ深く解せざる親達の罪なり、要するに小供の玩具は必しも精巧なるを選ぶに及ばず、又嘸かし欲しからん買ふてやりたしなどゝ親達の羨むほど年小供は玩具に憧がるゝものにあらざれば、玩具に限らず分外の贅澤品を與へざるこそ宜けれ

育兒の注意

醫學博士　弘田長

恐るべき病氣

歐洲では近來まで、小兒に結核性の病氣は餘りないと云うて居つたが、段々研究の結果決して少くないと云ふことが確められた、一年未滿即ち誕辰前の小兒には少いが、成長し行くに從うて起つて來る、而して十四五歳よりは段々其數を增して來るやうである、スキツルランドのベルン大學敎授デンメン氏の調査によると、百人の死者に就き三十人が結核性の病氣の爲めに死し、獨逸のミルレル氏の調査は、同百人に就き三十三人であつたと云ふことである、我國に於ては調査が不充分であるが、私が東京大學で調査したゝけによると、死者四百九十九名中百五十六人で、百人に就き三十一名二分に當り、歐洲と殆ど大差はない斯樣に恐るべき病氣が小兒を犯して居るのに、世人は未だ充分の注意を拂うて居らぬ樣である、

さて結核は遺傳病だと云うて居るが、コツホ氏が研究の結果、之は一種の黴菌であつて、

傳染の性質

を有して居る病であると云ふことを發見せられ、醫學上に一進歩を來した、此の如く傳染的性質を有するものであるから、小兒を持てる方は注意の上に注意しなくてはならない、併し場合によつて傳染するとせぬとがある、即ち身體が無病健康なれば容易く傳染しないが、衰弱して居るとか、多少病氣に罹

つて居る時は、最も傳染し易い時である、一例を云へば小兒の齒の生へる頃などは、最も傳染し易い時であるから、此時には決して等閑に附することなく充分に氣を附けなくてはならない、夫から

百日咳

であるが、これは昔からある病で、餘り人は注意しない、これ大いなる誤で、一般に癩病と云ふと非常に嫌ふが、恐るべき結核の導火線となる百日咳を輕んずるは、何たることであらうか、癩病は表にあらはれるから忌み嫌ひ、百日咳は目に見えぬから餘り注意せぬのかも知れない、次に

痲疹

これも百日咳同樣一向注意しない樣である、痲疹も亦此結核を導き易きもので、以上兩病とも氣管支カタルを起す事がある、一體カタルは既に普通の狀態ではないので、萬一結核の黴菌が空氣中に遊離して居ると、大抵此病に感染するであるからあまり輕視しないで、充分の注意をして貰ひたいのである

幼稚園とか學校

とかの如き處は、多くの小兒が四方から集つて來る處であるから、此多き小兒の中には、必ず結核性の病氣を有して居るものが居るであらう、シテ見ると傳染病から觀察をすると、中々危險な處である、近來一般に幼稚園に小兒を送ることが習慣の樣で、敎育者の側から云へば、成るべく多數の生徒を順序正しく敎育することが必要であらうが、醫學上から見ると危險千萬なことである、されば敎育と衛生とは一致するに困難である、それで幼稚園や學校には醫師を抱へて置くことが必要である、目今とても無くはないが、併し校醫と云ふも名稱のみの樣であるから、父兄の方で注意することがなくてはならない即ち此設備の比較的充分な學校ならば、少々遠くとも其學校におくる樣にしなくてはならぬ、若し父兄の方で此樣に注意したならば、學校の方でも其必然の結果として此事に注意する樣になるであらう、自分の愛子を何の考へもなく學校に通はして置くこと

は、決して父兄の責任を盡して居るものとは云はれない、小兒が學校から傳染して來て、弟や妹にも傳染した例は澤山あるが、注意の上にも注意をせられたいものである、私は小兒を幼稚園に入れることは反對であるから小兒は一切送らない、幼稚園には外の學校の樣に必ず入れなくてはならぬと云ふことがないから、

感冒

も亦結核の媒介をなすものであるが、これも一般の人は輕視して殆ど健康と病氣の境であるかの樣に思うて居る、素人が見て普通の風邪であると思ふても、それが案外にも肋膜炎の原因となるか、他の病氣であることがある、前述の四百九十九人の死者の母の中にも、立派に是迄は大病に罹つたことはない、と斷言したものがあるが、診察の結果、眞正の肋膜炎に罹つた者があることは少くない、であるから、



感冒に罹つても診察して貰はない間は、決して早飲込に濟し込んで居てはならぬ、其他種々の理由より傳染するのである、呼吸器が一番多くあるから充分に注意しなくてはならぬ、それから

口から口へ

食物を移してやることなどは嚴禁すべきものである、世の母は子の可愛さのあまり、往々これをやる

が、これは誠に恐ろしいことである、彼のデンメン氏の調査した中にも、此爲に結核性の病氣に罹つた小兒が随分あつたとのことである、さてどうしたら

感冒に罹らぬ樣

に出來るか、それは色々あるが、どの子供も身體の工合が違つて居るから、斯樣にせよと一樣に云ふことは出來ないが、兎角身體を固めることが大切である、身體を固めると云うても、其方法が種々あるが、第一は運動で、これは云ふまでもなく能く呼吸をするし、胸膈が開く、隨つて血液の循環がよくなる、第二は純良の空氣を呼吸せしむること、第三は冷水浴であるが、毎朝冷水で絞つた手拭で拭てやる併し之を爲すには小兒の强弱に大に注意をしなくてはならぬ、醫師に聽いてからにするのは最も良き方法である、第四は寢衣で、起きて居る時と床に入る時とは衣服を異にするは勿論で、寢衣は成丈薄い方がよい、私には學齡前後の小兒がある、單衣一枚である、折々知己に參つて段々見た所、單衣の外にフランネルなどを重ねて居るのが随分あるが、これはあまりよろしくない、以上は感冒を豫防する簡易なる方法の一二である、それから

營養分

のことであるが、一般に滋養物を多く用ひさへすればよいと思ふて居るが、これはよくない、必ずこれに運動が伴はなくてはならぬ、一體營養物に就ては随分誤解がある、即ち大抵は化學上からの觀察のみで、胃に入つてからのことには一向注意がない樣である、例へば豆腐は蛋白質が多いからよろしいと云ふ、成程さうである併し胃がそれを充分に消化することが出來ねば却つて害を及ぼす、ビスケットは一般に流行し、小兒にも與へられて居るが、これも前同樣である、私は時々誕辰前後の子がビスケットを持て居るのを見るが、實に不親切な母だと思ふ、どうか母たる者は化學上の觀察を第二にして、先づ愛子の胃の力を研究せられんことを希望するのである、次に

菓子について云へば、日本從來の菓子の中にも、隨分よい物がある、カステーラ、麥煎餅、米から出來たおこしなどは用ひてもよろしい、又駄菓子中にも隨分よい物がある、斯樣であるから、歐州から來たもので、又滋養もあるからと云うて、態々ビスケットなどの菓子を用ゆるのは、淺見者流と云はなくてはならぬ、

結婚と年齡

楠田病院長　楠田謙藏

日本婦人の結婚年齡と、擧兒の關係とを調查し、其の果して如何なる年齡に於て結婚するを以て、最も生殖に適當するかとの證左を擧げ、以て余等が本來の希望を達せんことを期せんとするに當り、先づ日本現代婦人の結婚年齡が如何なる程度にあるかを調查し得たるを以て、玆に之を記述せんと欲す、

[illegible]　[illegible]

予が調查に供したる材料は、之を楠田病院クリニックに來りたる婦人にとれり、予の冀望は、原來此種の材料を病院外に獲んとするにありき、されどこれ言ふべくして行ひ難きこと也、或は之を工場、學校につきて需めん乎、同一種類の生活者に偏局して汎く一般の階級に通ずることを得ざるのみならず、爾く既婚者の多數を以て組織せられたる團體は、之を見出すことすら尙なし能はざる所なり、

予は多數の材料を得んことを望めり、されど婦人の通性は　此種にかゝる事實の眞相を表白するもの稀なるものなり、若しあやまりて其材料の不確實なるものを混入せば、其成績の徒爾なるべきを以て、予は注意に注意を加へて、材料の精撰に力めたり、

予は二千餘人の婦人につきて、其の最も精確なる答をなし得たるもの七百七十六人を得たり、此七百七十六人は、殆んどH本全國の各地に亘り、且諸種の階級に亙れるものなり、故に之を日本婦人の結婚年齡と概稱するも不當ならざるべきを信ず、

本調査をなすに當り、明治五年十一月九日以前に生れたるもの、若くは結婚したるものには、其の生年月若くは結婚年月に一ヶ月を加へ、以て滿幾年幾月と換算したり、

七百七十六人中最も早く結婚したるものは、滿十三歳五ヶ月にして、最も晩く結婚したるものは、滿三十七歳八ヶ月なり、甲は大阪の人にして職業不明乙は東京の人にして女敎師たりしものなり、

今此七百七十六人を結婚年齢に從ひて、各年齢に比較せば、最も多き結婚年齢は、滿十七歳より同十一ヶ月迄の一年にして、七百七十六人中の百十九人は此に屬す、即ち總數の一五、三布仙なり、之に次ぎて多きは滿十八歳より同十一月迄の一年にして、總數の一四、三〇布仙を占む、これより前後の一年は、兩者殆んど均一にして又之に次ぎ、更に之に次ぐものは滿二十歳より同十一ヶ月迄にて、以上の五ヶ年は、最も多き結婚年齢なるを以て、これを結婚の中期年齢と稱することを得べし、此中期年齢より

漸く長ずるに從ひて、漸く結婚數を減じ、滿廿六歳より同十一ヶ月迄の一年に至りては、僅に總數の一、〇布仙餘を占むるに過ぎざるに至る、又此中期年齢より漸く若きに從ひて漸く結婚數を減じ、滿十五歳より同十一月迄の一年は總數の八、〇布仙餘に減じ、十四歳に至りては大にその數を減ず、故に滿十四歳より滿十五歳十一月迄の二年間は之を早婚年齢と稱し、滿二十歳より廿六歳迄の六年間は之を晩期結婚年齢と稱することを得べし、此早期年齢よりも更に早く結婚したるものは極めて少數にして、いづれも〇、一布仙餘に過ぎざるを以て、之を破格早婚年齢及破格晩婚年齢と稱することを得べし、殊に著明なるは滿十三歳十一ヶ月前と、滿廿七歳後とに於て、結婚數の頓に減少することと是なり、

以上記する所によつて、適當なる結婚年齢を、その數の最も多き所謂中期年齢とすべきか、人或は早婚の弊を説くものあり、其説く所固よりよし、されど漠然早婚と稱し、晩婚と呼ぶも、素と待對的の稱

呼のみ、予は思惟す、生殖に最も適當なる年齢の指定を得て、以て始めて之が標準となすべきことを

予は今を去ること十餘年前、此種の問題を研究せんと欲し、兒を擧げたる二百三十夫婦に就て、其夫妻の結婚年齢と、その出産兒の多少とを調査したるに夫婦ともに、二十歳以上二十五歳以下に結婚したるものは、兒を擧ぐること最も多く、此より早く結婚するものも、此より晩く結婚するものも、共に兒を擧ぐること少きを見る、

予は更に此兒を擧げたる二百三十婦人に就きて、その結婚年齢と、其結婚後第一兒を擧ぐる迄の歳月との關係を調査したるに、亦同じく二十歳乃至廿五歳の間に結婚したるものは、最も早く初兒を擧げ、其全數悉く第一年及第二年内に初兒を擧げたるを見る、而して之より早く結婚したるものも、之より晩く結婚したるものも、共に之に及ばざることを知るべし、

予は前記の統計に供したる人員の甚少數なりしを以て、或は眞相をあやまる事あらざるかとの懸念なき能はざりき、此缺を補はんが爲に、去る明治三十五年十月以後予が助手有馬才三子の懇切なる補助を得て、更に三百六十六人の兒を擧げたる婦人に就てこの調査を再びしたるに、前成績と同じく、滿廿歳以後滿二十五歳十一ヶ月以前に結婚したるものは、結婚後一年以内に初兒を擧ぐること、之より早く結婚したるもの、及之より晩く結婚したるものに比すれば、殆んど二倍の多きを見るべし、

故に予は前記の結婚の中期年齢より、前後二回の調査の成績によりて、日本婦人の生殖に最も適當なる結婚年齢は、二十歳乃至廿五歳の間に在りと云ふことを信ずるものにして、且つ所謂早婚又は晩婚なる稱呼は、此年齢の前後を稱すべきなることを信ずると同時に、日本婦人が事實早婚の弊ある、前述の如きは最も歎かはしきことなり、況んや妻となるべき修養の未だ足らざるに於てをや、

一國の基礎は一家より成り、一家の基礎は夫婦よ

り成り、夫婦は婚姻によりて成り、婚姻は子孫をつくるを目的とすと云ふことの過誤ならざることを知り、又各國に於ける人口繁殖の多寡と國運の消長との相伴うて進退することを知らば、生殖に適當なる年齢を指定することの甚緊要にして、徒らに机上の議論に止まるべからざるを知るべきなり、

水と衛生

理學士　田中東洋

　世の諺に尊きものを水火と云ふが、火はなくとも生活し得るものは少くないが、水がなかつたならば天地の間に生氣あるものは、悉く枯死するであらう或生理學者は、人の體を分析して、其百分の六十三は全く水より成立つたものであると云うて居る、水の生活に必要なるは言ふまでもなきことである、水には色々の種類があるが、其元は皆一つで、太

陽の温度によつて、常に其所を變じ、又形をも變じて居る、即ち地上の水は太陽の温熱に蒸されて、水氣となり、空中に昇る、水氣漸く冷かなる時には凝りて雲霧となり、尚冷氣の増す時には露となり、雨となり、雪となつて再び地に下り、それが幾度となく繰返さるゝ間に、空氣又は地中にある種々の物質に出逢うて、己の質を變じ、人の飲用に適する良水ともなれば、飲用に適せざる不良の水ともなる、人の健康不健康は、この水の良否に因ること多く、或一定の病は、全く水の良からぬ爲に與るものであるから、水を撰用する注意を要するのである、

　雨水は降る時に大氣を洗うて、氣中に含む性分を取るもので、大氣の性分は雨水も亦之を含んで居るから、清淨なる雨水は飲料に適するが、東京の如き人家の稠き所で、製造所などの多き所では、種々の蒸發物を含み、清くなり得べからざる所へ、其雨を受る器の質によつても汚さるゝことがあつて、その用法もむつかしい、まづ雨水を飲用にすることは出

來ぬ、東京は雨水はさて置き、井水を用ゐることも少く水道より容易く供給されて居るが、まだ山の手では井水を飲用にして居る、本郷邊では目の廻るほどの深いのがあるが、三十尺に達せぬ井は、通常井底より水を受けずして、井の側より横に受くるが故に、地表より浸潤したる汚物が自然に流込んで、衛生上最も恐るべきものである、獨逸などでは井を掘るに掟があつて、十六尺以上のでなければ、飲用を許されぬとのことである、

要するに清らかなる水、清涼透明で、臭氣もなく爽冷なる水でなければ飲用に適せぬのであるから、水を清くして飲むといふことも覺えて置かねばならぬ、その確實なるは煮沸するのであるが、又は水を凍らせば水中の汚物を遺して、水分のみ凍りて清くなる、海水の如きも、この仕方にて飲料にすることが出來る、又蒸溜すれば同じく海水を飲料にすることが出來るのである、明礬又は石灰水を加ふれば、水中に含む汚物と共に沈澱して、水の上層は清くなる、又過滿俺加里を加へて、水を酸化せしめて清く爲す法がある、支那では勞水と稱して、水を手杓に取つて、反覆空中にて注下し、空氣を混じて酸化せしめたものを用ひる仕方がある、

以上の數法中、煮水は其效確實で、且つ簡易の良法であるが、一時に大量の水に用ひることは出來ずその他の法も容易に行ふことは出來ぬ、その最も簡易で費用もかゝらず、大量の水に施し得るものは、濾過法で、此法は本邦でも早く行ひ、又支那では唐宋時代より行はれて洗水と稱して居る、

水を濾過するには、砂を用ゐるものと、木炭を用ゐる物等とがあるが、木炭は飽滿し易く、汚物を吸ふ力を廢止するも、砂は其力久しきに耐るか故に、砂の方濾過には適し、砂礫々々の水が常に清淨で、夏日旅客の渴を醫する事あるにても、其力の大なることが知らるゝ、

すべて飲用水は、先づ化學家に托して、其水質の

試驗を受け、善良なるものはその儘用ひてよいが、少しく疑のあるもの、又最良の水でも、大雨の後濁つた時等は、濾過して用ゐるやうにし、夏時殊に惡疫流行の時などには、用ゐる前に必ず一回煮沸し、それを貯ふるには、必ず其器を閉鎖し置かねばならぬ、夏時は冷水よりも麥湯にして用ゐる方よし、麥湯は冷して用ゐる事が出來るから、

渴に任せて一時に多量の水を飲むのは、胃を傷ひ易いからよくない、殊に烈しき勞働の後などでは、貪飲を愼まねばならぬ．それに引かへ、渴する時に強いて飲水を忍ぶのはよくないことで、特に病中渴甚しき時に、飲水を與へぬ時は、身の運營を妨げて健康上に大なる害がある、

雜用水は飲料水の如く淸淨なるを要せぬが、これも不潔の水を用ひてはならぬ、例へば鐵氣多き水で衣服を洗濯すれば、其質を惡くし、鹽類多きもので建築物を洗滌すれば、吸收の性多くて人の健康を傷ひ易く、又汚物又は病毒を含む水を地に撒けば、これよりその毒が傳播することがあるから、大に注意せねばならぬ、

細君と讀書

黄 離 女 史

日本婦人の弊害は今でも讀書をおつくうがる事である、年寄の母や姑は娘や嫁が新聞でも讀んで居ると、すぐ小言を言つて、新聞を讀む暇があればさつさと仕事をせよ、と叱りつけるのがよくあるやうであるが、新聞ですら其通りであるから况して讀書となれば、さうたやすく出來ない家庭も實際あるに相違はない、

併し舊弊の年寄の頑固な思想は、今から改良する事は中々むつかしいから、それは退けものとして、明治の敎育を受けた人だけでも、讀書の習慣を失はぬやうに、否新に養うて貰はねばならぬ、

今年齡四十五才位より下の人は、大抵明治の學校

教育を正しく受けた人である、決して頑固な老人と比すべきではない、然るに其讀書を好まぬ事に至つては、やはり天保の老婦と擇ぶ所はない、彼等は異口同音に其子の生意氣を憤り、母親の言ふ事をきかぬと口説いて居る、これは子供にも惡い所はあるであらうが、大抵は母親が讀書をしない爲に、智識が缺乏して、一定の見識が立たず、子供を治める丈の責任も盡されない樣になるので、つまり自業自得といはねばならぬ、

勿論人は色々であるから、讀書をしないでも常識を備へて、立派に子供の上に權を持つて居る人もないわけではない、併し此は普通以上の人間である、即ち天禀に賢明の質を具へた人に限る、それでも讀書をして居る人と、して居らぬ人とは智識の範圍が大に違ふから、まして凡庸の人がさつぱり讀書をしないならば、智識が缺乏して來るのは當然の事である、

けれどもかく云へば第一に攻撃の矢は集るに相違がない、即ち女子は讀書をして日を送られるものではない、學事に關係ある人なら格別、普通の家の妻女となつたものは、子供の世話や裁縫炊事に日も足らぬ有樣であるに、どうして讀書などがして居られるものか、といふのが誰でも言ふいひわけである、人はいひわけをすれば何とでもいへるが、辨解をして人の同情憫察を求めるよりは、精勵刻苦して讀書の暇を作る方面に心を入れなければならぬ、

辨解をしても愚者になりたいといふ望ならば致し方もないが、苟も自ら引を取らぬ樣に妻たる任を盡し、子供を立派に育てたいといふ望があるならば、妻君もやはり苦學を怠つてはならぬ、吾が知れる一婦人は、年齡四十五才以上である、夫を失うて以來貧に陷り自分の手一つで老母と子女を養はねばならぬ境遇となつたのであるが、學問は好であるといつても自立する丈の力もないので、止むを得ず一時の窮を凌ぐ爲に　ある飲食店を出す事になつた、併しそんな時でも決して讀書は止めない、晝は全く暇か

ないので、夜店をしまつてから寐る時に必ず讀書をする、而も規則正しく、どの樣に疲れた時でも一夜も止めない、新聞雜誌は勿論多く愛讀するが、其最も好んで讀むのは聖書である、といふ事は親しく聞いた實話である、飲食店の家婦の身で、自ら家族を養うて居る人でも、心さへ用ゐれば此通りに出來る事であるから、一概に出來ぬといふ理窟は決してない筈で、それも出來ぬといふはつまり讀書を避ける口實にすぎない、勿論朝から晩まで讀書に耽つて居るやうな細君でも仕方がないが、其責任を全うする爲に、智識の缺乏を感じたならば、是非一日の中、其幾分かを割いて讀書の爲に利用する丈の覺悟がなければならぬ、

日本の家庭では妻が夫の客と趣味ある談話を自由にする事の出來る人は甚だ稀である、それは畢竟妻が夫の學問の片端も窺つて見ないのみならず、良人の職業上の談話を耳にきく事すら面倒がつて局外者の位地に立つて居る爲に、良人との談話も只普通の世俗の話より、外に種もなく、まして良人の朋友に對して滿足を與へる丈の話の出來る筈もない、それ故わざ〳〵尋ねて來た客でも、良人が留守の時は、なるべく上にあげずに還すやうになし、良人の在宅の時は良人にばかり、客を任せて、自分は下女の樣に茶菓馳走の斡旋のみをして、兎角其席に出で來るのを嫌がるのが普通一般の細君のならはしである、なぜ其樣に蔭にのみ居るのがよいかといへば、話が出來ぬからといふ、客と話が出來ないのは平生智識の素養の足らない爲で、智識の足らないのは、平生良人がいかなる職務で如何なる趣味を持つて居るかといふ事も知らず、新聞雜誌を涉獵する事もない爲に、時世に適する談もなく、まして客人に相應な學問的談話、職業的談話をする丈の勇氣がないので、自然人と話をするのが嫌になり、人と話をしない爲に話の材料を人から與へられる事がなくて、新しい事を聞く便宜もなく、漸々智識が狹くなるばかりである、

故に讀書はいかなる年齢の人と、いかなる職務にある人とを問はず、是非之を勵行せねばならぬ、男子は天性智識に富んで居るから、讀書をしない人でも、大抵は相當の常識を備へ、又ある一方に發達した才能技倆もあつて、各々特長を持つて居るので、話が活き〳〵として居る、之に反して女子の文字に遠ざかつて居る人は大抵思想が散漫して、一定の問題を考へる力もなく、其話は人の噂や衣服食物の事などで、殆んど趣味といふものがない、故に婦人の位地を一層高めんとするには、先づ第一に讀書を奬勵せねばならぬ、讀書をせずに智識の足らないのを訴ふるは實に愚の至である、讀書と云へば必一定の書物を規則的に研究する樣で、一寸面倒に感ずる人もあるであらうが、併し必しも學校の學課の樣にして研究するのが讀書といふわけではない、すべて利益のあり相な書物や雜誌を擇んで適宜に讀んでも讀書に相違はない、細君の讀書はあまり正則に一つの書を初から終まで讀み通すよりは、却つて種々の物を讀んで應用の智識を求める方が得策である、併し婦人は其良人の職業に因つて全く境遇が變り、從つて智識の養成も其方面に向つて各違ふ所がなければならぬ、學者の妻は學問的趣味を持つべく、宗敎家の妻は宗敎的觀念に富み、醫師の妻は藥の名や看護法位は知つて居らねばならぬ、故に夫と生涯の運命を共にすべき妻は、夫の職業に應じて其方面の才能を養ふ必要があると共に必其の方面の書物を多少讀んで置かねば決して樂しい趣味のある世渡りをすることが出來ない、又若し良人が學問に關係のない人ならば、細君が特別に專門の書物をよむ必要はないが、せめて新聞雜誌は必愛讀して、普逆的智識を養ひ、宗敎信徒であれば殊に其信仰を養ふ爲に宗敎上の書物をたとひ日に一枚でもよいから怠らずに讀んで、靈魂の糧を得なければならぬ、

要する處心の用ゐ方一つで皆自分の人格を作ることができる、學校生徒の時ばかり書を讀む必要があつて、卒業後否人の妻となつて後は讀書の必要がな

いと思ふのは甚だしい誤である、一日ある理學士を訪うた時、其話に、余の妻は嘗て英語と獨逸は堪能の人であつた、然るに近頃はどう勸めても本を開けて見ることを全くしないので、段々忘れてしまふばかりで、余が學問上の面白い話をして樂を分けてやらうとしても却つて面倒がる、さうなればこちらも面倒であるから、何も學理上の話はしないやうになつた、今では無學の妻も同じである、女子はこれだから役にたゝぬ、と頻りに口説いて居られたが、實に其通りである、

遠大な志といふ程にはゆかずとも、モー少し眼のつけ所を高くして、精神上の快樂といふ事に心を用ひさせたいものである、一日中仕事をして、着物が一枚縫へるものなら、少しは殘つても、其中一時間位讀書をしたならば、無形の利益は決して少々ではない、人は何でもあまり實利主義ばかりに傾いてはならぬ、必 精神上智識上の事にも多く心を用ゐる事が大切である、そこが細君の大に分別を要する所で、心の置き樣と、時間の用ゐ方一つで、必 讀書の暇を作り出す事が出來る、併し惡い習慣はつき易いが、善い習慣は中々つき難いものであるから、一寸始めてもすぐ止んでしまふのが通例である、故に試驗といふ關門のない自由の勉強をしやうと思ふにはよほど其覺悟を確乎と定めて、常に奮鬪的精神を土臺として進まねば、かゝる一事と雖も決して容易に行はれる者ではない、故に凡て其良人と共に樂しい生涯を送らんとする妻は其子女より輕蔑せられる事を望まない母たる人は、先づ其第一着として必讀書を怠つてはならぬ

●帶勳の女學生　職務に斃れし看護婦が靖國神社に合祀されし事は前號記載の如くなるが、幸にも芽出たく勤務を終へたるものには其勞に對し厚き行賞ありし中、左の六名は鷲山彌生女史の經營せる女醫學校に入學し、今尙同校の生徒たるものにて、此程左記の如く表彰せられたるが、女學生にて勳章を佩する名譽を荷ひたるものは今回を以て嚆矢とすべし

長野縣人町田滿務子(二十六)▲山形縣人防取美代嘉子(二十五)▲愛知縣人平尾まき子(二十五)▲栃木縣人平すわ子(二十五)▲熊本縣人福島みな子(二十五)▲佐賀縣人井田つも子(二十六)

やさしき乙女ごゝろ

去月六日の日曜午後二時半頃の事なりき、烈風吹き荒ぶ中を本所緑町三笠小學校門前に、一臺の乳母車あり、茶色の肩掛もて覆ひ四十格好の男が押し來りしが、肩掛を取り去れば中には七八才の痩せ衰へたる小女掌を合せて、校内を拜む樣なり、如何にも哀れにいぢらしければ、其仔細を訊ぬるに、男は深川猿江裏町職人横幕末吉小女は其長女マサチ八歳なり、マサチは數月來患ひ肺炎となりしも、小供ながら日頃御世話に成りし先生に會つて、最後の御禮を申したし、其が叶はずばせめて學校なりとも見て死なばやとの願ひに兩親も不憫に堪へで望を叶へさせんと、古道具屋より右の乳母車を借り來り、父の末吉は一日の勞働を休みて、近からぬ三笠小學校迄押し來りしものと知れしが、小女は其願を遂ぐるや、血の氣褪めたる双頬に笑みを湛へて、八日午後二時半頃學校の方を拜みながら瞑目す、さて猿江裏町を訪ひ見るに、百九十二番地の六尺間口兩側長屋の一戸に横幕末吉といふ標札あり、家は鎖して簾を下しありしが、長男良三及び次男信一の兩人が驅け來り、何方さまかと行儀よくお辭儀をなし、戸を開て導き入たり家は三疊敷にて疊黒み破れ障子も煤に燻り、蒲團著物と亂雜にとり散らし、其暗き事對手の顏が好くは見へぬ程なり、良三は一々記者の問に答ふるやう、(母さんの名は百代といつて工場へ行つて居ります、私は國民夜學舍に通ひ、弟は午前中藤澤製壜工場に通ひ六錢五厘宛戴き、午後より三笠小學校へ參ります、國は美濃大垣町の農業で不作やらで去年一家五人にて東京に參り、三月七日此處へ越して來ました父は木工場に通ひ、四十五錢の給金で母は緑町の木根パイプ製造所に通ひて、十八錢宛になります、マサチは此處へ來てから、體が弱くて始終咳をして居ました、今年二月學校へ入りましたが、學校が好きで歩けない樣に成ても行くと云ふので、私が十日許り脊負つて通ひました、今月初めからは學校を廢めて了ひましたが、臥て居ても學校の事許り云つて居り、四日頃から物も食られなくなつて、もう一度學校へやつておくんなさい、先生の顏を拜まして下さい、學校の門まででもよいと云ひ詰めますから、父さんが五日は人力車に乘せて、連れて行き六日は乳母車にのせて連れて行きましたが、此の日は日曜で先生に會はれず、學校丈け見て歸つて來た時は、常になく機嫌がよく物は云ひませんでしたが、嬉しさうにみへました)と語りたるが、庭の隅には主なき朱塗赤緒の駒下駄寂しく脱ぎ棄てありき、マサチの葬式は九日濟し龜井戸にて火葬に付したる由なるが、當日弔に來りたるものは兩隣と三笠學校長の佐藤正作氏のみ會葬せるものは父の末吉、母の百代、長男の良三、次男信一の四名なりしと、三笠學校の小使婆さんを訪ひたるに、マサチと聞くや、涙に咽び(六日の日はマサチの歸つた後へ戻つて來て、爺さんから聞いて泣きました、ほんとに可愛い珍らしい子ですよ)と、振返れば老眼鏡にて讀物せる七十許の爺さんも、相槌打つて(あアあア情けない事をしました、六日はマサチの親父がモウ見收めと思ふから連れて來たと云つて來たから、出て見ると、乳母車の中に目を閉むり手を組んで拜んで居ました聲を懸ると目を開きましたが、もう目がドンヨリして居りました)と、手拭を取つて涙を拭ひたりき、

小兒と保姆

宮島登幾子

私は永年幼兒保育の任に當つて居りまして、上流の子弟も、又下等の小供も許多手掛けましたが、何時も異樣の感に打たれますのは、一軒の家から參りまする其兄弟に付いてゞ御座います、中には一寸見た所からして、其體の樣子と云ひ、擧動と云ひ、音聲と云ひ、性質と云ひ、兄弟であり、姉妹であると云ふことが、明晰に一見解るやうに善く相似て居るものもございます、又それ程で無くとも、其幼兒を永く扱つて居る間に段々其兄弟の通有の點を見出すこともあります、然しながら稀には實に氷炭相容れぬ、これでも血を分けた兄弟で、一家の中に育てられたのであらうかと疑ふほど異なつて居るのもございます、勿論兄弟姉妹だからと云つて、必ずしも似て居るものとは限りませぬ、或は幼兒は父の性を多く受けて居るのもあり、又母の遺傳を澤山受けて居ると云ふ樣な事もあり、又其父母の心身の狀態も、必ず何時も同じと云ふやうな譯には參りませぬから從つて幼兒は其影響を受けて變化すると云ふ事もあり、其他種々の原因で異るのでありませうが、しかし同じ父母の許て育てられて居る幼兒でありますと幼稚園時代位のうちは、先づ其幼兒の感情は一致して居る點のあるのは普通であります、然るに姉は誠に少しの事にも激し易い、殊につまらぬ事にも直ぐ怒る、又總てのものを愛せぬ、即ち草花のやうなものでも、鳥獸のやうなものでも一向愛せぬ、其他敎師に向つても朋友に對しても、愛と云ふ情を少しも有たぬ、從つて同情心が乏しいと云ふやうな風でも妹はこれとは大違ひで、いつでも穩かで優しくつて何者でも喜んで迎へる、友達と樂しく交つて行くと云ふのもある、又兄弟でも弟の方は、意地がわるくて非常に亂暴で且つ大膽で、物を恐れると云ふ事を知らぬやうな性質であるのに、兄は非常なこわがりで犬が來ても怖がる、蚯蚓が出ても恐れて居る、

蛙が飛出しても大騷ぎをして逃げ廻る、其他人間でも少し變つた即ち支那人とか、西洋人にでも合はうものなら、怖がつて隱れて仕舞ふと云ふのもある、其妹の方は何でも奇麗な事が好きであつて、非常に美しいものを愛するのにも拘らず、姉は一向そんな事には頓着しないのもあります、其他是に類した例は澤山あります、そして幼兒のこれ等の感情が、其將來の幸福にいかに重大なる關係を以つて居るかと云ふことは、今更申すまでもありませぬ、

扨これ等の現象は、多くどう云ふ家庭に依つて編み出れるかと申すと、下等社會の小供には割合に少くして、上流社會即ち其多くは、乳母か附添人に全く幼兒を委托して、餘り父母が之に關係せぬといふ家庭の幼兒でありまず、立派な父母を持ちながら其感化を受けることの出來ない上流社會の幼兒、又は其母親が教育とか或は社會の事業などに從事して居つて、小供を顧みる暇の無いやうな家庭に育つ幼兒に多いのでございます、何故と申すと此等の家庭では、幼兒が二人あれば二人、三人あれば三人の傳女或は乳母を雇つて夫に其子供を委托いたします、而うすると其托せられた所の傳女や乳母は、各々其自分の托せられた小供丈けを專



一に世話いたして居ります、然るに幼兒と云ふものは、必ず自分に一番接近して居るものに化せられますのは自然の原則でございますから、其幼兒等も之等養育者の感化を受くるのは當然のことでございます、そして其養育者の感情と云ふものは、固より一樣ではありませぬ、して見れば、斯る家庭で育つたところの小兒は、兄弟でも姉妹でも、其感情の異つて居るのは少しも怪むに足らん事で至當な理りでございます、其上、中流以下の家の小供に成りますと幼い時から戸外で遊ぶ事が多いものですから、幼稚園時代の年齢に達しまする前に、已に割合に多くの人に接して幾らか其影響を受けて居ります、從つて左程に一貫して居る傾きを持つて居るといふのはありませぬが、一人の子に一人づゝ乳母や傅女が附き切て居るやうな家庭では、三四才迄は他に接する人が極めて少なうございますから、特更に世話して居る人の影響を受くるのでございます、

又何故に幼兒は斯く接近者の影響を受くるかと申

ますと感情といふものは、模範によつて成るものであります、即ち常に目の前に示されて居る實例によつて、自然に得るのであります、夫故乳母や傅女が無暗に物を怖がつて見せると、幼兒は何時の間にか何でも怖がるやうに成り、又乳母が何時も穩かな心持で居ると幼兒も何となくふうわりとした圓滿な子になります、其感情の感染することは、丁度鐵が磁氣を受けるやうなものであります、故に幼兒に善い感情を持たせやうと思ふならば、先づ第一に傅女や乳母の良い感情を持つて居るものを選ばなければ成りませぬ、しかしてこの幼兒感情の教育と云ふものは、口ですることは却々困難しいもので、どうしても實例によつてするより外はありませぬ、まして幼稚園時代の幼兒は、口で云ふことはなか〳〵分りませぬから、全く模範を示してこれにならはせるのでございます、實に幼兒を世話する人の感情によつて大切な幼兒の感情の基礎を作ると思へば（情は遺傳もありますが）、親達は非常なる注意をもつて然るべ

き乳母や傳女を撰ばなければ成りませぬ、
近來乳母を雇ひますのに、體質、遺傳、年齢、乳汁の性質、分量等種々の點に付き、人々が注意するやうに成りましたのは結構でありますが、其人の感情如何と云ふことを調べる人は稀なやうでございます、斯ることは吾が最愛なる幼兒に對して親たるの道を大いに缺いで居ると云はんければ成らぬと思ひます、

然らば感情の調べとは何であるかと申せば、最も高尚な感情を持つて居る人で、勿論宜しいので御座いますが、左樣な人は得ることが六ヶ敷うございますから、同情、憤怒、恐怖、悲嘆等の感情が偏頗でない人、即ち怒るべきことは怒り、恐るべき場合に恐るゝ人であらば宜しいと思います、

然るに往々自分自らも總ての感情を抑へ、又幼い兒の感情をも抑へつけて、善い躾方であるとして誇つて居る傳母もあります、殊に怒の情などは如何なる場合でも起さぬやうにして不自然に情を撲滅しやうと努める人もありますが、此等は決して正當の事とは申されませぬ、いくら女子は柔和いのが善いからといつても、漫に是が非でも服從して居ると云ふやうなことは決して賞すべき事ではなく、又いくら男兒は活潑なのが宜しいからと云つても、如何なる場合に於ても只荒れ廻る許りではいかんと思ひます

私の世話いたして居ります幼兒の中に、五歳許りの女の子の極く柔和い小兒がございますが、誠に性質が素直でございまして、朋友同士遊びましても決して喧嘩などすると云ふ事も無く、餘り多辯もいたしません、又怒ると云ふことも餘り無いやうで、一寸氣の知れないやうな小供でございました、最初半年間位はどの傳母も皆この兒は無神經な大人しい一方の小供であると思つて居りました、所が或る時園内で誰か反則な事をした小供がございまして、其の嫌疑が曩の女兒に掛つたので御座います、そこで傳母の室に招んで責問したが到底要領は得られぬだらうとの豫想に反して、質問の終ると同時に姿勢を正

して、少しも憶する色なく自分の所爲で無い事を辯解いたしました、此時に始めて此女兒の眞の性質が分りまして、其後は日を經るに從つて外面の柔和なるに拘らず、内心に犯すべからざる氣象を供へて居る所が顯はれましたが、家庭の容子を聞いて見ますと、母親と申す人が非常に敎育に熱心な人で、傅女なども常に善く訓戒して每夜一時間か半時間位宛は必ず小供に對する心得から修身の談話などを聞かせて居ると云ふ事を聞きました、夫で愈々小供の善良なる發達は、母親並に小兒に昵近して居る人の精神にあると云ふ事を覺りました、

料理及菓子製造の實驗

富田豊春

牡丹の花酢づけ

白或は薄紅色の牡丹の花を、ざつと茹で、冷水に漬け、度々水を替えて、凡三時間も經過せば、能く絞り、三十分程酢に漬置き、食する時に、白砂糖と醬油とを少量加入ふべし

白瀧豆腐

豆腐二個を裏漉にかけ置き干心太一本半を細にむしり、水四合へ漬け凡そ三十分も過ぎて能く煮、裏漉をして、前の豆腐を能く交せ合せて、重箱か、膳の樣なものに入れ平らにして冷ます、厚さ八分位、冷めてかたまりたれば、八分角長さ六七寸に庖丁し、冷水に入置き、心太突にてつき、氷の片と共に皿に盛り、別に素麵汁を製し、其にて食す、加役味は靑紫蘇、蓼など極く細かく叩きて用ゆ、

胡瓜揉

極早稻の胡瓜凡三寸位のを、皮の儘小口より薄く切り、鹽にて揉み、別に赤味噌を摺り、味醂酒にてのばし、玉子の黄身ばかり入れ、能く交せ、前の揉みたる胡瓜をあえるべし

茶のしたし物(廢物利用)

極上等の煎茶(覆下玉露製一斤五圓以上の茶)の

使用後出殼の廢物を細かに叩き熱湯を掛け裂に包みて能く絞り、暖き中に、醤油を少し掛け、花鰹を懸るべし、

麩もち

メリケン粉壹升、白砂糖一斤、豆腐壹個、右三品を能く煉交せ、蒸籠の中へ流し込み、凡そ四十分間蒸して、細き團子の串のやうな物にて、突きさし、蒸加減を試驗し、串にねばり氣の付かぬやうになれば、それで出來上り、蒸籠より出し、冷まして庖丁す、

私製の柏餅

米の粉を熱湯にて煉り、板の上にて厚さ二分位に延し、ブリキの茶入の鑵の蓋にて丸く切拔き餡を入れ、二つに折りて、餡の出ぬ樣注意し、夫を柏の葉にて包み、蒸籠にて蒸し、豫て柏の青葉を桶に入れ、熱湯を懸け、暫時置き壹枚づゝ、丁寧に洗ひ用ゆべし、柏の香氣がうつり、味尤もよろし

◎附言　菓子屋にて用ゆる葉は、前年の物なる故香氣なし、餅も米の粉七分、もち米の粉三分を煉り、一度蒸して搗き、所謂しんこにして、製し、柏の葉に包みたるのみにて蒸したるにあらねば香氣なく、只のしんこ餅にて眞の柏餅とはいへず

蒸カステラ（支那菓子）

玉子の白身を能く泡立て、黄身とメリケン粉、白砂糖、牛乳、ベーキンポーダーを少々入れ、能く煉り交せ、煎茶茶碗へ紙に牛酪を付けてぬり、七分目宛入れ上へ乾葡萄を二個宛載せて蒸籠にて蒸すべし（ベーキンポーダーは西洋食品販賣店にあり）

ドウナット（日本のかりんとう）

メリケン粉五合、玉子三個、白砂糖百目、ベーキンポーダー、小匙、一抔食鹽を少々、それを牛乳にて堅く煉り、厚さ三分位にのばし、細く切りヘット油を煮立て、前に切たるのを揚る、狐色に揚りたれば、西洋紙に包み、油氣を去り、是にて出來す、

煎茶の保存法

煎茶の濕氣を受け（入梅の季節抔）或は麝香抔、移

り香のしたる時は、美濃紙へ生澁を（柿澁にて、少しにても水が交りては駄目）引き、能く乾して、茶を十匁位宛、其紙へ包み、夏期秋期には、障子越しに、日の當る所へ置く、冬期なれば、日向に出し、凡五六時間經過すれば、

乾燥して、香氣が恢復す、玉露製の上等の茶は、素人が焙爐杯に掛ければ、必失敗す、前に述べた法の如くにせば誤る事なし、請合なり、

鯛めし（甲）

鯛の正身を薄く切りて、燒きて細かくむしり、普通水加減して、味淋酒と食鹽を、少量に加入へて焚き、稍めしの出來る時鯛の身を載せてむらし、飯櫃に移す時交せるべし、

鯛めし（乙）

鯛の正身を薄く切りて燒き、擂盆にて能く擂り、赤味噌を少し入れて尙能く擂り、味淋酒、白砂糖を少し入れて煮る、飯は普通に焚きて碗に盛る其上に前の煮置きたる汁を懸るべし（ライスカレイの如く）

牡蠣めし

新鮮なる牡蠣（魚屋或むきみ屋にて販賣する、水漬の品にては駄目）の剝たてのを、目笊に入れて、鹽を懸け能振り、水洗す、普通水加減して、米の中へ交せて焚く別に出し汁を製し、碗にめしを盛り、汁をかけて、食す、加役味には、乾海苔を燒きて揉懸るべし、

松蕈めし

松蕈を割きて（庖丁にて切るはあし）焚く米に交合せ味啉と醬油とを少量に入れ、普通の水加減して焚く、碗に盛り、煎玉子を懸けて出す、

椎茸めし

中位の椎茸を二十個、能洗ひ、水に三十分程漬けて絞り、其水にて米壹升を入れ、水加減をして焚く椎茸は極細く庖丁して、味啉、白砂糖、醬油にて煮上げ、汁を去り、めしの焚上る際、上に載せてむらし、飯櫃へ移す時に、漸々交合す、

珍らしき夫婦の忠義

牛込區市ヶ谷加賀町一丁目二十四番地に照山秀範と云へる人あり、昨年九月長壽を經て物故したる後は、未亡人と共に嫡孫秀太郎氏家を襲ぎしが、此照山家に千葉縣香取郡神代村大字篠野谷村出生の伊藤國松(五十五)及同人妻飯塚はる(四十九)と云へる夫婦の雇人あり、共に照山家の父子二代に仕へて、茲に四十五年間一日の如く忠勤怠りなく其生涯は實に澆季の世に於て稀れに聞くの美談あり、

▲國松の素性　忠僕國松の父は元針醫を業とし、萬延元年の頃生國千葉より主家秀範氏の郷里汲上村に移住し來りたるものにて、同人の照山家へ住み込みたるは、實に文久三年の事なるが、性質素朴にして且つ何事もまめ〳〵しく立働き、曾て倦怠の色など見せしことなきにぞ、秀範夫婦は又なきものと慈しみ居たれば、同人も痛く主人夫婦の恩誼に感激し、一生を主家に捧げんとぞ覺悟しける、

▲故川路大警視に知らる　去れば追々同人の成長するにつけ、秀範氏夫妻は其行末を思ひて身を立つべき相應の途もあらば、世話して獨立せしめやらんと、折々言ひ出けるも、夫婦が生存中は飽くまで忠勤を全ふせんとの意志固く動かすべくもあらざれば、止むなく其儘月日を送る内、世は維新と改まり、茲に照山一家は東京に移住することとなり、其事を物語りしに、國松も是非に召し具し給へと請うて止まず、遂に携へて上京することとなり、次で秀範氏は警視廳に奉職するに至りしが、其後氏の友人なる故川路大警視は、親しく同人の忠勤を傳へ聞きて大に感じ、斯る心掛美しきものなれば、我手許へ引取て相應なる世話の手傳を與へ遣らんとまで言ひたるも、國松は此時も頑として之に應ぜざりき、

▲はるとの結婚　斯くて年經て國松も早や廿六の男盛りとなりたれば、何時までも獨身にて置くべきにあらずと、夫婦は協議の上飯塚おはると云へる婦人を世話して、其女房となしけるが、此おはるは父を鐵次郎母をおつれと云ひ、矢張汲上村の者にて、秀賴氏が先代孫七郎氏の代より仕へ居りしも、おはるは不幸にして四歳の時に母を失ひ。十六歳にして父を失ひ。賴りなき孤兒となりたれば。秀範夫婦は不憫に思ひ。引取りて是れも國松同樣我子の如く慈しみ育てし者なりき、

▲四年間の看護　斯くて國松夫婦は愈よ忠勤を勵む中。三十六年五月頃杖とも柱とも思ふ主人秀範氏は。弗と中風症に罹り半身不隨となりしかば。夫婦の悲しみ一ト方ならず　斯る患者の常とて癇癖の爲に　二人を叱り飛ばすこと日毎に及べど、露程も之を意に介せず、身を捨てゝ死するまで　日夜寢食を忘れ看護を怠らざりしとかや

▲國松肺炎に罹る　然るに當主秀太郎氏が仙臺なる高等學校に入學中、本年二月病氣に罹りたる際、忠義一途の國松遙々看護の爲め仙臺に赴き、其看護に從ひしが、之が爲め己れも風邪に罹り、歸京後終に肺炎となりしにぞ、未亡人始め一家の驚き大方ならず、直ちに妻はるを付添へ、最寄の多納病院に入院せしめたる處、幸ひにして經過惡からず、不日全治退院の見込ありとぞ、世に珍らしき僕婢なるかな、

育兒に就て

杉浦糸子

愛兒を養育するの方法に就ては、其の親となる方は種々の微細なことに迄も注意をして育てねばなりません、親の養育方法の善不善は、其小供の將來に著しき結果を顯はす者でございます、要するに幼稚の時は、母の育營が尤も肝腎ですけれども、世の多くの方が、未だ幼兒の哺乳時代に於ては左程に重きを育營に置かれない樣に思はれますが、之が大なる誤りで、之を植物に例へて申しますれば、ドンナに宜い苗を植付けましても其培養する方法が惡しければ、枯ない迄も到底滿足なる生長を見ることは出來ません、之と同じ理窟で、母が兒供に乳を與へますのにも、可成善良なる乳を與へる樣にせねばなりません、勿論珍味佳肴に飽くことを勸むるではございませんが、相當の營養を取ることは育兒上重要な事です、妾が玆にお話し致す骨子は母の精神上の作

用は、直ちに乳汁に及す變化と、添乳の害と、此二ツの事でございます、

何んでも母が愛兒に乳を與へまするときは、精神の極めて平和なるときでなくてはいけません、餘りに過度の心配をした爲めに、乳の上つた例も昔から澤山ある位ですから、母の精神の靜動は、直ちに乳汁に變化を來しますことは、學理上の定論です、又事實の示す所で厶います、で母の精神の平和なるときには、乳も亦平和な乳が出づるので、其平和なる乳を愛兒に飲ましむれば、從つて幼兒の精神も亦平和に成長し行くものでございます、淸き流れの水も雨に濁り、其濁れる水を飲むは、人體に害のある樣な理窟で、母の精神の靜かなときは、乳も亦淸く、母の精神の動亂せし場合の乳、殊に嫉妬の爲に激亂せし時の乳は、乳兒の發育に最も必要なる滋養分に乏しく、且つ有害の分子を含みて居ることは分析の結果明かな事でございます、でこんな場合の乳は搾つて棄てる方が宜敷いのです、乳離をした兒供は、

家庭の教育が必要でございますが、未だ哺乳の幼兒には、其唯一の食物たる、母の乳を撰擇するは、育兒上の最要事でございます、

それから時々新聞で見ます、彼の幼兒の呼吸の窒息でございますが、總て此悲慘事は、添乳より生ずる結果にして、乳房の大きな方に、ヽ、有る事で、假し斯の樣な悲慘事はないとするも、乳兒の衞生上此程有害なものはありません、乳兒は哺乳しつヽ眠るものですから、乳が全く嚥下しないで、口中に溜る爲め、不潔になるは未だしも、夏期は之が口中にて腐敗し、此腐敗した乳を嚥下するに原因して種々な病を起し、又母の爲めには限りなく分泌を妨ぐることでございます、

次に時間を定めずして乳を與へまするは大變に胃腸を損ひます故、生後の年月にも依りますが、先づ二時間半三時間、四時間と漸時成長するに從つて、大凡そ哺乳の量と時間を定めて與ふることは、乳兒の健康上最も注意を要する事でございます、然るに世の一般を見まするに、兒供の泣く毎に乳を與ふると云ふ方が多い樣ですが。夫は今申す通り健康上有害の事にして、乳兒の泣くのはあながち、お腹の空た時のみに泣くものではありません大小便の排泄衣類や襁褓の緊縛せし時、不快の時、胃の膨脹た時などに泣く者でありますれば、其泣く原因を索むることが母なる人の第一の任務でございます、又襁褓を餘り堅く纏包ますのは、其身體の發育を大變に妨ぐるものなれば、深く注意して、哺乳に滿腹せし時も、堅からざる底にして置かねばなりません、

嬰兒の齒は生後六七ケ月目頃に發生するものでございまして、之を乳齒と申しますのですが、此發生時期には乳兒に種々の變化を來すものでございまして、色々注意を要することも多くございますが、殊に一般に其弊を認めますことは、此時期には齒牙の發生せんとして齒齦を刺戟するものでございますから、痒いので乳兒が自然乳房を嚙むことは普通でございます、それが痛いのでツイ知らず識らず大きな

聲を發したり、叱つたりする方がございますが、之は非常に乳兒を驚かしむるのでございます、乳兒を驚かしむることは育兒上大害を及ぼすことでございますから、此は最も注意を要することでございます又此時期にはヤタラに物を口に入れたがるものですから、氣を着けねばなりません、殊に翫弄品には有害な藥品を使用して、彩色を施した物や危ないブリキ製の物などがありますから、一層危險でございます、

又此時期には腦膜炎を起し易うございますから、注意して頭を日向に曝らす等のことのない樣にせねばなりません、槪して靑色便を漏し又は便通のないとき、吐乳するとかの時は乳兒の身體に變調を來たして居るものと思はねばなりません、又頻りに頭に手を擧げてムシ〳〵するとか、動もすればジレたりする乳兒を俗に蟲が起ると云ひますが、多く此は何かの病氣を起す兆候なのでございます、總て是等の場合には發熱するものでありますが、俗に之を智慧熱とか申しまして、普通のことの如く打棄て置かる、方が多うございますが、是等の不注意より初期に手當をすれば容易に癒る筈の輕症も、ツイ意外な重患に陷らしむることがありますから、以上の如き場合に最も注意しなければなりません、

尙注意すべきことは無暗にあやしたり、笑はしたり兎角乳兒の精神を刺戟することは、育兒上甚よろしくないことでございます、

牛乳料理

霞袖女史

牡蠣のライスカレイ

牡蠣の身一合に付て、玉葱一つ、ジヤが芋三つ西洋人參三つを細かに切り、水五勺を加へ、鹽にて味をつけ、一旦强き火にて煮ると上へ泡が浮きますから、よく掬ひ取り、其から火を弱くして卅分間煮詰め、別に茶碗にてメリケン粉を、大匙二杯とカレイ

粉中匙に一杯とを少しづゝ加へながら充分溶きて、今の鍋へ少しづゝ擾き廻しながら入れ、暫く煮てから牛乳五勺を混せ、少し火の上へ置き、出來たての飯へ掛けるのです、蛤あさり、貝柱等も凡て同じ事です、

玉子のライスカレイ

玉葱二つと『ニンニク』四本を細かに切り、大匙一杯のバターでよくいため、其へメリケン粉大匙一杯半と、カレー粉中匙一杯とを加へ、狐色になるまでいためて、スープ二合を少しづゝ混ぜ鹽にて味をつけ、なるべく深い鍋へ移し、三十分弱い火で煮たる上、一旦裏漉しにして又前の鍋へ入れてから牛乳五勺を加へ、少し煮て其中へ湯煮玉子を三つ四つ程小さく輪切にして入れ、御飯へかけます、

オムレツ

玉子の中へ、鹽と少しの牛乳を入れ、よくかき混ぜフライ鍋にて燒けば輕便に出來ます、

米のオムレツ

玉子の黄身へ、胡椒と鹽と少しの牛乳を入れ攪き廻し、白身と黄身とを一つにし　再びよく攪き交せ其儘バターの敷いたフライ鍋の上へ落し柏餅の形に燒くのです、その柏餅の間へ牛肉又は鶏肉と葱とを煮たるものを入れると、一層美味なります、

蕎麥のケーキ

蕎麥粉十杯に、饂飩粉五杯と他に炭酸曹達を匙に七分目程入れ、玉子の黄身三つと砂糖五杯と、牛乳とを捏ねて、どろ〳〵の物にし、別に玉子三つ分の白身をよく泡立てゝ混ぜ、玉子燒へ油の浸みた紙を敷て、其中へ擾き廻しながら半分程流し込みて燒けばよいのです、

マッシ

生栗の皮を剝き、極く柔になる迄湯煮裏漉にし、一斤に對し、バタ大匙一杯の割にし、鹽、胡椒を加へ、少しの牛乳にて弛め、弱火にてよく煉り混せるのです、金團に似たるもので、之をマッシと云ひます、

家庭と學校

文學士　山本無極

家庭が學校の敎育以外に立つて、敎育を施すのは人物敎養上に至大の關係を有つて居ることは、爭ふべからざる事實であるが、我國現在の社會には、此資格を充分に具備へて居る家庭は甚だ少い樣である下等社會は固より論ずる迄も無いが、其他中等、上流と云つた所が、仔細に檢べたならば、兒童の敎育に妨を爲す分子が甚だ多い、是は敎育施行にとりては、最も慨嘆すべき事である、

家庭と學校とが相一致して敎育するやうに、互に連絡を付くる事は最も善い事であらうと思はれる、學校と家庭との方針が同一になつて、相補ひ、相助け合ふのは最も緊要の事であるが、是を實行するのには家庭と學校との間に何か連絡を付けねばならぬ而して學校としては兒童の家庭に通じ、家庭としては學校の事情に精通して、互に缺點を補はなければならない、

學校と家庭との連絡は田舍には隨分行はれる所もあるが、都會では是を行ふに隨分困難があるやうである、其原因を探つて見たならば、父兄と敎員とが親密になり惡いことも一因であらう、父兄が冷淡なのも一因であらう、敎員たる者が種々の嫌疑を避けやうと云ふのも一因であらう、又連絡の事から貧家の兒童が却て猜忌心を起したがるのも一因であらう然し兎に角に今日多くの學校と家庭とが互に連絡を付けることに熱心でないといふことは事實であるが若し弊害があらば之を取り除くことにして、何とか連絡の方法を講じたいものである、又無連絡から生ずる弊害と、連絡より生ずる弊害とを比較して考へて見ると、實に意半に過ぐる者がある、今日の家庭が不完全で有つて、到底學校の敎育を助けることが出來ない計りで無く寧ろ是を破る樣な場合が多いのは實に困つた事である、下等社會は云ふまでも無く、中以上の家庭でも此弊害を免れない、殊に今日

の通弊と謂ふべきは、父兄たる者が學校を輕視することである、一つ例を取つて見るに、子弟たる者が其父兄と教師との優劣を尋ねる場合に、大概の家では家長自らが教員先生よりも優いと教へる、尚甚しいのは兒童の前で殊更に小學先生を冷笑して見て我は斯程迄に優いと見て喜ぶ心得違ひの者も少からぬ様である、全體子供と云ふ者は非常に比較心の強い者であつて、犬が強いか猫が剛いか、虎が強いか馬が強いなどの質問が常に起る事である、そこで自分が未だ家庭を出ざる間は、お父さんを以て一番優い人と思ふて居るから、別段に比較する者が無いが一たび小學校に這入ると、教員と云ふ優い人の有る事を知つて來るから、直に自分の父兄と先生とを比較して優劣を定めやうとする、斯る場合になつて、若し其答辯が惡い時は挽回すべからざる弊害を生ずることであるから、最も注意を加へなければならない、此場合には家長も教員も共に其品位を保ち得るやうに教へてやるが必要とは云ふ者の多くの家庭では其邊の事には餘り注意して居らぬ、そこで其答の方法は幾許もあらうが、先づ兩者の威嚴を損じさせないには、畢竟家長と教師とは各其職を異にする者であるから、家長は其本職に於ては教員に勝り、教員は亦兒童を教育する事に於て家長に勝つて居る事を說いて聞かすれば、兒童は兩人の間には優劣の無いことを悟つて共に優れた人と思ふと滿足する、兎も角も世間一般が教員を蔑視する惡い傾向のあるのは教員の爲に嘆すべき事である、

菓子の話

井上紫東

菓子を嗜喰することの有害なることを、八釜しく說かれた博士も有つたが、菓子は果して、かやうに有害なものであらうか、何物でも、過食すれば、腸胃を害するは當然のことで、たゞ菓子のみには限らない、又粗惡なるものゝ有害なるも、其通りである

甘いものが歯を害すると云ふ俚諺も實は間違つた話で、ヘンリー、ピコーホルート公爵など云ふ人は、四十年間毎日砂糖を食ふ量一磅に及んだが、生前曾て歯を痛めたこと無く、殊に咳嗽の患を知らず、七十歳の高齢に達した又マロレリ氏も、深く砂糖を嗜み、甘い物喰であつたが、これも八十歳に至るまで歯牙健全で百歳の長壽を保つた、菓子黨の人に長壽者が多いことは、ドクトル、フレア氏の記錄に載つてある、砂糖產地の交趾などは、人民の砂糖を食用に供することの多きわけであるし、毎朝砂糖漬の菓實を嗜喰すると云ふが、歯牙は健全である、又抜き取つた人の歯牙を砂糖に浸して、三四百日を經過しても、決して侵蝕を受くる様な徴候を發見されなかつたと、經驗上其道の博士も云ふて居る、併し菓子の歯牙に實際有害なるもの無きに非ずで、それは既に酸化した香料や、粗製の糖類や、又は過度に砂糖を食し、口内の臭氣を醸し、不潔を來すやうなことはよくない、又飴や金米糖類の如き、歯牙に粘著し易いものは酸化するから自然害となる、又硬いものは、總て歯冠を毀傷し、又歯齦膜に皷動を起し、骨膜炎症を誘發するものである、併し菓子は今日決して十分に發達して居ないばかりでなく、或ものは却りて退歩して居る、故に十分改良せねば、無害にして且風味よきものとはならない、今本邦現在の菓子につきザッと分類いたしますれば、先づ左の如きものであらう、

▽乾菓子▽中乾▽蒸菓子▽燒物▽棹物▽掛物▽細工菓子及飾菓子▽西洋菓子

世人普通に菓子といへば、單に甘いものといふ念を抱き、之を製するも亦、唯、甘かれかしとのみ心掛くるは誤れる沙汰である、菓子の味は今日では餘り單一である、或は甘酸調和したるもの、或は淡泊にして消化し易きを旨とし、或は香料を加へて味官の快味を助くる等、其原料を多様に取り、又甘味に於ても獨り砂糖によらず、昔用ゐたる如く、甘葛煎とて、千歳藟の汁や、飴、又は柿肉より取たる菓糖

などを用ゐなば、大に風味を増すことであらう、甘蔗糖のみを用ゐ、形狀色彩にのみ走るは近頃の流弊で、甘蔗糖などを廣く用ゐぬ樣にしたい、又菓子製造家に取りて注意すべきは水である、水質の惡きものを用ふれば隨つて風味を、減じ異臭を、帶び又腐敗し易くして貯藏に堪へざる等の患がある、又菓子製造の用器は大に省慮すべきもので、昔は木製、又は鐵製のみを用ゐたが、近頃は舶來の銑鐵製を多く用ゐ、其破損し易きを見るや、轉じて銅製を用ゐることゝなり、今では專ら銅器を用ゐる、銅器の鑛毒を含むこと夥しいもので去る明治廿八年中東京衛生試驗所に於て府下有名の割烹店より、銅、青銅、又は鐵鍋にて調理せる三十五種の魚肉、野菜を取り寄せ、百グラム中に含有せる銅の定量分析を施行いたし、成績は、銅、青銅、鐵鍋に係はらず、悉く皆銅分を檢出した、其原因はと云ふと、

第一　銅鍋を使用すれば、最も著しく銅の反應をす、

第二　下等の砂糖を使用すれば、銅を含有す、

第三　鐵鍋中に銅夾雜すれば、又銅の反應を呈す

此の如くどの品からも銅分の檢出せられたのは、驚くべく恐るべきもので、銅の人身に害あるは非常である、獨菓子のみならず、近頃銅製用器の流行するは危險の話である、又鐵鍋と雖安心の出來ないは前述の通りで、現今の鐵鍋と云ふものにも、百中に純銅〇一、三三分を夾雜せるものを發見した例もある、故に什具を求める際、少許の費用を惜まず良質の鐵器を取ることは肝要である、

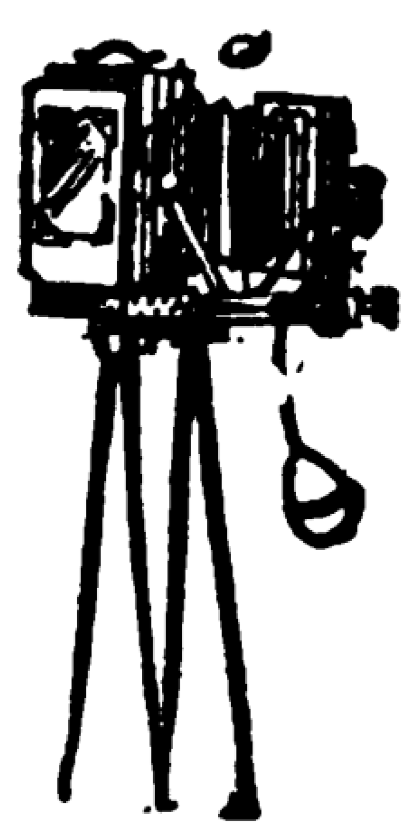
次に砂糖の點についての辯護は、前述の如くであるが、こゝに飜つてその改良點を述べやう、從來掛物菓子に用ゐる製造原料は、阿波や讃岐の國產なる三盆白及その他の砂糖を以て之を製し、その製法は大抵粉を入るゝを主とし、生掛は僅に一部分に過ぎないのである、生掛にすれば味は過濃で價が不廉であるが、世の進歩につれ生活の度が高くなつて、輸入砂糖の透明なると、その味の輕淡なるより、今日

都會の地にては十中の八九まで生掛を製する樣になつた、抑もこの生掛の製法と云ふは、濃淡その度に適せず、齒牙を痛め胃腸を害しますから、注意せねばならぬ次第である、そこで品評家の云ふには、原料の砂糖を精撰するは勿論、粉、豆等、配合を愼み濃淡宜しきを得るを要し、生地物は可成菓物を應用し、柿肉、梅肉、柚、胡麻、山椒、胡椒、麻の實、桂子、罌粟等、又は胡桃、落花生等の如き油分あるものを用ひ、又生地物には成べく香料を施し、生姜薄荷、紫蘇、肉桂、山葵、檸檬油の類を可とし、種生地物は成べく色着けせざるものを用ゐ、殊に燒色種を用うべきで、葛粉、山紫姑粉、小豆粉、薯蕷粉等成べく滋養分あるものを可とし、落雁粉、種粉、浮粉、豆粉等之に亞ぐ、色彩は無害の染料を用ゐるべきは勿論、青料には、挽茶、青海苔の類がよろしい、

その他乾菓子、中乾、蒸菓子等、皆それ〲改良すべき點があれど、製造家にも非ぬ讀者諸君には與う

すかるべければ、これより轉じて近來新製の餅菓子及細工菓子のことを話さう、

我邦宴會用の餅菓子は、未だ西洋の如く盛にならねども、近來京都に於いて大に之が流行を來して、花卉禽獸など種々の形狀に似せ、その技倆も亦賞すべきものがある、西洋にては重に高塔式を取るが、西京人は日本的の意匠を加へて、花鳥を作る、又西洋にては宴席の中央なるテイブルの上に挿へるから八面睨に出來てをる、日本では床の間に置くより外仕方がないから、片面より見るやうにして宜しとの說もあるが、日本には結構なる挿花と云ふものがある故、餅菓子を床の間に挿へるも如何と思はれる、この點は當業者も亦家政のことに意を用ゐ、美術などに關係ある人も研究すべきものであらう、



樂燒の獨習

松田澄子

燒く窯には二種類ありまして、一を薪燒と申して其名の如く薪を以て燒くのであります、これは大仕懸の燒方で一度に數多く燒けるので、重に商賣人がやつてゐるのです、他の一つは炭燒といふのでして、これもまた炭を以て燒くのですから、此名があるのです、素人が慰みに燒くのにはこれで充分間に合ふのでして、夫に炭窯は小さくて持ら運びも出來まして、座敷の客の前で燒く場合などには、椽の上に持つて來て燒くことが出來るので、これを稱して座敷窯とも唱へてゐるのです、



で、今私が御話致すのは、此炭燒のことでありますが、薪燒でも、炭燒でも、窯の中に直に土器を入れるのではありません、薪燒では鞘と唱へ、炭燒ではきんがまといふてゐる物へ燒かんと思ふ土器を入れて更にそれを窯の中へ入れて燒くのです、此きんかまと云ふのは、早く申せば飯櫃の樣なもので蓋があつて、其蓋の上部は盛り上ッてゐる其處に穴があります、此穴を色見穴と唱へて其色見穴の蓋を色見蓋と言ふのです、一體色見穴な

るものは何の要があるかといへば、釉の溶け加減を試す爲に、色見といふて土器の破片に釉をつけて、針金の尖端に付けて、此穴から中へ入れて置いて、此邊で工合は何うだと憶ふ時分に引出して試し見る爲であります、

先づ最初から出來上り迄の順序を解りよく申せば、第一に土で思ふ器物を作つて陰乾にする、第二に素燒をする、第三に繪具で思ふ書畵なり模樣なりを書き上釉をかけて窯へ入れるのです、第一の土で器物を作るには轆轤があつて、轆轤を廻はしながら其上で拵らえるのです、是はチキーンと年期を入れて修めた黑人でなければ出來ない仕事で、到底素人の一朝一夕に出來ることではないのです、併し素人は此轆轤に依らないで手先で思ふ器物を作るのですが、固より轆轤で黑人がやつたやうに精巧の物こそ出來ませぬが、鳥渡した皿にしろ歪に出來て指跡が其儘付いてゐるなどは、却て雅致のある物が出來上るのです、偖此上は尾州產でキプシといふのですが、黑人仲間ではガイロミと唱へてゐます、先づ此土を臼で搗いて微細にし、然うして桶へ入れ、夫れへ水を入れて程經ちますと、塵が浮き上がつて土だけ下へ沈澱しますから上水を捨てゝドロ／＼の土だけを篩にかけ、板に載せて乾かすのですが、此板を陶器の本場たる京都ではでんぼといふさうです、底で粘りの工合を見て、自分の欲する皿なり湯呑なりを拵えて、陰乾とし、能く乾いたところで素燒をするのです、今東京で黑人がやつてゐる土は、キプシ即ちガイロミに俗に隅田川土を二割乃至三割位混せてゐるのですが、單にキプシ計りでも差支ないのです、

器に書く繪具は白、赤、靑、黃、綠、藍、黑の七色ありまして、是以外の色を出さんとするには、夫々合色して思ふ色合を出すのです、夫れから上釉は流れの早いものを唐土と云ひますが、土とは云ふ條實は鉛から製造した白粉のことです、俳優が白粉の爲に鉛毒に罹るといふ說、一時世間に擴まつて、鉛毒は恐るべきものだと世の人が知つて以來、唐土は

安白粉の同物異名であるので矢張此鉛毒がある、食物を容れる皿や鉢にかけるに、鉛毒ある唐土を用ゐるのは危險だといふ說が出まして、一時は中々八ケましかッたですが、十年ばかり前に、ホーシヤといふのを發明したのです、俗にこれを改良藥と唱へてゐます、夫から重に此改良藥を使用することになりましたが、唐土に比較すると改良藥の方が價が高いので陶器の製造所は外面こそ改良藥を使用してゐる樣な顏をしてゐるものゝ、實は構ひなしに唐土を使つてゐるのです、これは製造所の全體が總て然うだといふのでありませぬが、先づ大概は此唐土を用ゐてゐるやうです、併し陶器の鉛毒は評判程に激烈なものでないと見えまして、未だ嘗て陶器の鉛毒に罹つたといふ事を聞きませぬのは何よりのことであります、次には日の岡といふのがありまして、是は昔山城國宇治郡日の岡峠から出たので此名があるさうで、今は肥前から出るとの事です、此の日の岡は火打石のやうなもので、或は火打石と同種類のものかも知れませぬ、又白玉といふのがあります、白玉はガラスを粉にしたもので、唐土と日の岡との間の溶け方をするもので先づ此三種を調合して、溶けの早いものとか、遲いものとか、乃至中位のものを拵へるのです、藥を微細にするには、乳鉢に入れて乳棒で根氣よく摺るのです、夫から繪具と乳鉢で摺り水を少量入れて布苔の溶かしたのを布で漉して滓を取り除き繪具に入れますと、能く筆が伸びて書き好いのです、

これからお話が前に戻つて窯のお話になるのです先づ器をキンガマへ入れて、其キンガマを窯の中に入れるのですが、窯の中にはキンガマを載せる臺があつて、此臺は恰も五德の樣で土で拵へたものですさて夫から前お話した色見を色見穴から下し、起つてゐる炭をキンガマの、周圍から段々と風を通す爲の穴が幾つも穿いてゐますから、それから風が這入つて火は次第に熾んになつて來ます、そこで時分はモー好からうと見極めがついたらば、例の色見を色

見穴から引上げて、釉の溶解工合を見るのです、既に釉が溶解てゐたならば、キンガマへ入れてある器の釉も溶けてゐるに相違ありませんから、直に上火を取り除き、風穴を土で塞いで、後キンガマが冷えてから取出すのです、併しこれは普通の溶け易い釉の場合ですが、若しも溶解け方の遲く釉を用ゐた時は、夫だけ長く火を焚かねばなりませぬので、其場合は能く注意して火が衰へかゝつたと、見れば、上火も下火も衰へぬやうに炭を次ぐのであります、下火を次ぐには窯の下部即ち風穴の上に炭足し口がありますから、上火の起つてゐるのを其處から入れるやうにするのです、

キンガマは粘り氣のある土に砂を混せて造りますし、又外窯を造るには別段土を擇まなくても宜しいのですが、矢張砂を混せた方が火にあたつて、堅固であります、

樂燒をやる方法は、マア荒増こんなものですが、それじや此方法で直ぐ旨く出來るかと云へば、然うは往きませぬ、何んでも實地にやつて見て、研究に研究を重ねて、ア、でも不可ない、斯うでも不可ないと色々と工夫に工夫を積んでやつとのことで樂燒らしいものが出來るのです、素人で轆轤ものを造らうと思ひますならば、前にお話し致した通り、中々轆轤が自由に使へるものでありませんから、先づ湯呑なら湯呑の原形と素燒とを黒人に賴んで自分は單に繪なり俳句なりを書いて釉をかけて、窯へ入れる位のところをやれば、然う手數もかゝらずに手輕に風流の遊びとして娯しむことが出來るのです、重に素人の人々は此方法をやり、偶には自分が原形を造つてゐる人もありますが、これはほんの自分が造つたといふ迄で、其手際は轆轤でやつたやうに精巧なものは出來ませぬ、併し前にも申した通り其不恰好なところに、云ふに云はれぬ韻致のあるものです、



母の感化

煙外山人

スマイルス氏の説く所に依れば人が弱冠の時に受けたる感化は、如何に細微なるもの丶如く見ゆるも決して消ゆるものでない、その頃小兒の智囊に扶植せられた思想は、恰も地中に蒔いた種子が時到れば萠芽を發して、段々發育するやうなもので、小兒の成長と共にその行狀や考や習慣の上に發展して枝葉を張るに至るのである、斯樣な次第で母は初めから子女の中に生くるのである、小兒は不知不識の間に母の應待に應じて、自分の行爲と生活の型とを定めていくのである、されば母の習慣は軈て小兒の習慣となり、母の品性は小兒の品性に明然と再現するのである

　母の愛は人類の感觸的の照管である、彼女の感化は人生の曙より始まつて、その全生涯に亘るものである、賢母がその子に及ぼす感化の度には强弱があるが、兎に角彼女の感化始終小兒の上に及んで之を支配するものである、人窮すれば父母を想ふ、小兒が成長の後、獨立の生活に入りし時、世の困難に逢着し社會の風浪と鬪ふ時、彼は先づその母に來りて相談を仰ぎ、慰藉を汲まんとするのである、これ自然の情である、幼時母によりて扶植せられたる純良なる思想は年と共に長じて、母の死後善行美德となつて現れ、子の品性に金剛の光を添へて來る、母を地下に送りて幾歲月、時は空しく流れて空漠の過去に凡ては葬られ、微かに母の記憶のみ子女の腦裡に遺さる丶時、子女は亡き母の鴻恩を想うて、感謝に堪へぬものがある、

　世の幸福と不幸、開明と無學、文明と野蠻は家庭に於ける婦人の感化に至大の關係を存してをるといふも、決して誇大の言ではない、婦人の感化は文野の程度を定むる水標である、母の手に抱かれたる小兒――彼は我等の目前に橫はる子孫である、この小兒が善くなる惡しくなると云ふ事は一に感化力ある

は、母の敎育と實例に因るものである、

小兒を最も感情的に敎養するものは婦人である、男子が人類の腦とすれば婦人は心である、彼は智性彼女は感情である、彼は力、彼女は美、溫雅、慰藉である、世に賢婦人と云はるゝ者でも婦人の判斷力は大概愛情を貫して働くものである、故に婦人は愛情にかられて判斷の正鵠を誤り易い、若し男子が理性の敎導に適するものとすれば、婦人の任は感情の發達にある、彼が記憶を充たすなら、此は人の心を領する、彼は我等に或ものに對する信仰を諭すなら此は更にそれを愛せしむるものである、人は主としてしとやかなる女性を貫して美德を發揮することが出來る、

小兒の品性敎養上父母の感化が如何に大なるかは多くの偉人の生涯に於て見らるゝ所である、

始に小兒の智慧にうけた感覺は一時利己主義やその外色々な惡癖のために掩はれることがあるが、後には善行となつて現はれ來るものであると云ふことは前にも述べた通りである、その樣な實例は少くない、兩親は如何にかして己が子に公正にして信實の立派な品性を養はんとて、全力を之に捧ぐるも……其結果は一見水泡に歸したかの如く思はるゝ事がある、けれども決して徒爾に歸したのではない、水に落ちた種子は一旦は腐つたやうに見えても、再び萠芽を出して實を結ぶ樣に、幼時兩親より受けたる純良なる敎訓や實例は、兩親の死後十年二十年の後人の胸を突いて現れてくる、そしてこれが動機となりて美しき結果を來たすやうな例は幾らもある、

貧しき賤が伏屋も、主婦が信實にとめる慇懃快活瀟洒の人ならば、世にも稀なる信實と幸福と安樂の溢れたる家庭となる、斯かる主婦を得てこそ家庭は家族生活の高尙なる關係をつなぐ舞臺となり、心を淨むる聖所、浮世の風浪をよくる避難所、勞働の疲勞を撫する波止塲、不幸のときの慰藉ともなりて、常に和氣靄々として春の如きたのしき溫かき家となるのである、

善良なる家庭は若い者のためのみならず、成人のためにも矢張最良の學校となる、老若均しくそこに精神の奮勵、忍耐、自省、義務の精神を養はるゝのである、また家庭は禮儀の最良なる學校となる、主婦は則ち善良なる敎師の役に任ずるのである、

最も健全なる人は家庭團欒の裡に坐して、嬉々たる子女と唱和抱擁するを無上の快樂、無上の幸福と思ふことを恥としない、かくあればこそ家庭は小世界である、生命の泉であるのだ、又家庭に於ける義務を遺感なく遂行することは、社會生活のため、社會的義務の遂行のために正當の準備となるものである、誰も己が家族を愛する者は己が故國をも誠實に愛して、之が爲に勤勞する人である、

家庭が人の品性敎養上最も善良なる學校たるを得べしとするなれば又その反對に最惡の學校ともなるものであることを忘れてはならぬ、幼年より成年に到る中間期は惡に最も染み易く化し易き時である此の大切なる時を、不幸にして惡風の家庭に育くまるゝ小兒は不知不識の間に種々なる惡に感染し、哀れ無智の奴と化するのである、小兒の運命は主として母や敎育者の遣口に依りて定まるもので、無敎育の婦人に子女の世話を委託せば、子女は自然とそれに化されて無智の惡風を享け、生涯拭ふ可からざる汚點をその品性に印象せられる、一家の母たる者が放縱にして所謂しだらなき人たらんか、その家や知るべきのみ、あらゆる醜穢、非禮はそこに跳梁り二六時中爭論の絶ゆることなき、いまはしき不幸の宿となる、斯かる境遇に成育ちし小兒は不幸の限りである、かの社會公安を害する犯罪人を見るに多くは所詮その搖籃たる家庭の紊亂に基せる悲しむべき運命の犧牲となつてをるのである、吁!

母の感化は父のそれよりも切實である、例へば父が酒呑であるとか或は博奕をするとか何れ性の良からぬ人であつても、その家の母たる人が智慮深き慇懃のものであるなら、家族は彼女の慈しみ深き袂の下に保護せられて、父の惡風に犯さるゝ事なく、兎

に角、廉潔の道に進むことが出來やうが、之と反對に母が身修らざる者である時は、父が如何に自己の身を處するに謹直であつても子女の將來を示導すべき善良なる方針の實例を示す點に於て、父の行爲は比較的微力である、

品性敎養の上に現はるゝ婦人の感化は隱微の中に行はれて人の目には隱れたる仕事である、彼女が靜なる家庭の裡にありて、孜々たる勤勞により或は健實不撓の精神を以て己が本分を實行しながら、その感化は着々と子女の品性の上に流露せらるゝのであるされば、婦人の最も大なる勝利は隱れたる家庭内の行爲であるから、多くは人に知られないでしまう著名なる人物の傳記を見ても、偉人の品性の敎養に與て力ありし母の人となりに注意せぬものが隨分あるやうである、けれども此が爲に母たる者の報賞が埋沒されたと云ふのではない、假令記錄に遺されなくとも彼女が與へたる感化は子女の品性に永く持續せられて活ける記錄となつて遺るのである、

男性の偉人は吾人の多く聞くところであるが、女性のそれを聞くこと甚だ稀である、然らば女性に偉人なしと云ふか、然らず、唯世は『善良なる婦人』てふ名稱を以て彼等を呼んで居るのである、家庭にありて將來の男子と婦人の品性を敎發して善良なる方針に指導するは、已に婦人の偉大なる事業である、かの畫家が靈筆を揮つて有名なる繪畫を書き、學者が腦漿を絞つて大著述をなし、詩人が神妙なる歌劇をものするといふやうな事と比較して、家裡に於ける婦人の事業は微々數ふるに足らずと云ふことは、無論出來ない、

子女の詩人、文學者、美術家などに對する關係に就て見るなれば、母の感情と趣向の感化が子女の天才發揮の上に偉大なる力あるは疑ふべくもあらぬことである、



精神病患者

醫學博士　吳　秀　三

身體と心とは分つ可らざるもので、精神は何んな細かい所に迄も行渡つて、神經系統の中にある、然るに其神經系統は何處にも同じやうに在るかと云へば、さうでない、心が此處には充分あり、此處には餘り無いとか云ふ差がある、で心と云ふものは神經の何處にも這入つて居て、毛穴にでも、心の何萬分の一と云ふものはあるけれども、主として何處に在るかと云へば、神經中樞にある、神經の白い筋のあるのは末の梢で、之を末梢といふ、中樞といふのは何かと云ふと、手、足、耳、目など、さう云ふ所から集つて運動とか、感覺とかの神經が集つて、一本の太い條になつて居る、是が脊中の脊椎の中にある之を脊髓といふ、そして足の方から來る條は、皆一つに集つて、其內に這入り、腰の所で腰部膨大といつて大きくなり、又上の方では頸部で、腕の方から來る條が集つて太くなつて居る、此脊髓は丸い綱のやうなもので、是が膜で包まれて居る、其外側には硬い膜があつて之を硬膜といふ、其次には又軟かい皮がある、それを軟膜といふ、此脊髓を薄く横に切つて染めて顯微鏡で見ると、何ういふ風に出來て居るかといふ事が分る、是も昔は中々分らなかつたけれども、次第に研究して染方が上手になつて來るに從つて、細胞ばかり染める、纖維ばかり染る、で斯う云ふ風に段々分るやうになつた、是は重格魯謨酸加里で染めたので、神經でないものは染まぬ、

それから脊髓が上の方に段々行くと『延髓』となる、是は皆條が集つて、恰も繩の集つたやうなものが皆太くなつて居る、此は甚だ要害部の處で、呼吸をする本だとか、或は心臟の運動の本だとか、其他種々の働きをする處がある、人間でも外の動物でも此呼吸だとか、心臟の働きをする處は針一本刺されても死ぬので、其間を潜つて筋が來る、即ち腦橋といふ處である、此延髓の左右に小腦がある、其小腦といふ處は、後から電信線路が通る、脊髓の眞中には孔があつて、腦橋の下にある腦室といふ所に通じて居る、此延髓から腦橋より大腦脚といふ所を通つて電信の筋が腦の本統の大腦へ這入るのである

人間の身體と腦との關係は、右の腦が左の手足を動かして、左の腦が右の手足を動かすといふやうになつて居る、又一つしかないもの、例へば胃の腑見たやうなものは、兩方の腦から行く、併し胃の腑でも、心臟でも、其右の方は左の腦が支配し、左の方は右の腦が支配して居るのである、それであるから右の手足が利かなくなつたなら、左の腦が違つて居る、左の方が利かなくなつたら、右の腦が違つて居る、モット面白い事は、右の半身の不隨になつた人は、左の腦が惡い、同時に言葉が絶れて旨く饒舌れない、左の中氣の人はさう言葉は惡くなく、饒舌れる、饒舌る事は左の腦が重に働くのである、だから右の腦が病氣になつても、左の方で饒舌る、手でも右の方が能く利くといふのは、左の腦がよく働くから其方へ能く覺え込む、又其方は餘計に遣はれるから、熟練して能く出來る、饒舌るのも腦の善い方が遣る、それから、又面白い事は右の半身不隨の病人に、言葉に故障のない人がある、普通と違つて居るからよく調べて見ると、是は左利の人である、乃ち左利の人は右の腦が始終遣はれるから、自然右の方が發達して居るので、さう云ふ人は右の腦で饒舌つて居る、話が横道へ這入つたが、總ての神經は段々腦の方へ來る、大腦は之を左半球と、右半球とに分ち、此兩方が一緒になつて脊髓に入る

凡て人間の腦が右と左が別々に働くものであれば、二つ考が起る譯である、其間を連絡して居る腦橋といふ處が、旨く一緒にまとめて行く、即ち腦橋は脊髓中樞、腦の中樞の電信を纏めて行く機械である、以上話したものをヒックルめて神經中樞の系統機關といふ、これが神經の土臺である、

神經の中樞及び神經の系統は脊髓から大腦といふ處迄をヒックルめて神經中樞といひ、其外神經末梢といふのがある、是は通常神經と云ふもので神經の條即ち纖維が集つたものである、つまり絹糸の紐見たやうなもので、其一つ〳〵の糸を膠を以て喰付けて糸の束にしてある、



ソコデ腦の方から肉を動かさうとすると、此神經の條を傳つて筋肉を働かすのである、即ち電信を傳へるのは神經である、夫から外側の處は神經を包むで居るものであつて、丁度電氣の針金に青い絹が巻いてあつて外へ電氣を導かないやうにしてあると同じ様に斯う云ふものがないと、此神經の中を傳はつて行く電信が、他に外れて何處から傳つたのであるか分らぬ、例へば電信でも歐洲から東京へ打たうとしても、是が間違つて廣島へ來るやうでは仕方がない即ち神經も其一つ〳〵の條を包んで置かんと、頭の

方では何處から來るのか判談が出來ぬ、手から來たのは手、足から來たのは足の處で、各線が違つて居るから、是は足から來たとか、或は手の方から來たとか云ふ風に、頭に入つて分るけれども、例へば手の先の處で、少しの隔りにて、二ヶ所へ同時に觸れて見ると場所が違つて居るけれども、一つの神經で支配して居るのであるから、詰り夫を一つに感ずるのである、乃ち例へば歐洲の何郡から來たと云ふことは分つても、何村とか何家とかいふ細かな事は電信では分らぬ、さう云ふ風な混亂を起さぬ爲に、其一つ〳〵の針金を巻いてあるのである、

扨此神經の末梢と云ふものは、唯電信の線が來て居るばかりで、本統の局のやうなものは末梢神經にはないので、丁度往來の電信の柱に耳を當て、今何う云う電信が通じて居るかと聞くと、唯風の音がする位のものである、それで電信局のある所は、即ち器械の据附けてある所は中樞神經である、此神經中樞の所には、細胞といふものがあつて、神經纖維を

生じて居る、此細胞の集る所は電信局のやうなものである、

さう云ふ風に電信局が中樞にはありますけれども末梢には神經纖維といふものがない、併し中樞には又纖維も澤山ある、其中樞の内で脊髓の方は地方廳の樣なもので、腦は東京の樣なものである、今例へば地方廳から東京の方へ幾らも上申しなければならぬ事があるけれども、皆縣廳を經て政府へ申出なければならぬと云ふ譯でなく、直接に上申する事も出來る、即ち下から直接にズツト脊髓を通り越して、政府即ち腦の方に來ることもある、さう云ふのは電信の線が岐れて居る、各府縣から地方廳を經て來る電信もあれば、直接に政府の方に來る電信も澤山にあるであるから、中樞の方には細胞もあるけれども亦纖維もある、それで電信の先は中樞の一番中樞所謂天子樣の方に往つて仕舞へば夫でお仕舞だ、其所まで往く間は、電信局に寄つたり、寄らなかつたりして行く條がある、さうなければ用が辨じない、

大變クドイ話であるが、精神と云ふものは神經中樞になつて居る、乃ち其中樞が完全でなければ、精神と云ふものはないのである、けれども精神と云ふものは脊髓でも腦でも、同じ程度に神經中樞全體に何處にも同じやうになつて居るかと云ふに、左うではない、其中に濃い淡いがある、マア脊髓のやうなものに、實際は精神と云ふものはないでせうけれども、脊髓神經と云ふものがあると云ふ說もある、蛙などの頸を切つて置いても、其蛙がよく立つて這つて歩く、又其蛙を紐でつるして置いて、鹽酸か何か刺戟性の藥をコップに入れて手なら手へ持つて行つて浸すと痛いから其手を動かす、水を持つて行つて浸けると今度は餘り刺戟がないから、少々は動かしても前程には曲げない、頸のない蛙でも矢張腦がある時にすると、同じやうなことをする、けれども今日は脊髓には精神はないと云ふことになつて居る、併し矢張り脊髓の方にも精神の幾分か極く下等なものか知らぬが肉體の精神的の働きと云ふものが、脊髓にもあるだらうと云ふ風に思はれる、兎に角矢張り脊髓がない時には、充分に人間の精神の發達と云ふものは出來なくなる、ソコデ脊髓病に罹りたる人は幾分か精神上の働きが鈍くなる、それで何處に重に精神があるかと云へば、脊髓の上の方になければならぬ、又腦は大腦、小腦、腦橋、大腦脚、延髓と云ふ樣に區別はあるが、延髓は呼吸とか心臟の運動とかを司る所で、小腦と云ふ所は總ての運動を旨い工合に整へて行く所であるから、さう云ふ處にも精神の幾分かはあるけれども、精神は重に此大腦にあるので、大腦がなくなれば人間の精神は滅茶苦茶になる、又動物の總てを見ると、動物の上等になるに從つて大腦が多きくなる、で精神は大腦の關係に依つて善くもなる惡しくもなる、完全になるも、不完全にもなる譯であるから、大腦と云ふものは大切なる精神の機關である、精神と云ふものは何うなるか知らぬが、活きて居る限りは大腦が完全でなければ精神が完全でない、死んで仕舞つたら外の處に往く

か何うなるか分らぬ、さう云ふ曖昧なる理屈は研究しない、醫者の學問と云ふものは實驗學で、實地に見る所の學問であつて、現に病人の持つて居る徵候だけを診察する、其向ふのを說を聞いて此方の頭で診た儘を云ふのであつて、今日は雨が降るから降ると云ふのである、唯單に十日後に雨が降るだらうと云ふ樣な事は、醫者の方では云はない、詰り活きて居る間と云ふものは、腦が完全でなければ、精神が完全でないと云ふ譯である、

段々話が進んで行く譯であるけれども、此大腦の中に何處に精神があるかと云ふと、大腦の中でも精神のある所は別であつて、詰り東京でも政治の出る所は內閣であつて、文部省、地方廳、郡役所と云ふ風に色々あるけれども、ドヽの詰り詮じて往けば內閣と云ふ譯になる、夫で大腦の中でも精神は主として大腦の『皮質』にある、それは大腦の外側の所にあつて、丁度樹の皮見たやうなものである、此皮質と精神との關係は離れ難いものである、此皮質の下に白質と云ふ所がある、皮質の方は灰白である、此白質の所には神經の纖維があつて、ズツト皮質に往くまでに終つて仕舞ふ、それで內閣まで線は來て居るけれども、皆此內閣で止つて仕舞ふ、其灰白質の處で總ての命令も出るし、すべての命令を其處で受けるのである、其處が神經の一番必要な部分であつて、主に其處に精神がある、其處が惡くなると種々な精神の障礙を起す、或は手を動かす事が出來ないとか、話をすることが難かしいとか、又は耳が聞えないとか、或は聞えても聾であり、目が見えても盲目であるなどの事がある、犬などでも試驗して此後頭部の處を取去つて仕舞ふと、犬がボンヤリして勿論香ひの無いやうにして置かんければならぬが、肉を犬の眼の前に持つて往つて動かすと、犬は頭を其方に動かす、けれども其肉を喰はうとも仕ない、平常ならば肉を持つて行けば喰付く、大騷ぎをやる、それは何だか物は見える、けれども肉と云ふ事が分らない、即ち見えても見えぬのである、孔子の所謂

見て見えず、食へども其味を知らずで、即ち精神の働かないもので、之をば皮質盲といつて又聞くとは聞えても、何の事か別らぬものを皮質聾と云ふのである、語を換へて言へば精神盲、精神聾であつて、精神の働きがないのである、聞く、見る、と云ふことは、精神の働である、

又正中葉と云ふのは、腦の中程の處で、其處には話をする時、手を動かす時、脚を動かす時、顏とか首とかを動かす時など、皆夫々備つて居る、是は動物にあるのであるから、人間にもあるに違ひない、是等は皆精神に關係があるのである、手を動かすのは唯手が動くのではない、皆精神運動である、精神聾、精神盲も同じ道理である、

それで皮質が壞れて物を辨別する智惠の働きも矢張りいけなくなる、併し智惠と云ふものは、腦の何の部にあるかと云ふことは、今日では未だよく分らない、手や足を動かすのは、精神の命令にあると云ふことは判るけれども、智力即ち算術の力、其他學術的の事は、犬其他の動物では、何うも檢査が出來ない、併し大體をクルメて見ると、智力は智頭葉、額葉、先づ其んな處にあると推察しなければならぬ額葉が惡くなれば確かに智力が惡くなると見なければならぬ、動物を見ると、下等の動物から上等の物になる程智惠が増して來る、犬、猫、象、とか云ふやうなものは、皆智惠が良いけれども、蜂だとか、又魚のやうなものには智力が惡い、智力が完全なるに從つて、能く見ると色々なことがありますけれども、概して大腦皮質の廣いものが、智惠が豪い、併し腦が大きくても、皮質の少いものは何うしても智惠が少いと見なければならぬ、隨分馬鹿の大頭はあるが、未だ今日何う云ふ譯か分らぬけれども、本統に働く處が少い、働かない處が多いと見なければならぬ、金ばかりで造つた物と、鍍金をして、内は鉛のもの、大きなものとは、何方が價値があるかと云へば、無論金の小さい方が善いに極つて居る、唯腦の形が大きいだけで善いと云ふ譯には往ない、要す

るに皮質が澤山になければならぬ、下等動物を見ると、腦の皺が少い、腦には方々うなりがあり、溝の所があつて、山があり、此うなりを回轉といひ、此溝を腦溝と云ふ、下等の動物には此溝が大變少いのである、上等の動物になるに從つて、此うなりが大變多くなる、海象と云ふ動物には是が割合に多くあるが、兎に角一般に云ふと下等の動物は此溝が少い隨つて此間に山も少い、さう云ふ風に回轉が少いと云ふのは、詰り皮質が少い、皮質といふものが此樣に折れて居るのは、手拭を疊むとうなりが澤山出來ると同じであつて、詰り屛風を擴げて置けば大變廣くなるけれども、之を疊んで置けば押入の中に這入ると云ふやうなものである、

それで精神と云ふものは、神經中樞にある、其中主として大腦にある、又主として皮質にある精神が病氣になつた時、精神障礙を起した時は、何處が主に惡くなつて居るかと云ふと、實際は精神ばかりを云ふ譯でない、何處までも其人が病氣になつて居るものと考へなければならぬ、であるから其人の身體を善くすれば隨つて精神も善くなる譯である、

精神病は全身病である、モット詳しく言へば精神病は單に精神の病でなくして、其人の病である、其中主として大腦皮質の病である、さうして精神障礙即ち所謂精神の間違ひを起して居る、其徵候が即ち精神病である、夫より外に精神病の本體と云ふものはない、精神病と云ふものは、主として精神の病であるけれども、肉體の徵候もある、其中に精神障礙が徵候中の最も肝要になつて居る、然るに腦病は必ず精神病と云ふ譯には行かぬ、大腦皮質の病があつても、精神病でないものが幾許もある、で精神病は精神の徵候が主になつて居ると云ふことが分る、例へば熱を起して氣が狂つたものは、精神障礙はあるけれどもそれは決して精神病ではない、熱病をさして狂氣と云ふのは間違である、又大腦の皮質に腫物が出來て、種々の病氣を起すとか、腦の梅毒とか云ふものでも、夫は精神病症がないときは只腦の病氣

である、又大砲が當つて大腦皮質が壞れても、其精神病狀が起らなければ、決して精神病でない、それで大腦皮質の病が直ちに精神病ではない、大腦皮質に起る病で、夫に種々の精神徵候があれば、夫を指して精神病と云ふのである、デ身體の病氣の激い時には、精神の病氣が激い、乃ち前申す通り精神病といふものは精神ばかりでないから、醫者は一番に身體を診なければならぬ、精神病患者を扱ふには、第一に脈を見たり、心臟を聽いたりして、それを一緒に癒して往かなければならぬ、であるから精神病と云ふものは精神の病が主になつて居るけれども、例へば丁度芝居でも團十郎一人では演れるものではない、夫は一人舞臺の時もあらうが、外の者も一緒に働いて始めて演れるので、團十郎一人で働けないと同じく、精神が獨りで働くことは出來ない、身體から精神が離れることは出來ない、であるから狂氣になる、と云ふことは身體の何所かに狂ひが出來て居る譯である、

◎次號　には吳博士の女子精神病者に就ての高話を掲ぐべし、

伊大利の學童十戒

伊太利ラギオ、エミリヤ行政官署が、同地方小學を修業したる學童に對して發布したる十戒は左の如し、

一、汝の學友を愛せよ、學友は汝の一生の伴侶なればなり、

二、敎へられたることを愛せよ、之れ精神のパンなればなり、敎師を敬すること父母の如くなれ、

三、汝は日々善行と有利なる動作にて身を潔くせよ、

四、汝は善人を敬し總て人類に對して侮慢なく、而も何人に對しても屈伏する勿れ、

五、汝は何人をも惡まず而かも自己の權利を尊重し、暴慢者に對抗せよ、

六、憶病なる勿れ、弱者の友となり、正義に臣事せよ、

七、一切の財貨は勞働より生るゝを忘る勿れ働かずしてパンを得るものは天下の賊なり、

八、眞理を求めよ、理性に反する事物を迷信する勿れ、

九、祖國を愛するは他國を惡み好戰なるものと思ふ勿れ、戰は野蠻の遺物なり、

十、一切の人類が正義と平和に於て自由士民として、生活すべき時代の到着を祈れよ、

結婚式の攺良

醫學博士
男爵　高木兼寛

我邦の政體は神樣を根本として居る、即ち伊勢の大廟を以て其主となし、以下順次路傍の稲荷、天神の祠に至るまで一の系統を成して居る、故に矮少なりと雖も、路傍の小社を輕蔑する時は引いて其主たる大社にまで及ぶ恐れがある、古人の所謂、蟻の穴も城壁を破壞するに至る事ありと云ふのと同じ事である、故に我が國體を維持せんとすれば、宜しく敬神の道を忘れざるやう、吾が同胞は心懸る事が最も必要である、故に神社の尊嚴を維持するは最も必要である、人を感化するに就ては、心法よりも色法を以て感化する効力が最も大である、即ち神殿を壯嚴に致せば、參詣する者も仰いて之を尊敬するの意を生ずるは人情の然らしむる所である、然るに今日の有樣では、男女生れて三十日にして宮詣りを致すけれども、其後改めて神社へ參詣する人は甚だ少數である、從つて神社に人民の親しみが薄らぎ、其の維持も亦困難の境遇に陷り、數百年の間吾が祖先の苦心して建設し、殘し置きたる神社も漸次頹廢に傾きつゝあるは實に遺憾に堪へざる所である、今日先づ神社に於ける儀式と致したきは結婚である、即ち從來の結婚に於けるが如く、吾が家屋内に於いて、之を行はず、殊に結婚は一代一回の大典であるから、神の前に於て嚴肅に之を行うべきものであると思ふ今後は民法ありて、昔日の如く三行半にて離緣をすると云ふ事に至り兼ねるし、旁々以て離緣等の憂ひ無からしめんために、一ツは又人民と神社との親しみを深厚ならしめて、其維持を容易ならしめ、益々神殿を尊嚴にして以て世人を感化し、世界無比の國體を維持せんが爲、結婚は必ず神社に於て嚴肅に行ふ事と定めたいと思ふ、

神前結婚式は別に面倒も何も無い、單簡の樣であるが、事實は極めて嚴肅と云はんければ成らぬ、予は何卒國内一般に此式が行はれん事を邦家の爲め切

望する、東京に在りては、數年前より有樂町なる神宮奉齋會に於て擧行する事に成つて居る、其式を行はんと欲する人は社務所に至りて依賴すれば立所に辨ずる、即ち社務所に於て一切の事を引受け、準備を設けるからして、關係者及び婿嫁等は、各自奉齋會の豫定したる時刻に至れば、婿は婿、嫁は嫁の控席もあり、準備の整ひ次第直ちに神前に於て式を擧る運びに成る、其式の大略を申せば媒妁人婿を率ゐ神前の右側に當る控室に入り、女媒妁は嫁を率ゐ左側の控室に入る、續いて嫁婿の父母兄弟親戚等は式場の下方に整列し、終つて主禮神前の左側に立ち、續いて男媒妁人婿を率ゐて神前の右側に立ち、嫁は左側に女媒妁人と整列し、其所に一人の女の介保者が有る、續いて一人の神官祓を成し、酒饌を供へ了つて主禮神前に進み祝祠を上ぐ、次で媒妁人夫婦神前に進み婿嫁に代り誓詞を奉讀す、終つて以前の席に復る、茲に於て給仕人（二人の少女にして服裝は白衣に緋の袴を穿き髮は下髮にしたり）銚子持つて出づ、之に主禮は神前に供へたる神酒を分與す、終つて給仕人一度び退き、神前に一個の机を供へ、三方に盃を載せて出し、交魚を嫁婿の前に供へ、其時媒妁人及び主禮の立合にて三々九度の盃を成さしめ、終つて指環の交換を成さんとする人は此時に於て行ふ、次に新夫婦神殿に向つて拜禮以前の席に復し式を終る、續いて親戚親交の盃は、右側左側に婿嫁側の親戚整列し、其前に長卓を置き、其上に各自に交魚と盃を供し、仲人夫婦は、下の方に机を置き、茲に二人の給仕人出で丶右左共に酌を終り、茲に於て仲人、先づ結婚式も目出度了りたれば、親類親交のために盃をお擧げ下さる樣にと挨拶成し、一齊に盃を飲み干して以て其式を成す、此結婚に就ての時間は前後共に三十分乃至四十分である、

◎梨本宮王女子御誕生　梨本宮守正王妃伊都子殿下には去四月二十七日午前六時二十分王女子御分娩あらせられ、御母子共御健康に渡らせらる、

朝顏の培養法

◎種子撰定と蒔付の方法　三寸五分鉢中に川砂約八分目位據り、其中心と覺しき所に種子を蒔くのである、蒔付べき穴の深さは、食指第一關節が先づ穴の中に八分位入る所が限度である、種子の撰定は其の發育十分にして、一見して外見の見苦しくない物であれば差支がない、穴の中に蒔付くる種子は、臍を下にして少しく鉢に種子を置き、其上に土を蔽うて置くものなれども、此臍を側面にして種子を直立して、播種するものあるが、後方よりも前法の方實驗上種子の發生の容易である。種子中の臍とは如何なる部分であるかを研究するには澤山の種子を集めて、よく見ると上下の何れにか凹みたる部分がある、此れ即ち臍であゐ此部分を下部にして而して土を蔽ふて置たならば、日ならずして臍の部分からは根が出でゝ、上部からは子葉が出て來る、彼の五寸鉢若しくは其他床蒔等をする時も、此の臍を下にして臍と反對の方向にある種子の外皮を剝取りて播きたるものは、發芽の際に遲速等の憂が少ないものである、故に外皮を剝いて播種した方が利益である、

◎播種時期　種子の蒔時は各人說て確然しない、又風土氣候の變異からも一定する事は出來ないが、京濱間及其附近の地方にては、先づ八十八夜前後に定めたらよからう、古來斯界の先輩も八十八夜か霜境とか云つて居るゆゑ此の季節頃が可なり、殊に大輪種は變化種とは變つてゐるから、遲くも六月匆々播種するやうにする、それが中旬にもなると、咲いた所で到底觀賞的價値が無い、以上は通例の播種方法であるが、余の實驗に徵すれば今少し早い方が利益である、先づ四月下旬から播き初め、遲くも、五月初旬迄に播き終つた方が得策である、然し早蒔は霜害の恐れがある故、豫め霜害を防ぐべき設備を要するのである霜害豫防は藁、苞の類で便宜設備したもので可い、

◎發芽迄の注意　種子を下してから約壹週間も經過してから種子の蒔つけられたりと豫測せらる上沭より、少しく右或は左に離れて堀起したならば種子が首尾好く、發芽するか若くは他の故障があつて發芽が出來ないとか云ふ事が明かになる種子の完全なもので、水濕の作用適當なるものは、最早膨脹して將に發芽せんとする狀態にあるか、左なくば最早發芽してズンズン伸び初むるものもある、斯樣に成長活潑なるものは、其儘ソツと穴に埋めて保護して措くか、否らずして未だ發芽しない物は前說通り外皮を剝取つて、從前通り灌水して種子の發生を促がせど、腐敗して到底發芽の見込なきものは、更に改めて播き直すと云ふ樣な取扱をする、是等綿密の注意の出來るものは一鉢一粒蒔の特長點である、

女子の社會觀察

東京地方裁判所第四部長　石井豊七郎

近頃裁判所に於ける民刑の事件の、世間の問題に上ることが多くなつたやうであるが、刑事問題に偏して傍聽の多くなつたことは事實である、それは新聞雜誌に多く紹介せられるやうになつた結果、いかに裁判が面白かるべきかと、少し變つた事件であると、裁判所にては傍聽人の多數なるべきを豫定して傍聽劵を出して人數を制限する、十時の開廷に、七時頃になれば滿員の有樣である、かくの如きは喜ぶべきことであらうか、又悲しむべき現象であらうか直接その職に當れるものは、その利害關係に就て大に研究せねばならぬことゝ思ふ、

往々裁判所の傍聽席に婦人を見ることがある、家庭へ醜陋なる事實の記載ある新聞雜誌の迎へらるゝさへ苦々しきことに思ふに、態々裁判所へ醜陋の事件の傍聽に出掛けるなどは以ての外のことゝ思ふに誰も異存はあるまい、さすれば新聞雜誌に從事する人々は、さう云ふ事の豫防に屬する策を執らねばならぬことゝ信ずる、

それが事件を大架裟に書たてゝ、さて今日この事件の裁判があると云ふのであるから、傍聽人を新聞雜誌が召集する有樣になつて居る、さて裁判所に現はるゝ事件は、一として罪惡に屬しないものはないされば模範とすべき事柄のあるべきいはれはない、刑事であれば姦通とか、强窃盜とか、放火とか、謀故殺とか、民事であれば義務の不履行とか、お家騷動とか、すべて排斥すべき罪惡である、これを頭腦の確ならぬものに見聞させることは、害毒こそ流せ利益なきことゝ一應は考へられるのである、

併し裁判所に傍聽者が増加するとか、新聞雜誌に裁判所の事件の紹介あるとか云ふのは、裁判所が奬勵して然くさせる譯でもなければ、新聞雜誌が進んで記事を掲げる次第でもない、寧ろ今日世間に於ける傾向、即ち好奇心がそれをさせるのである、隨つて

新聞雜誌にも盛んに書立てるやうになつたのだあらう、

然るにその好奇心の爲に、かゝる傾向になつたとすれば、之を防がんとして防がれるものではなく、防げば却つて或方面に毒を流すことになる、さればこの好奇心を利用して、世道人心を益する考案を立てるより外はない、この考案如何によつて、有功に利用せらるべきものがあらうと思ふ、子供の好奇心が、常に教育上利用せられつゝある如く、人の好奇心を利用することは大切である、

如何に利用するかと云へば、由來裁判所に關係ある事件の如きは、その局部々々に於ては、必ず排斥すべき罪惡に屬することのみであるが、その原因結果に就て研究すれば、多大の敎訓あるは言を俟たぬことで、何故に犯罪するに至つたか、その動機に就て觀察すれば、各人の家庭に於ける缺陷を發見することもあらう、何故に墮落するに至つたかを研究すれば、各人の修養に就て反省すべきこともあらう、

維新の功臣と尊敬されたる家庭にも、猶恐るべきお家騷動を釀し、驚くべき事實關係がありとすれば、我々の家庭に於ては、如何に警戒せねばならぬか、戸籍上の問題が、如何に重大なるかと云ふ如きことをも解せらるゝであらう、故に一面に於ては常識を養ふことが出來る、社會の光明の半面を知ると同時に、暗黑の半面を熟知することも强ち不必要のことではあるまい、

就中家庭にのみ蟄居勝の夫人方は、つとめて各方面の研究に注意せねば、その智識はあまりに淺薄にして、家庭内に屢々起る問題を解決することも出來ねば、社會の逆流に對抗して、成功することは覺束ない、我々今日の家庭には、慈善市に出掛けるとか文藝會に出席することは大して必要でない、それよりは成るべく多く八百屋にも出掛け、裏店の前も通ることが必要である、隨つて成るべく暗黑の方面を廣く委しく研究して置くことが、處世の參考にもなつて大に利益がある、

昔者板倉周防守が編笠を被つて、上を見るなと云はれたも、下ばかり見て居れと云ふのではない、下情に通ぜよと云ふことである、畏れ多きことなれど我　皇后陛下に於かせられても、往年御櫓を設けて庶民の通行、生活狀態を御覽されたとのことである、

されば我々各方面の研究をなし、處世の策を誤らぬやうにせねばならぬ、社會の暗黑面を見て、半面の光明を認めねばならぬ、裁判所に傍聽に出掛ることも、强ち害のみ伴ふものではないが、それを矯正するに必要な條件は、新聞雜誌に於て、原因結果を叙して、研究すべき要點を記するやうにする、たとへば昨年女鑑に掲載したる、訟廷より得たる婦人觀の如きは、家庭に讀まれて何等の損害なく寧ろ世道人心を稗益するものである、すべての筆法に行きたいものである、



文學を以て倫理に代へるは、間違つた議論かも知らぬが、近來の小說は、多く成功の一部分戀愛の一部分をのみ現はしたもので、原因結果を細叙せぬ所より、却つて害毒を流すやうになつて居る、花は美しいものであるが、瓣のみを書いて奇麗とは見えない、靑い葉に黑い枝とがあつて配合のよい如く、成功の半面に悲慘なる歷史もあり

戀愛に狂したる結果慘憺なる狀况に陷るといふ如くそれを廣く寫し出せば、小說としても成功し、そを讀んで稗益する所も尠くないのである、たゞ必要なるは繰返す如く、美しき一部分、醜き一部分をのみ標示することがよくないのである、

美なるもの丶中に醜なるものあり、醜なるもの丶中に美なるものあり、そを奧深く研究して、自分の心を研くとならば、必ずしも幾多の犯罪事件を裁判所に傍聽するも、更に差支なきのみならず、或意味に於ては奬勵すべきことであらうも知れない、注意すべき要點を忘れないことを希望するのである、

歐洲婦人と家庭

文學士　齋藤一如

英國を始め歐洲諸國に於て、家塾制の發達は驚くべき程にて、其數の多きは更にも言はず、其組織に於ても、をさ〳〵堂々たる公立の大學に讓らぬがあり、倫敦より程遠からぬチエルトナムといふ處にミツス、ビールが監督の下に立てる一女學校の如きは五十年以前の創建に係る、當初は極めて、小仕掛なりしも漸次其規模を擴張して、今日にては幼稚園あり、小學部あり、中學部あり、大學豫備部ありて制度も尤も整へり、大學豫備部の課程を終らばオツクスフオード又はケムブリツジの大學に入るを得ると勿論にして、其名は大學豫備といへど、實際は大學の課程をも敎ふ、かく制度の整へる單にチエルトナムの女黌に留まらず、歐洲諸國多く之を見る、家塾の寄宿生は塾の大小によりて其數を異にし、多きは四五百人に上れるもあり、少きは十數人に止まれるもあり、家塾にては家庭的生活をなし、宛然一大家族を作れり、此制度は單に家塾に留まらずして、延いて公立の學校にも及べり、ケムブリツジ、オツクスフオード諸大學に於ける女學生は各四五百人に達しカレツジに寄宿して通學す、

英國などに於て中等以上の婦人の敎育の進步せる

は意外なり、家庭に於て母親が其兒を敎養するは更にも言はず、其子己に大學まで進み居るも、尙其學科上の相談にあづかりて、汝は辯舌爽かならざれば外交官にはいかゞ、汝が立身の方針は斯くせばなど助言を與ふるなり、婦人の敎育是程に進みたればこそ、家庭敎育も望まるゝなれ、

英國婦人の、兒女を敎養するや、頗る嚴格にして一歩も假借せざる趣あり、上流社會にては女子を學校又は家塾に送らずして、多くは保姆敎育に一任す保姆是等上流の家に就きて兒女を敎育するや、其母より全權を委任せられたることゝて、大に其畏敬を受く、上流社會にありても、女子未だ年頃に達せざる間は、服裝も至極質素にして、遙に身分賤しき保姆の服裝に劣れり、此點よりしても兒女は父母に次いで保姆を敬する意を生ずべし、保姆が語學などを敎ふるの嚴格なる、覺え惡しきときは之を一室に閉ち込めて食卓を共にせず、母なる人は目前に我子の斯く嚴罰せらるゝを見て、中心不快を感ずるにもせよ、己に敎育を保姆に一任したる上は、如何に取扱はるも致方なしと、十分あきらめ居るものゝ如し、保姆敎育の盛なるにつれ、保姆學校を各處に設けらる、倫敦より汽車路八時間餘程離れたるウインタミヤの保姆學校は尤も壯大なり、是等の學校にては通例の師範學校の課程よりも多く、禮式、衛生、各國語學等を敎ふ、保姆としては是等の心得尤も肝要なればなり、以上述べたる如く上流にては專ら保姆敎育に一任したり、

さてまた中等以下より下流社會へかけては、女子自活の必要あれば、職業學校に通學するもの多し、是等の學校にて敎ふる職業は、其範圍頗る廣くして裁縫、刺繡、繪畫等の外、電信電話の技手、寫眞術又は泥工等の職業をも敎ふ、さて蘇邦にては、女學校にも、木工の一科を置けるもの多く、故に是等中以下の家にありては、一寸したる器具の破損などは大工の手を煩はさずして女兒善く之を修繕するなり泰西諸國にありては大抵の家には、客間の飾付とし

て泥塑像又は繪畫等を備へざるは無く、職業學校を卒業したる女子は、能く是等の需用に應じて、優に自活の計を立つるを得、彼國の女子は半年程も繪畫を學び、直に之を陶器に畫きなす事を學び、手製の陶器畫をクリスマスの贈物にするなど何處までも拔目なし、タイプライターにより口授を筆記することはすべて女子の職業に成り居れり、醫術の如きは女子にして從事するもの頗る多し、

家塾に通學する女子にして十分の資力なきものは授業生の如きものとなつて、教授を助け、或一定の時間内に於て敎を受くるなり、家塾の月謝は隨分高し、さてまた學校或は家塾に於ける女子の體操は、頗る盛なるものにて、蘇格蘭のエヂムバフの某家塾にては、たゞ鐵棒銃砲を取扱はぬばかりにて、毫も男子と異ならず、非常に烈しき兵式體操の如き物を學び、且打球戯のために女生の生傷絶ゆる隙なしとば驚くべき限りならずや、是は一方より隨分攻撃を受け居れ共、更に撓まず此方針を換ずといへり

上流婦人と金剛石

歐米の社交場裏に於て、ダイヤモンドの貴ばるゝことは、今に始らぬ事であるが、近年に到り其使用高は益々増加し、餘響は引いて我日本國にも及び、其需用高は年一年に加はつて、今では一年使用高約五六百萬圓程に達して居るとのことである、で先づ世界で一番大きいダイヤモンドと謂ふのは一昨卅八年南阿プレミヤ金剛石坑で發見せられた重量二封度の石で、其價格は約十八億四千萬圓、次は英國皇室所持の「コヒノヤ」で、重量が百六カラット有つて、價格は七十萬弗と號して居る、近年我貴婦人が切りにダイヤモンドを持囃す樣になつて來たのは事實で有るが、偖て相當な品を買つて見れば、又其以上の大さのものを欲がるのが、ダイヤモンドに對する一般の傾向で、其場合古い石を捨てると謂ふ譯に行かすと謂つて、折角買つた物を屑屋に賣捨てる譯にも行かず、斯の如き場合に歐米にあるやうなオークション制度の無い日本の社會では、甚だ不便を感ずる次第で有る、所が近頃其不便を補ふ人がぼつぼつと起つて來たが、其内で先づ手廣くやつて居るのは、日本橋村松町四十八羽根田萬太郎氏で、氏は貴婦人の既に厭きた不用ダイヤモンドを高價に引取ると共に、新しい品とを交換して、貴婦人をして流行に遲れない程に助けて居るとの事で有る、兎も角も其樣な商賣の世に現はれたのは日本にダイヤモンドの盛に流行する樣になつた現象であらう、喜ぶべきことでもあるまい。

◎婦人敎育會紀念會

大日本婦人敎育會にては、去月十一日午後二時より高輪なる毛利公爵邸に於て總會を兼れ創立二十年紀念會を擧行したり、來會者百八十餘名毛利五郎男幹事に代り開會の辭、並に會計及び事業の報告をなし、總裁閑院宮妃智惠子殿下は左の令旨を御朗讀あらせらる、

御令旨

創立以來諸氏の盡力に依り、事業益々隆盛に趣き、玆に總會を兼れて、二十年紀念會開催の日に遇ふ、智惠子深く之を喜ぶ、諸氏尙一層奮勵して、本會の主旨を遂行せられん事を望む、

右に對し會長毛利公爵母堂は、左の答辭を朗讀せり、

本會創立以來旣に二十年の星霜を閲し、玆に本日總會を兼れて、其紀念を開くに當り、幸に總裁殿下の臺臨を辱うし、特に御懇切なる令旨を賜ふ、安子首め會員一同感激措く能はざる處なり、向後益々奮勵して、會員諸氏と共に誠心誠意本會の隆盛を期すると同時に其目的を遂行し、尙一層女子敎育の普及を計り、以て御懇篤なる殿下の令旨に副ひ奉らん事を、安子一同に代り謹で奉答す、

次で棚橋絢子女史は、本會の沿革より說て、將來の希望を述べ、本會より總裁宮殿下並に毛利、鍋島の正副會長へ紀念品として、金製徽章付白綢紐の帶締めを贈呈し、次に來賓松平正直男の演說あり終つて咲き亂れたる紅白の躑躅の間を過ぎて、後庭の餘興場に移り、毛利家奥女中の趣向に成れる手踊あり、總裁宮殿下も毛利公爵夫人の御先導にて、特に御臨場遊ばされ、時々御微笑を漏らし玉へる樣拜し奉りぬ、餘興終り茶菓の饗應ありて、五時散會したり、

◎淸國赴任の模範的女敎師

近頃淸國各地學校の招聘に應じ、彼地に渡航する女敎師頗る多く、殆ど我が女學界の一流行の如き觀あるが、退いて彼等女敎師の學識經驗人格並に其淸國語の素養等を見るに、槪れ不充分にして、內地に於てさへ相當の敎育家たる資格なき一女學生に過ぎざるもの多きが如し、是等女學生が僅かに一年內外の速成淸語を修め、突然海外に飛出すなどは、啻に其人の爲に危險なるのみならず、延て我敎育界の信用にも關すべし、そが中に今回廣東なる官立兩廣師範學堂の聘に應じ、先頃赴任の途に就きし實踐女學校淸國留學生部敎師濱松子女史(廿二)の如きは、天晴れ他の模範たるべき資格を具へたる人なるべし、まつ子は信州諏訪の人、濱興兵衞の二女、夙に長野高等女學校に學びて俊秀の聞へあり、十八歲の節上京し、目白なる女子大學家政科に入、兼て英語、音樂等を修めたるが、其年來の志望は淸國婦人の敎導にありたるを以て、上京と共に外國語學校敎師松雲程氏に就て淸語を學ぶ、終始怠らず、去年女子大學卒業の後は、實踐女學校に聘され、專ら淸國留學女生の敎育に從事し、深く下田歌子女史の信賴を博したるが、今回我が女子敎育の實況視察と、女敎師招聘の爲め來朝せる廣東特派視察學務官兼兩廣師範學堂監督王舟瑤氏の爲に、切に來任を懇請され、終に十分の待遇を受くべき契約を以て、赴任する事となれる由なるが、松子の人格と素養とを知れる者は、何れも皆其成功を疑ふ者なしと云ふ

三婦人の處世談

橘　総　子

夕陽あざやかに墨水に映り、十里の長堤には、花ならぬ葉ざくらの眺め一しほおもしろきを見渡しつゝ、しきりに舊きことと思ひ出でたらんやうに、橋のほとりに立ちもとほりて、睦まじげに何事をか語らふ二人の婦人は、誰が目にも知らるゝ多年の親友にて、その言語容姿におのづから學生時代の遺風なん見えける。

懐中なる時計をさしのぞきて、驚きたる二人は、倘も江東をさして急ぎ足に進みぬ、行く所はいづこ訪ふ人は誰ぞ。

あないぶかしき君達の音づれかな、と平調に二人を迎へたる主婦は、曾て物に驚きたる樣見せぬ癖ある滑稽の婦人なるが、いま時ならぬ頃、此地にあらぬなつかしき友の、ふりはへて音づれ來しを、わざとかゝるさまに迎へたれば、そが心根を知れる二客は、をかしさにえ堪へず、けふこそは君を驚かさめとの心がまへにて、かく不意に音づれ來しものを何とか思ひたまふぞ、とさわぎたちて、その客室に導かれぬ。

主客三人が、十とせあまりの交情を温めて、憚る所なきさま〲の談話は、さま〲の方面より湧起りぬ、主婦は多年良人を助けて、實業の効著しき人なり、二客、甲なるは良人が布教を内助して、事業の才ある人、乙なるは生家にありて、教育と文筆との業に從へる人なり、かく境遇、位置、職分を異にせる婦人が、各々がわ方面より見たる處生談こそ、とり〲にをかしけれ。

二客こも〲云ふ。

主婦よ、妾等が十とせ以前、かの校舍の一室につどひて、共に書を讀み、史を物語りし時は、書家、且つ儒者の女なる君に、かゝる實業の才おはすとは豫期せざりき。

甲客また云ふ。

五とせ以前、妾が上京の折は、君が消息は更なり其みすまひさへ定かならざりしを、妾等二人、辛うじて此わたりを探り、道すがら云ふやう、彼の君、いま如何にしておはすらん、誰が家に、何をかすぎはひとしたまふらん、性偏りて嫁ぐを好まざりし彼の君に、けふこそは嫁ぐべき道を説きさとすべけれ抔いひつゝふと見れば、君が乳兒いだきて此門に立たせたまふに、あつとばかり叫びて、さてもよくこそこゝにいましたれ、久しく恙なくおはせしか、その御子は誰が君のにて候ふ、此なるは誰が君の御すまひにて候ふ、といとあやしくて先づ問ひつめし答に、皆わが物に侍る、とのたまふを聞きて、再び驚きつゝ此處に導かれし折こそをかしかりしが、かくてけふ亦ゆくりなく、君がり音づれまゐらすれば、ます／＼幸多くて、萬にさかえおはすることの嬉しさよ、げに人の運命ばかり、あやしきものはあらじ、と、言ふをも待たず、主婦は得意げに。

實にしか侍る、妾もはじめ此道に馴れざりし折は、幾度かためらひ、外には敗を取りしことも數そひしが、經驗は良教師とかや聞きしに背かで、多年の勤勉と忍耐とは、かくわが家を興して、益々事業をひろうせしめぬ、たゞ聞きたまへ、それにも猶かの秘訣てふものはあるぞや、欺かれもやせん、奪はれもやせんと、胸せまく人を疑ひなば、是も彼も皆あやうきことのみにて、とかくして欺かれ奪はるゝものにはへれば、己は胸ひろく、小利を捨てゝ、ある限までは、概ね人に任せ、只管人の爲世の爲よかれとのみ冀ひて、外つ國に輸出する物は、一きは心くばり濃かにして、御國の利を思ふにこそ、妾にこの異なる心の酬ひとして、今の幸ある運命をうけぬ、禍福は知り難きものなるが、こを求むるにも術ありて、また概は序を踐みて來るものに侍らずや。

と云ふに、初より默して聞き居たる乙なる客のいらへ。

さてもけふは益ある言をきゝしものかな、世にさまぐ＼のわざはあれども、そが理をたづぬれば、皆

一すぢに侍り、中にも敎育の業なん、身を捨て、已を捨てゝ、一重に匡世博愛の爲にとつとむるにこそ始めて空しからぬ名も揚り、求めずとも譽はその身に集まりぬれ、たゞ世にはえせもの所を得て、ひたすら俗に媚び、世の意を迎へて、益々其富と譽とを重ねんとするさかしまごと時を得たれば、さらぬものが、其主義を枉げざらんやうに事を遂げんは、實業の道よりも一きは難くはべるにや、されば今君かのたまふ勤勉と忍耐とは、已も久しう試みしを、嘗てその効あらで、猶しば〱敗をくりかへすのみなるは、未だ君が秘訣てふことを知らざるにや、けふはいたく君に負けはべりぬ。と、面なげにかこてば。

さないひそ、見ゆることゝ、見えざらんことゝは勝敗の境をくらぶべきものかは、見ゆるとの十とせにていみじう進むべきものならば、見えざらんことは亦十とせをも重ぬべく、そが中にも、眞の布敎は眞の敎育よりもいと難きぞかし、道の爲に苦しむとは、實にかゝる我等のつとめにはべり、身をも心をも碎きて、辛うじて此尙き御敎に耳かたふける人を求むれども、絶えて良き効の見えざるは、いづくにも正しき事は入り難きためしたるにや、はたわらはには美きことゝ行ふを譽とはすれども、その内心はしかわらぬにや、かへす〲も片腹痛き世の中にはべり、さもあれど、已が望のみは、世にあらんかぎりつながれて、いさゝか報ひたらずとても正義と職務との爲めに、果てなんことの願はしきにこそ、君達はいかゞおぼす。

と年長にして處世の道にたけたる友のさとしに、已れまけて打ちしをれたる人も、勝ほこりたりし人も、皆うなづきて、げにも〱と口々にほめたゝへて、勝負なきことゝなりぬ。

かくて話は、如何なる大希望もなくて、たゞ恣まに獨身にてある人の、極めてあやまれることなどにうつりしに、其の一人

しか云ふ君が獨身にていますこそ心得ね、ときび

しく答むるに。そはいと深き故あればなり、後の日おもひわたりたまふこともありあん、といふを遮りて、重ねて聲高に、そは何故か、いと要なきことぞ、とさまぐに罵れば、又一人は語靜にときさとしなどして、いとむつかしうなりたれど、志操かたくして動かすべくもあらず、且つその辯じたることゞも皆理ありて妨ぐべきにあらねば、其の内の一人、また他の一人を諭すやうになだめて、此議論も事なくてをさまりぬ。

深く別れを惜みたる主婦は、二客を墨堤に近き方まで送り來て、いつしか舟浮べて遡りし下流よ、といへば、二客、いかて忘れはつべき、また來ん年の春をちぎりおかばや、いざこのゆかりある川にて、盡きぬなごりをたゝはや、とあとふりかへりつゝ、右左に立別れゆく人影、誰れ彼ぞと見えわかずなりぬ。

女教師の勤務に就て

所謂女子獨立の思潮が滔々奔流しつゝある結果、近來女教師の數漸く多きを加ふるに至りしが、其の獨立主義も遂に透徹するは困難と見え、何時の間にか結婚するが例なり、然るに結婚後妊娠、又は出產の際に於ける缺勤に就ては、從來何等の規定あるなく、是が爲め不便大方ならず、遂に長野縣にて他府縣に先ち、本年度より特別規程を設け、有夫の女教師は、妊娠分娩するも、其缺勤は軍人の一等症(負傷)と同一にして私事にあらず、當然公認せらるべきものなりと定めたるが、右に關し府下に於て、比較的多數の女教師を有する三輪田高等女學校教頭三輪田元道氏の意見を敲きしに、氏は答へて曰く、十四五名の女教師を聘用せる學校に在りては、其の中先づ二名は妊娠分娩の爲め缺勤するものと見做し、一年間の授業日數約二百二十日の處へ、此が爲に一名約四十日即ち二名にて、八十日間は缺勤する勘定なるが、其の缺勤中他の教師をして補なはしむるとともに、又補缺教師にも、不平の聲無からしむるやう、相當の準備を要するや勿論にて、或る女子教育家の如きは「多數の女教師を用ゐる學校にては、必ず一二名の補缺者を備ふべし」と唱へ居る程なり、元來婦人は或る程度迄教師として恰好なるも、亦或場合に於ては頗る不適當の點あり、故に教師として最も適せるは「既に生殖機能を失ひし者」第一にて、次は「未亡人」次は「未婚者」の順序なり、但此は素より其個人の品行を別問題としての事にて、又未婚時代の女子は

教師として最も資格あるが如きも、一朝結婚するや今迄の瀟洒活潑とは生れ變りし如く、白粉濃厚の可厭に、デレ〳〵する爲体は、二目と見られたものにあらず、而も妊娠分娩等の相繼いで起るが故に、少しく寛大に失するの嫌はあるも、女教師としては既に生殖機能を失ひし婦人が、最も適當なり云々と、又以て個中の消息を窺ふに足らんか、

百十九名の孤兒歸鄉の途次

岡山孤兒院に在りし東北凶作地の貧兒百十九名は、十名の附添人に保護されて、鄉里に送還さるべく、去廿二日午後零時十分新橋停車塲に着したり、定刻前より原胤昭氏及び芝敎會の有志は、同停車塲に出迎へ、着車を待居たるに、豫定の時刻より四十分延着にて到着し、貧兒一同は鄉里に歸る嬉しさに、我先と勇みて降車し、附添人は又一々抱上て、甲斐々々しく降し呉れ中には、物馴ぬあたりの氣配の呆氣に取らるゝ兒童もありたり、一同はプラットホームに、整列人員點檢の終りたる後、原氏の案內にて、塲外に出でたり、頑是なき一隊の兒童、貧民とあれば服裝手廻りの華美なる筈なけれども、垢染まぬ手織木綿の衣服を着け、男子は小倉袴をはきたるも、多く其小ざッぱりしたる、岡山孤兒院の行屆きたるが知られたり、靳くて一同は何やらの包みを重げに提げ、ズック製の鞄が肩より腋に垂れ、帶の邊には銘々に一筋の手拭を挿み、或者は帽子もなく、或者は下駄の緒を切らして、跣足の儘歩みつゝ、芝口電車停留塲にて歩を停めたり、是より先き東鐵會社にては、是等貧兒の爲め、電車無賃乘車を承諾し、同停留塲に二輛の電車を豫ての時刻に送る約束ありしなり

兒童の談話

乘車迄には多少の時間ありと云ふに某記者は貧兒童の歸鄉の感は如何にと聞き廻りたれども、何にせよ八歲より十三歲迄の兒童物言ふことの恥かしく、要領を得ざるが多き中に、一兒童の痛く瞼を腫して、其周圍には墨の痕の狼籍たること仔細あるらしく覺えたるが、聞けばその兒童は鄉里の事はうろ覺えにて、岡山孤兒院の方が戀しく、戀しさの餘り泣きに泣きて、靳かる次第、其姓名は小野寺勳、鄉里は宮城縣登米郡登米町なりとは、附添なる一婦人の談なり、次に尋ね見たるは長坂じんと云へる一幼女にて、是は先年父が死亡續て飢饉の襲來可弱き母親の腕に生活難を抑へ切れずして、一家離散、我はツゥゴク(中國の意)へ送られたりと東北訛りの音聲重く語る中にも、明日は母親の顏見らるゝの嬉しさの勇みは、あり〳〵と見えたり、外に古川某とて八歲許りの女兒二合入の正宗の貼紙ある空壜を携へ居たるを、記者は揶揄ひて「オヤッ御酒を飲だの」と問掛けたるに、忽ち顏赤らめ下向きになりながら「是は酒でなく水……水……女は酒は飲まぬもの……」答辯堂々たり、可愛らしく又滑稽なるは、年の程十一二と見ゆる男兒の、此蒸暑さに冬季用の厚手袋を拙者などは靳樣な物を持て居ると誇り顏にはめて頻りに見せびらかし居たるにてありき、一々尋ねなば、其家庭に就て何れも悲慘なる物語りあるに相違なく、轉た淚の種なるべし、一同の父兄は今日それぞれ最寄の停車塲に出迎へ、附添人より兒童を受取る都合なり、因に一行兒童は百二十名の處、一名途中發病の爲め、名古屋にて下車したりとなり、

國光社發行

東京高等師範學校教授 文學士 松本孝次郎著

家庭に於ける兒童教育

總クロース 菊版二百頁 定價五拾五錢 郵税八錢

本書は**兒童教育專攻家**として教育界に名聲隱なき著者が多年研究せられたる**學說**と**實驗**とに基き**實地家庭**に行ひ得らるゝやう極めて**平易且切實**に談話體を以て**兒童教育法**を說述せられたる者にして世にありふれたる家庭教育書類と全く其の**選**を**異**にせり而も何人にも解り易く容易に**育兒**の**妙訣**を了得するを得べしされば世の父母たる人は子女將來の爲**是非熟讀**せざる可らざるものなり

此書は亦**兒童教育**の任にある**學校教師等**には必缺く可らざる**良參考書**なり

重要目次

◉第一家庭に於ける德育 ◉第二家庭に於て起り易き弊害 ◉第三兒童の賞罰 ◉第四遊戲の價值 ◉第五兒童文學 ◉第六兒童と自立心 ◉第七感情教育 ◉第八家庭と園藝 ◉第九兒童と言語 ◉第十兒童と圖畫 ◉第十一青年教育の注意 ◉第十二男女の兒童 ◉第十三小兒室の構造及設備

發行所 東京市京橋區築地二丁目 電話新橋八八、二六九三 株式會社 **國光社** 關西大賣捌 大阪市南本町 **積文社**


御用諸學校
體操器械
TRADE S.A MARK
ANDO-SHOTEN
No.5 Urajimbo-cho. KANDA. TOKYO.
S.A
Manufacturer of Various Appliances for Gymnastic & Other Out-door Games.
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四八四番
ピンポン室內テニス
一號一箱 一、二二〇
二號同 一、五〇〇
三號同 一、六八〇
四號同 一、八三〇
號外同 〇、九六〇
其他各種御注文に應じ製造可仕候
御用 體操器械
體育用品
東京神田裏神保町五
S.A. 安藤商店
電本 484
確實 製造販賣
ピンポン改良室內テニス（旅行用）
一號一箱 二、〇三〇
二號同 二、二三〇
三號同 二、三五〇
四號同 二、五一〇
同用テーブル上等一臺拾參圓四拾錢並等一臺十二圓
テニス用ラケット一組四本
一號大人用 一二、五〇〇
二號同 一一、〇〇〇
三號同 八、八〇〇
四號同 七、四〇〇
五號同 六、七〇〇
六號同 五、七〇〇
七號同（小學用） 四、七〇〇
婦人用（一號） 七圓
同二號 六圓
改良櫻二重枠ラケット一組
一號 拾參圓參拾錢
二號 拾壹圓七拾錢
三號 九圓五拾錢
四號 八圓貳拾錢
五號 七圓貳拾錢
六號 六圓貳拾錢
七號 五圓貳拾五錢
テニス組一張 一、八八〇ヨリ三、一一五
〇迄各種あり升
東京市神田裏神保町五
安藤商店
電話本局四百八十四

文藝

夏ごろも

侯爵　鍋島直大

新樹廻庵

我やどのめぐりの若葉おひ茂り
となりの家も見えずなりにき

山寺子規

山寺の鐘の音絶えてしづかなる
空に一こゑなくほとゝぎす

遠子規

ほとゝぎす影は見えねど月の夜の
雲間はるかに聲ぞきこゆる

庭梅雨

なか庭の乾く間もなしさみだれの
昨日もけふもふりつゞきつゝ

田上螢

小山田にうつる螢のかげ見れば
さながら星のこゝちこそすれ

夏雲

夕立の雲のみ見えてふらぬ日は
いよ／＼あつきこゝちこそすれ

夏衣

こゝちよく覺ゆるものは暑き日も
薄ぎぬ着たる端居なりけり

望遠帆

ゆくばかり追手はふけど走るとも
見えぬは沖の帆かげなりけり

俗樂の改良に就て

東京音樂學校教授　上原六四郎

先づ以て日本全國に行はれて居る所の音曲の歌調を輯めて、それを調査しまして、それに改正を加へることである、文句の改正を加ふべきもの、全く禁ずべきもの、又其儘に保存して差支なきもの、此三つに區別して、それ丈のことを取調べるのである、これは、夫れ〲、専門家に托すれば宜いことで、金さへ出せば大した六ケ敷ことはないだらう、

それで調査の方針は、文章の善惡、又は其仕組がどのやうであらうとも、さう云ふことを論じないで唯風教上に就いて、善惡を定めるのである、最も其程度に就ては餘程の考案を要しませうけれども、或る限度に於て、此等三ッに區別しまして、其區別が出來ましたならば、今度は音樂の營業者に向て、組合準則樣のものを發布して、藝人の營業に關する事柄を整理させると同時に、歌詞の改正すべきもの又は仕組を變ずべきものは、其組合で直しまして政府はそれに關係せず、添削を行つたものは、政府の檢閲を乞ふて、許可を受ける、又新作のものは、同じ手續を以て、其都度組合の手を經て、政府の許可を乞ふことにさせる、

夫から一方に於ては、劇場、寄席、其他公衆に向て演奏すべき場合には、政府の認可を得た所の曲に限ることにして、其都度政府に屆出づる、それで警官も臨席する必要があるなれば、臨席して取締る、

若し類似の方法を以て、宴席に於て、演奏するもの、取締りが出來ればよいが、これは六ケ敷い、これは多くは口吟でありますからして、極まつたものはあるとした所で、それを取締ることは言論の自由を妨ぐるといふことになつて來まする、これは大分六ケ敷いことであつて、捨ておいて宜からう、

もう一つは、苟も音曲を敎へることを、營業として居る所のものは、同じ政府の檢閲を經た所の曲を敎へることの外は、敎へることは出來ぬと云ふこと

にする、さう云ふことにして、さうして、必要に應じて、劇場、寄席、音曲の師匠、又は踊の師匠等の家に時々警官を派出して、若し違反者があつたならば、相當の處分をする、

これだけのことを行る、最も此事は直に行はれませぬ、先づ以て、組合を組織らせて、改良させて、惡いことは、改めさせる、少くとも、五六年の後でなければ、此等の取調べをすることも出來ぬ、之を直に斷行しまするど、糊口に差支を生ずるものが出來る、少くとも改正したものを學ぶの必要がありますからして、その餘裕を與へなければならぬ、或る流派は爲に無くなるかもしれない、何れも皆惡ければ許されぬ、情死物若くは、道行ものを、外題としてあるものは、禁じなければならぬと云ふ事になる、して見ますと、飯の食上になると云ふことになるから、突然禁ずることは出來ませぬ、豫め五六年を期して、何年何月の後には、行つては不可ぞと云ふ禁令を下せば、其間に彼等に宜いものも出來ませう、兎にも角にも、年限を先に極めるといふことが必要である、



それで大抵改良策は行はれる、斯うなりまするど音樂は自然に盛んになると同時に、世間に數多の娛

樂を供給し、兼て風致に益はなくとも害なきことになると思ふ、現に今日の有樣では、私の娘などに箏を學ばせ三味線の稽古をさせるには、先づ以て其曲を調ることに注意する、況んや、音樂に意のない人は、危きに近寄らない爲に、音樂を學ばせないといふ傾きになつて居る、恰も毒虫には、近寄るべからずと云ふ有樣で、それが爲に控えて居る人が澤山ある、昔し武を貴べる羅馬帝國の或將軍が宴會の席上で樂器の演奏が出來ないを耻ぢて、以來非常に音樂を勉强したと云ふ實話があるが、我國はそれとは裏後で、今日の有樣では、私は音樂は存じませぬと謂つて、一の自慢顔をすると云ふ傾がある、此等も矢張俗界に行はれる所のものが宜しくない所からして、さういふことになつたのであらう、さういふことに、總て心配がなくなれば、期せずして音樂は進んで來る、音樂は流行して來る、それで何の策よりも、音樂を有益のものにしやうと云ふには、私の此の策が一番結構な方法であらうと思ふ、西洋の音樂も開けませう、また俗樂も開けませう、其他種々の音樂は益々進んで來ることになりませう、それで私は、此事は、甚だ今日の音樂社會に向つて必要なことであらうと考へますから、其意見の概略を述べたのであります、

堀切の菖蒲

文學士　伊藤南陽

潮來出島の如く眞菰の中に生立つならねば、五月雨に池の水にこえしとて、いづれあやめと引わづらふべくもあらず、水はたゞ堀切にたゝふるのみにて、八橋の渡せるもなければ、見て蜘蛛手に物おもひしはる〴〵きぬる旅を偲びて、餉ほとびかす迄もなしされど往來の便りあしからで、塵の巷にさかりたるなむ、まことに雅人が心やりの種なる、あはれには鳥の葛飾、堀切の菖蒲は、人のこれを引くにあらずして、これが、人心をひくべきになむ、

青葉の露

男爵 澁澤榮一

電話

かべに耳ありさますゝむ世につれて
はりがねにさへものいはすかな

千里をもとなりときけるふるごとを
目にあたらしく見る電話かな

隧道

のりあひし汽車のあな路に入りてより
やみに結れし友の中かき

鎌倉

して草をかりし昔のしのばれて
花もはえあるかまくらの里

浮島原

水鳥の羽音に花はちりはてゝ
木々のみどりもうき島が原

久しく逢はざる人にいひおくりける

花さかば其木のもとゝたのめつる
君にはあはで春くれにけり

春の夕國府津の海邊を散歩して

枯生やくいそ山かけを水の面に
うつしてぞ見る浦のいさり火

春述懐

月花のうき世のさまはいかゞあらむ
春やむかしの老のあかつき

春祝

うつりゆく世を花鳥にまかせおきて
千とせかはらぬ春の色かな

或夕浦のいさり火いと多く見えければ

磯山のきしのさくらは見えねども
みづに花さく浦のいさり火

ことのはの花にうつりて一しほの
光こそ添えいさり火のかげ

四月廿三日國府津より飛鳥山なる家にかへりて久しく見ざりし庭の花のちり殘れ

るを

生ひしげるわを葉かくれにちり殘る
花やあるじをまちわたりけん

寫眞術實驗談（承前）

井伊直方

現像

乾板の現像は、極めて重要なるもので、寫眞の運命は、實に此現像に依つて定まるものである故に現像法の如何は、原板の出來榮に大なる關係を有する事は論を俟たない、然れども尙茲に現像に關し、特に注意を要するは、暗室の設備に在り、今日は暗室の構造も極めて進歩し、戸を用ひざる暗室を設くるに至つた、此方法に由れば、一々戸を開閉するの不便もなく、加ふるに空氣の流通を遮斷せざるを以て、假令長時間暗室内に仕事をなすも、毫も不快の念を生ぜず、安全に現像等をなすの利益がある、若し之に反し、極めて狹き暗室を締切つて使用せば、冬は左程に感じないが、夏の日中に於ては、恰も蒸風呂に入りたる心地して、一枚の乾板を現像するにも、非常の苦痛を感じ、遂には眩暈を起し、却て自體が現像せられ、到底滿足の結果は得難き物である

暗室内に用ゐる光は、必ず一定不變の光度を持續するものを選ばねばならぬ、世間往々赤硝子を通し日光を利用して居るやうであるが、之は大なる缺點である、何となれば日光は常に一定しないもので、晴天の日と雨天の日とは、其光度を異にし、又午前と午後とに由つて、其強弱を異にして居る、故に暗室内に通ずる光も、常に一定せず、陰晴定りなき日に於ては、一枚の乾板すら一定の光の下に現像を終る事を得ない、從て現像の度合を判別するに苦むのである、之に反してランプの如き一定の光を發するものを用ゆるときは、此等の缺點は除かれ、晴雨に拘らず時の如何を問はず、暗室内は常に一定の明さを保ち、現像上少からざる便益がある、故に寫眞の

引伸しの外は、成るべくランプを用ゐ、日光を避けねばならぬ、今日は引伸しにも、電燈を用ゆるの裝置ある位、何かにつけ暗室内に日光を利用するは不便である、然れどもランプの光は、強くも弱くも自由になすことを得る故、常に一定の光を定用することに注意し、且つランプの油煙は、暗室の外部に排出する樣、充分の設備をなすことが肝要である、

次に現像をなすに當り、最も注意すべきは、乾板と發光體との距離で、若し其距離にして近からんか乾板は忽に其光に感じ、充分現像を終らざる前、既に、カブリを生じ、遂に救ふべからざる失錯を招く事が少くない、素人寫眞家の原板に、カブリの多きは、主として此點に存するのである、故に現像の初めに當ては、少くも發光體より三尺以上離れて現像を行ふべきものである、されど畫像の現はるゝに從ひ、次第に乾板の感光力弱くなるを以て、次第に近くるも妨なく、故に充分現像をなしたる時は、極めて近距離に持て行くも、光線に感ずることはない、只注意すべきは、乾板の感光性あるを終始忘れないやうにしたいものである、

現像は又露出の不正確を、或程度迄救濟することを得ると同時に、又露出の正確に與へられたる板と雖も、現像法の宜しからざるが爲、遂に失敗に終ることも少くはない、之れ現像の極めて注意を要し、又研究を要する所以である、又現像は乾板の種類、現像藥の性質、被寫體の如何に由り、其取扱方を區別せざれば、決して滿足の効果を得がたい、故に成るべく乾板及現像藥は、常に二種位に定め置き（乾板現像藥は、時に由り品切となることあり、故に二種とす、）其性質を研め、使用に慣るゝ事、最も得策である、斯の如くにして、一度其の手心を知り、露出の如何に從ひ、現像を行へば、大なる失錯なく、寧ろ滿足なる原板を得るやうになる、故に現像は極めて運用の途廣く、從て興味の最も深きものである然るに素人寫眞家中、往々現像を極めて面倒なるものと見做し、單に撮影のみを自らし、現像等は擧て

之を寫眞屋に委託せらるゝものがあり、此場合寫眞屋は、已むを得ず、之を引受くると雖も固より、露出の如何を熟知せず、故に一定の方法に由り之を現像するのみで、爲に出來上りたる原板は、往々カブりたるものがあり、或は畵像の現れないものがある此時に當つて委託者は現像の不可なるを訴へ、被託者は露出の不正を以て答へ、各己の非を蔽はんとするの傾がある、之れ固より撮影者の罪で、他人を責むる能はざるものである、故に偶々佳良なる原板を出すことはあつても、之は實に僥倖と云はねばならぬ、自ら寫し自ら現像してこそ、寫眞の趣味もあり又能き寫眞も得らるゝのである、さるを若し止を得ず他人に現像を委囑せんとする場合には、撮影したる月日時刻、天候被寫眞體は勿論、撮影に用ひたる鏡玉、乾板の種類、枠の大小、露出の如何、及光線の順逆等、漏なく知らしむるの必要がある、然らば現像者は之を參考とし、藥液の加減し、現像を行つて以て、大なる失錯なく、滿足の結果を得ることもさまで難事ではない、然れども寫眞を初めたる以上は、成べく他人に依賴せず、時の許す限りは、自ら手を下し、原板を作る事、他日の參考ともなり、又斯術に長ずるの道である、

　凡そ何事に依らず無性は不潔を招き、極めて忌むべきことであるが、寫眞に於ては、殊に此點に注意を要するのである、現像に當りては、バット其他の容器は充分淸潔にし、使用の水は新鮮なるものを選び、總て手まめを專一にし、乾板を取枠に入れる時旣に其心して充分乾板面の塵埃を除去し置かざれば現像後畫面に小なる白點を殘すの恐れがある又撮影後現像に先つて、一のバットに水を盛り、乾板を其中に浸し、充分濕りたる後(凡そ一分間)初めて現像液を注ぐ事が必要である、斯くせざれば往々板面に氣泡を生じ、或は藥液のムラを起し、折角の原板をして廢物に至らしむるの恐がある、此現像前の水洗は、往々行はざる人あれど、極めて危險にして、失錯を招く事は少くない、

鹽原の一日

小川直子

一

いでや過つる頃より、契り置にし事なれば、鹽原なる高崎大人のなり所に、わすなむ行んと御館を守る人までいひやりければ、つとめて我宿り迄迎へにさへ來たれり、さらばと打つれていでたつ、道すがら山川の氣色えもいはず樣々に見所あれば、過がてにのみ立とまりつゝ、青淵に臨みては戰々たる思ひをなし、あるはたきち流るゝ白泡の白きを見ては、氷ならねど競々の心となりて肝をひやし、いとめづらかに見つゝ行く程に、かれに見ゆるが、さして行く御館なりといへば、打あふぎ見るに、實に大人の家の名もしるく、いと高き山のなからばかりに高らかなる御館の棟、木の間に聳えたり、かくまのあたりには見ながら登らんとするには、遙あなたの道より左なる坂を下りて、畑下戸といふ里を通ひて行く所なりけり、爰より河原に出づれば、假初なる柴橋のいとあやふけなるを渡らしたり、これを渡りてつゝら折の嶮しき坂路をたどる／＼登り行くに、夏木立茂り合ひて暗ければ、すゞろものすごき心地す、此日、朝より空くもりてさへありければ衣手いと冷にて夏としもなし、登り果て御館に入れば、客人の間には山水のかたかける軸物、或は文机などゆゑ／＼しう連ねて、軒端には綠の簾かゝげ渡されたり、實に御歌所の長の君なるなり所といはんに、あかぬ所なうみやひにしつらひ給へり、此頃大人は葉山にものし給へば、此館には居給はぬぞいとさう／＼しきさて端居して遠く見やれば、白雲を凌ぎて聳えたる峯々數しらず、つき立ちたる石山あり、綠につゝむ松山ありて、其かひより白雲の立ち登れるが、濃く淡く棚引わたれる風情、たとふるに物なし、近き峯だに其高さは幾丈ともはかられず、これはた楓のみどり色を競ひて、枝さしかはしたるに、朝霧うすらかに打なびきたり、

かへる手のしげるみどりに鹽はらの
　千しほの秋もおもひてそやれ

此中を流るゝ溪川いと〱深く、岩にせかれてたぎち流るゝ水の色を見おろせば、目もくるめくばかりに覺ゆ、さるを心靜に詠めやる程に、活然として胸中ひらけ、心ゆく事限りなし、大人が一日のみもの語に、鹽原の秀美なる事は、類稀にて只仙境の如しとのたまひつるを思ひ出でゝ、げにとおぼえければ、

　仙人にわれもなりにし心ちせり
　　しら雲うづむ深山邊に來て

かゝる勝地を見るも、大人が常にひと度は見よかしと、屢々すゝめ給へる御言のなかりましかば、いかでと思ふに、忝なう老の袂も露けくて、日のかたふくをも打忘れつゝなむ、

二

　高崎大人のなり所より歸りたる夕つかた、宿りをかへて同じ里なれど、畑戸下と云ふ所に移りぬ、此

樓は二位の御局のなり所、又奥蘭田氏のなり所と軒をならべて、造りし樓なりけり、此樓の上より見れば、右にあたりて吉井瀧見ゆ、これはた峰は夏木立生ひ茂りて、いと〱高けれど、水はさばかりも多からぬが、九折のこゞ敷岩かねをつたひて、うすらかにおつるなり、さればはげしくはあらで、あてにみやびかなる姿ともいはまほしけなり、

　綠なる木の間〱にあらはれて
　　雲よりおつる瀧のしらいと

めぐりは杉どもの程よきが多くて、そが中に名はしらねど、白き花の咲きみてる木末ども、こゝかしこに交れり、川岸には夏かけの柳川風に打ゆられて立てるも亦をかしう見ゆ、麓の岩根には小萩のまだ秋ならねど、すゞしさにおどろけるにや、咲きかゝりたるもあり、

　此流やう〱廣らかになりて、せき止めたる所あり、是より下つ方は、さま〱の岩どもまろびあひ中洲なども數多あれば、早瀨白波音高くて、右に折

れ左にめぐりつゝ流れ行くに、片淵の深き方にはいとあやふげなる、柴橋渡したり、夕さればむかつをの坂路より下り來る杣人、馬にはさらなり、己も柴あまた脊負ひて、此川に入りて渡るを見るに、いみじうあはれにおぼえたれば、

柴おひし駒ひく賤も世のわざと
　この川の瀬をかちわたるらん

などひとりごちつゝ打見やる程に、日も暮果てぬ今宵は闇なれば、すゞろに物さびし、燈かゝげつれば内に入りて例の文机に向ひつゝ、大和唐土の文どもくりひろげて見るに、心靜けく樂しき事いひしらず、さるに下女の夏虫どもの、火に集ひ來ることそうとましけれ、これをわかり障子の外に出さましと云へば、いなとよ、槇の戸をさしねかしといひけるに頓てさしてけり、猶川音高く聞えければ、

あし引の深山の庵の軒の戸は
　さしてもすごし夜半の川音

又夏としもなく虫の音のしければ、

谷川のおとに交りて聞ゆなり
　しほ原山の夜半の虫の音

かゝる程に夜もいたう更けたりければ、ふすまかつぎて打ふしぬ、

庭前牡丹

中山幸子

花の香の殘りし庭のふかみ草
　雨にぬれつゝ咲そめにけり

年ごとに數も增しつゝふかみ草
　ふかくも見ゆる花のさかりは

うるはしく咲揃ひたるふかみぐさ
　ひとりめづるはをしきものかな

年ごとに色もかはらずわが宿の
　庭もせに咲くほうたむの花

けふもまた風寒けれとほうたむの
　花はさかりになりにけるかな

小説　木下闇

花涙女史

博覧會の開かれてより、往き來るさの人にて、花も靜かには咲きかねたる上野の山を池の端通りへ、身にはいたく垢染みし衣を着けたる少女の、片手に煤けたる白鳥を提げて、只管道を急ぎ行くものあり、折しも馭者の叱聲四邊の人を拂ひつゝ、徐々群集の中を進み行く一臺の馬車あるに、少女は振向きざま不斗車中の人を見れば、身には黑のフロックコートを着け髯に半面を埋めたる嚴めしき紳士と、其傍にあるは姫君にや、年の頃十二三ともなりなん、いと華美やかなる絹の衣裳を着飾り、緑滴らん計りの頭髪を房々と後方に流し、眞紅のリボンもて其根を結止め、此處に一輪の白薔薇を咲かせたるその美はしさに、少女我知らず足を停めて、羨ましげに其後姿見送りつゝも心のうちに、日頃我が母樣の語り給ふを聞けば、我れ今こそかゝる卑しき身にてあれ、我父なる人は去る貴き華族樣の御世嗣に在ませど、仔細ありて我れも母樣も父上のお側に居ること協はで、今の祖母樣の許に詫住ひするなりとか、そも仔細とは如何なる事ぞ不審しきは母樣も祖母樣も、子供の知るべき事ならずとて、只の一言も我に話し玉はねば、元より其譯なし知るに由なけれど、さるにても恨めしきは我が父上なり、他所の父親はやれ芝居それ花見と、何事にもアノ樣に娘子を立派に着飾らせ、これ見よがしに連れ歩き玉ふものを、如何なる深き仔細あればとて、只の一度我れに御顏見せ玉ひし事さへなきは、もしや我等を見捨て玉ひしにはあらざるか、それさへあるに近頃祖母樣も何となく我を憎み玉ひて、何故か知らねど母樣さへ祖母樣に叱られて、御目に涙の絶ゆる間なき御樣子、アヽ思へば世の中に我身程不仕合なる者はあるまじと、まだ十三の少女なれど、流石貧苦に心は早熟て、坐ろに浮世の果敢なきを喞ちけるが、何時しか人足の薄らげるに心附き、驚き慌てゝ一目散

に家路を指して駈行きぬ、
程なく池の端の裏通りなる、汚穢しき棟割長屋の前に足を止しが、何故にか入口の障子に身を凭せたるまゝ、暫時は何事をか深く心に打案じ居たりしが、軈て忍びやかに障子に手を掛けて、靜かに引開けんとする途端、思はず溝板を踏み外しけるに、其物音聞附けてや、内には皺枯れし老婆の聲『誰れ、其處に居るは誰れ』少女は身を顫はしつゝ畏る／＼内に入り、聲も微かに『私……私』と答ふれば『お露か、お前は今迄何處に何をして居た、一寸使を頼めばすぐ其通り遊びくさつて』半ば言ひつゝ足音荒く奥より現はれしは、六十路に餘れる老婆なり、こは少女の祖女にやあらん、灰色の頭髪をキリ／＼と結び、眼元少しく釣上りて、僅に下齶に殘る左右の糸切齒は牙とも見ゆめり、お露と呼ばれたる少女は愈々畏れ慄きて、傍に白鳥を置き、兩手を板の間に束ねて、只管に已か過ちを詫入るゝを老婆は見向きもやらず、『もう酒は呑みたくない、その酒入らぬ』と憎々しげに言放ち『この我儘者奴』と手に持ちし長煙管振上げさま力に任かせて右頬のあたり丁と打ち、其儘後をも見ず奥の間へ引返しぬ、餘りの事にお露聲振絞りてワッと許りに泣沈めば、老婆は又も聲荒らげて『又吠えるか』猛虎の一聲にお露慌てゝ我と我が袖を口に嚙めど、湧くが如き、胸の悲しさ堰兼ねて、幾度か涙に咽ぶも哀れなり、
お露の母親は今しも用達を果てゝ、何處よりか我家へ歸り來りけるに、お露の臺所に打伏して、忍音に泣沈み居るを見て、早くもこれと諒り『お露、又祖母樣にか、何の粗忽をして』優しく問はるゝ程悲しさ彌增して、無言のまゝ涙に腫れし眼に、母親の顏振向く途端、ちらりと見認めし右頬の打傷、さては母親も胸潰れて、思はず無念の齒嚙なしつゝ、怨めしげにじつと次の間を白眼みしが、又思ひ返せば我には義理ある母親、況して我里とは言へ、今は親子諸共厄介の身の上なれば、假へ言ひたき事の山程あればと

て、何事にも虫を抑へ眼を眠らねばなるまじと、燃上がらんとせし怒氣の炎漸くに消し止め、人目なくば我膝の上に抱き上げて、吾子共々心の限り泣きたき程には思へども、老母の手前、義理にもお露を責めねばならずと、態と聲張上げて『何の粗忽をして、サアその譯をお話し。次第に依つては此の阿母さんとても默つては居ませぬ』、問ふとお露は只首を垂れたるまゝ、指もて膝に文字を書くのみ、母親は猶も聲を荒げて『默止つて居ては譯が解らぬではないか、どんな粗忽をしたと云ふに』お露今は默し兼ねけん、涙に聲も曇りて『私しが惡る……惡るいので御座います、どうぞ祖母様にお詫びを……』

花曇とのみ思ひし空は、黄昏時なり吹き出せし微温き東風に雨となりて、長からぬ花の命一しは縮めなん、我に風雅の心なければ、明日をも待たで色褪せ塵と消ゆる花を痛むにあらねど、雨の音風の聲耳に障りて、夜はいたく更けたらんと覺しきに、未だ假睡もせず、眠られぬまゝに古き新聞にても一讀せばやと消えなんとする行燈の燈心掻立つれば、端なくも我傍に添寢するお露の寢顔あり〳〵と我眼に寫るに、瞬きもせずじつと其顔を眺むれは、目附鼻筋口元に父親の俤を殘すも今は涙の種なり、ア、思へば我が十九の春、吉田様の御屋敷へ御奉公申せし折柄、不圖した御縁にて若殿様に妻として册く身の仕合せを得しが好事魔多しとか、御親族の方々より後に様々の故障起り、素性も氏も分らぬものを、華族の令夫人などは以ての外なりなど云はるゝ方もあり、若殿様は流石多年外國にお居でなされしことゝて、人物にさへ申分なければとて、非難の聲も他所に聞き、結婚の式さへ擧げて、子まで儲けたる果報もうたてや、釣合はぬ縁の非難が基にて、我には大枚の金子も賜はり、其儘永のお暇となりしかば、再び若殿の御顔見ることも協はず、其當座は唯泣てのみ居たりしが、一年二年と過ぎ行くまゝに、少しは我が生みし子の可愛さに紛れ、笑ふて暮す日のなきにはわらざりしが、去年の秋銀行に預け置きし吉田様より頂戴の金子の、銀行の

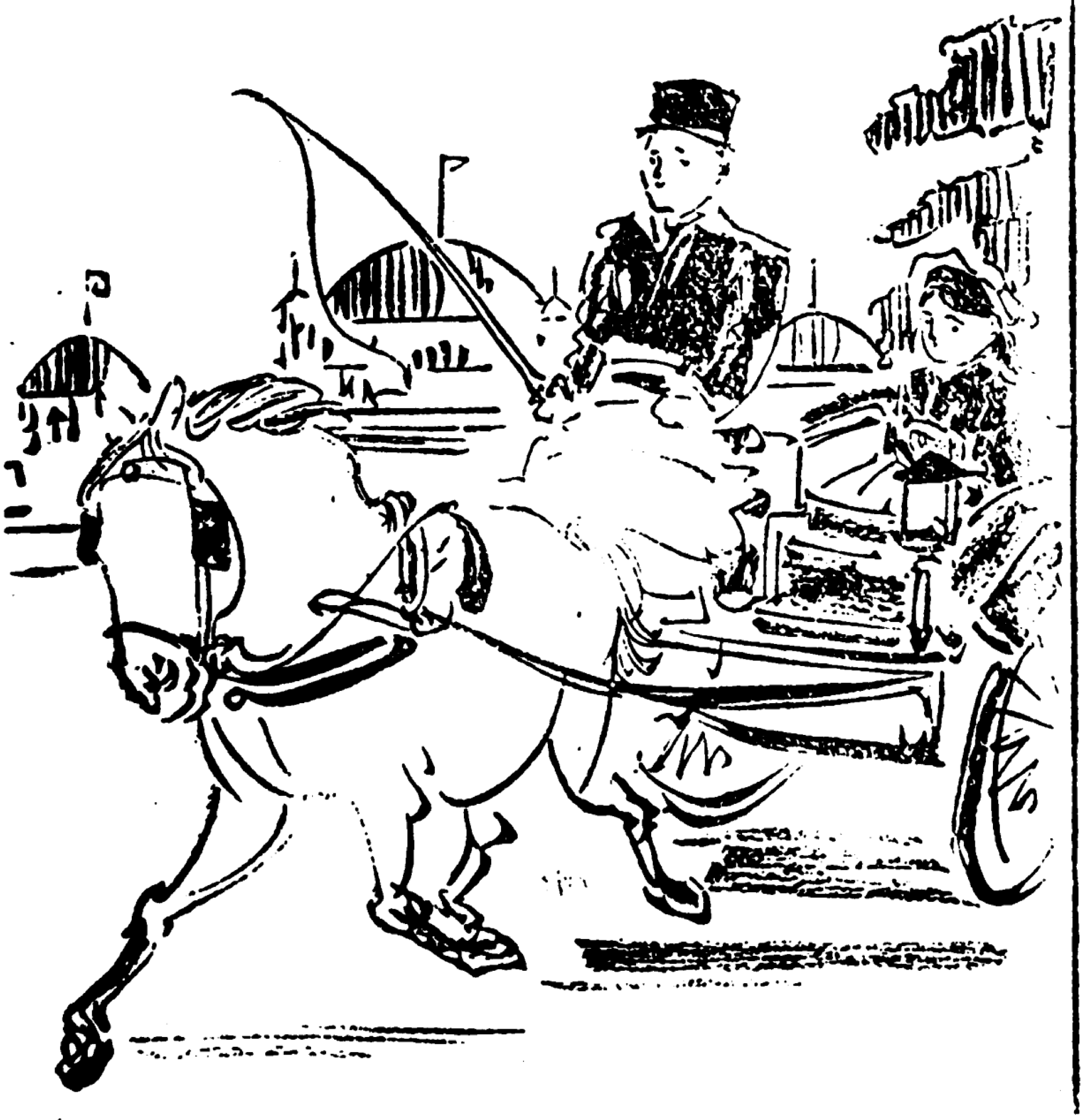
破産して皆無となりしより、今迄親切に我等の世話なされし祖母様さへ鬼と變りて、何かに附け角を出し給ふうたてさ、若し若殿様の此の土地に在しまさば、表面の緣こそなけれ、切つても切れぬは親子の血筋如何様にもお願ひ申して責めてお露丈には相應の樂をさせたけれど、今は殿にも御洋行中の事なればそれも詮なし、ア、生甲斐もなき此の身の捨處なきにはあらねど、この愛らしきお露を殘しては、如何で我のみ先き立たるべき、我は素より素性卑しき者なれば、是程の辛苦卯の毛程も厭はねど、お露は吉田様の御種、世が世なら吉田伯爵の姫君と呼ばれ、數多の腰元に傅かれ、針程の怪我にも醫者よ藥よと四面を騷がする身分なるべきに、今日も今日とて祖母様に無理はあるものを我身に咎を着て、祖母様にお詫申してとは、さても／＼不憫なものと、返らぬ繰言繰返しつゝ、坐ろに涙に暮れ居たりしが、折しもお露唐突に「アレお父さん」といふ聲に驚きてお露の顔を振向けば、口元に笑の漣を寄するは、如何なる嬉しき夢をや見たりけん、

人の心と秋の空、何時の程より變り易きものとは譬へられけん、げに昨日までも今朝までも、心に微塵の障壁もなく、いと老實やかなりしお露の祖母の此方に有金の跡なくなりしと共に、今迄の親切さらりと消えて、打て變る擧動こそうたてけれ、

さてもお露の母親と云ふは、その名をお貞と呼び、容姿も氣質もいと温柔しき女性なりければ、折に觸れては再緣を勸むる者もありたれど、お貞は何時も吾心に堅く誓へることのあればとて、絕えて聽容るゝ風情もなく、未だうら若き身にてありながら、人目を耻ぢず襤褸に纏まりて、一身不亂賃仕事に身を粉に碎き、束の間も手に針を離せしことなければ、女の痩腕にて一家を支へられぬ譯はなけれど、老母お貞の

辛苦露程の思遣もなく、偶の事にさへ夕餉の銚子の見えざれば、忽ちに氣色を變へ、譯もなきことにお露を叱り散らして、それとなくお貞を苦むる程なれば、お貞はそれこれに暫時も心の安まる遑なく、日に増し面瘦せ體細りて、果ては重き病の床に臥しける、

或日の事、黄昏るゝ頃より小雨のしと〳〵降出でたるに、まだ宵ながら戸外に往來の人足途絶えて、何となく四邊の物寂しき折柄お露は母親の枕邊に坐りてさま〴〵の浮世噺杯語り聞かせつ、只管に母の心を慰め居たりしが何時しか母親の心地好げにすや〳〵と眠りたるに、何思ひ出だして



や竊と傍の行燈引寄せ、しげ〳〵と餘念もなく、母親の窶れし面影凝視居りしが如何に堪へ難かりけむ、思はずワッと漏らせし一聲に忽ち深からぬ夢破られてお貞は不圖眼を見開き、淋しき眼に暫時お露の容子を眺めつゝやをら頭を擡げ『お露、阿母さんは今迄お前に隠して居たけれど、幸ひ今夜は祖母様も、御留守なれば一通りお前に話して置くが…』と何やら意味ありげに言ふ、お露は母の心察し兼ねて、言辭もなく只其顔を打眺るのみ、母親は苦しげに咳二つ三つして『實は四五日前からこの胸の痛苦が一層劇しくなつて、折々息の壓搾やうな心持のするが、どうで此の鹽梅では長いことはなからう



と思ふ』母の言辭皆まで聞かず、お露は悲しさ胸に迫り來りて『阿母樣、どうぞ其樣な心細い事おッ仰言て下さるな』と涙ながらに言へば、母親も發顫はして『阿母さんだつて、お前に悲しいことを聞かせたいことはないけれど』と又後の言辭を躊躇ふ容子、軈て鎬と寐衣の袖に涙押拭ひ『ほんに人の命程果敢ないものはない、何時どの樣な事がある か知れぬもの、夫故妾も萬一の事が無いうちにお前に言遺して置くのだが、言さして又言辭の途切れしが、やう〳〵に心を取直しもし阿母さんが此儘眼でも眠る樣なことがあつたなら、お前は何處迄も辛抱して、祖母樣に孝行しなければなりませぬ、今迄にも言聞かせた通り、お前のお父樣と仰る御方は、歴とした華族の御世繼、仔細あつて今では緣も由縁もないお方なれど、元より血を分けたお前の事なれば、もしお父樣が外國から御歸朝になつた上、御目にかゝり詳しく身の上の事を御相談申上げたなら、滿更知らぬとも仰言まい』言了りて四邊を見廻はし、少しく體を捻らして枕元なる手函引寄・顫ゆる指先にその蓋を取らんとするに、お露はそれと見て『阿母樣それは、妾が開けませうと些細の事にも母を勦る心の殊勝らしさ、母親は首を延ばして函の中を眺め『それソノ隅にある紙包を其處へ出して』といふにお露は虫を捉へし如き手附にて、氣味惡る氣に包を解けば、コロリと包を滑りて巳が膝の上に落ちしは、見るも眩き黄金の指環なりけり、餘りの不審さにお露は眉を昂げて熟と之を熟視たる儘、頓には言葉も出でざりしが、母親はお露の呆顔覗きて、淋しき笑味を片頰に含み『お露ソレはお前の御父樣から頂戴した品、ソノ通り吉田樣の御定紋も附て居る、ソレを證據に御父樣に御目通りを願うがよい』父親の賜物と聞きてお露坐ろに其人の懷かしさに、指環を手に持添へたるまゝ泣く、母親も流石に慰めかねてたゞ茫然たるのみ、折しも傍の障子颯と音して、靜かに外より入來る者あるに、母親は見咎められじと慌々しく指環を押隱さんとする途端、何時の間に歸へりけむ、老母は片手に煙艸盆を提げつゝ、お貞の

枕元に座を据えぬ、『お貞、今日は大そう顔色が好い樣だが、氣分に變つたことはないかね』何時にもなく優しき言葉に、お貞は却つて薄氣味惡るく『ハイ、昨日よりは少々快うお座います』と覺束なく答ふ、老婆はあたりを見廻はし、不圖行燈の影にお露の坐れるを見て『お露、今夜は少し阿母樣に込入た相談事がある程に、お前は少の間何處ぞへ遊びに行くがよい』言附けられてお露は立ちぬ、後に老婆は煙草燻らしつゝお露の後姿を見送り居たりしが、軈て吹殼をポンと灰吹に敲き落して膝を進め『さて今日の相談といふは外でもない、實はアノお露を……』と言掛けて暫し口籠り、鋭き眼に一寸お貞の顏を睨んで、態と言辭を和げ『背に腹はかへられぬ世の里諺、妾も可愛想だとは思ふけれど、幸ひ好い口があるから、お露の身を藝者屋へ賣つて金にしたいと思ふが、よもやお前に異存はなからう子『餘りの事にお貞胸潰れ、答ふる言辭もなく、俯伏しぬ、老母は猶も猫撫聲『妾だつてお露に賤しい勤め杯させるは元より快よくはないが、是非こゝで少し許りの金がなくてはならぬからのこと、それともお前にもし金になる品物でもあればよいが』何時の間に睨みけむそれとなく、指環を賣れとの謎言、お貞は虎に見込まれし羊の更に詮術盡きて、たゞ掌を合せ『お婆樣、それ丈はどうぞ御勘辨をと、涙ながらに打詫ぶれど、老婆慾に心も暗りたれば、何の道理のわからんやうもなし、折から障子の外にも幽かに涙を啜歔る音の聞ゆ、さてはお露の内の樣子を立聞けるなるべし、

肉を喰はねば飽かぬ人心には、この指環にて笑顔の長く續くものにあらず、お貞の如何に飽くなき人心に答へしか、物の哀れは母子の上にあつまりて、折角筆は執りながらも、之を記するに忍びず、されどお貞の貞と、お露の孝とは全かりき、

椎の下かげ

鈴木希聲

夏の夜

梓弓、春は既に去りて夏は今し來れり、
夜はさすがに涼うして、天地は言ひ知らぬ心地よき
匂、人を醉はしむる薫をもて充たされつ、
輕き〳〵軟風は萏める草花にそが羅の袂をふれて來
れり、
奇しき光は林の中に充ち滿てり、
その光は色青し、
藍色なせる蒼穹は閃々と輝ける靑寶石をもて飾れる
いとも榮ある天幕にて張りつめられたり。
藍を湛えし如き池水には天の星かげを映じ、睡蓮は
恰も生神女が長下衣の模樣を彫れる、名も知らぬ奇
しき花の如くそが首を傾け、風にそよげる樺の木、
綠したゝる白楊樹の枝葉はさながら研ける銀の夫よ
りも靑し

比ふべきものなき高尙き靜けき夜の色、
詩的なる夜の艶、
あはれ〳〵春は既に去れり、諸人はもはや薔薇色な
せるあらゆる物を見ざりき、
されども今し我等は靑き〳〵天地の中に住まへり

○

風そよぐ森の下げか褥如し茂る草中川ゆるう流る
柳かげうつる川瀨に靑鷺の小魚はみをる姿すゝし
も、
山川の岩にせかれておのづから奏づる調べきゝの
さやけさ、
板橋の板を狭ばみか百合さげて流れる乙女水にか
げあり、
鐵瓶のたぎりよろしみいざや友木の芽煮なゝん給
筆ちゝめよ、
もだえの子蓮の花びらむしりすて紅蓮の池と世を
咀ひけり、
富士の山われ登り來て見さくるやこの天地は餘り

ちひさし、

石に彫るそれさへ何時か朽ちぬるをなに人の子の名をば望める、

たとふれば薔薇の花か世の戀は觸るればいたき刺やさゝまし、

詩の領は廣し美はしさばへなす世を厭ふ人はやも入りませ、

佐田姫のかたを見て

石となる君が心の冷たさよ我は炎となりてもえなん、

夏葉女史の月と人を讀みて

月かげの照るもくもるも人の子の心の雲のさがにぞありける、

人の眞心

佛國 スーベストル作

淺岡一譯

六月七日の朝四時のことで御座いますが、眼が覺めた、それで起きた、實に面白く、小鳥の囀づる聲が聞えた、引續いて大變に麗しい旭日が昇り始めた、それ〳〵眞赤な光線を發出して、其光線が幾數條だか、東の空を見事に染めた、夫れと同時に香ひの好い風が吹いて來た、其風は屋上庭園の美麗い所を通つた、其庭園から種々の花の香を奪ひ取つて來たのである、これに誘はれて胡蝶が舞ひ込んで來た、嗚呼面白い景色ぢや、嗚呼愉快な心持ぢや、鳥だの自分だの都て此高い所に居るものは此景色を見ることが出來る、下の方に住む富貴の人は個様な景色を知らずに、白川夜舟で暗黑の中に夢でも見て居ることで有らう抔と思つた、猶心を留めて見ると、天井の方で大變に燕の鳴く聲がする、これは親が餌を持つて來たのを見て、雛燕が催促するので有つた、夫から雀が快さうな聲を立てゝ居る、雀は威勢のよいもので、これは夜露に濡れた羽根を旭日に向つて乾して居るので有つた、

朝の景色といふものは心持のよい物で、人に對する怨だの、世に對する不平だのと云ふ樣な、心を曇らせる浮雲が姿を現はさない、個樣な事が健康な人計りでは無い、熱の爲に昨夜一晩苦しんだ病人でさへも、朝は誠に心持が善さゝうに、如何にも樂しげに見える、併しながら夫が直ぐ朝飯でも食べて、兎角する間に紅塵萬丈の内に這入り込むで、段々忙しく成つて、精神も身躰も疲勞して、日が暮れると寢るより外は無いやうに成つて來る、此一日の人間の有樣を一生涯に較べて見ると、朝の間の一時とか一時半とか云ふものは、丁度十歳とか、十五歳とか云ふ少年時代に當る人も、此少年時代には、何の心配も無い、面白い樂しい事が多いが、夫れから段々と十六、十七、十八、二十、三十、四十と年を積むに從つて大變に苦しくなつて來る、一日の中に暮方に近く程困難が増して來ると同じことである、又一つ譬へて見れば、玆に一筋の道がある、其入口には、野薔薇の花、百合の花などの眼に見て美しいばかりではない、好い香氣のするものが、澤山あつて、其上種々の鳥が音樂を奏して居る、個樣極樂園の通路でもあるかと思はるゝ道が、辿つて行く内に、險阻な山や、谷があつてどうしても、越えられん樣な所に出會ふ樣なもので御座います、

扨我々人間の有樣が宛然さう云ふ樣なもので御座います、併し我々が小供の時から、日々學んで居つた生活の道と申すものは大きくなつて、世の中に出た時に差支ない樣にと其準備の爲に學んだものに相違ない、夫れを考へて見ると今日吾人の痛苦を免れぬのは、吾人のした學問は世の中に出て苦みを增す爲にしたのであらうか、取りも直さず生活の道に不適當なことを學んだので有らうか、或は世の中を面白く、可笑しく樂しく暮すには、無識に育つ方が善いのではなからうか、自分も屢々斯う考へて見るが同じ用事の爲に同じ人の門を幾回も叩くやうなものだ、事が辨じなければ幾回叩いても効はない、否や此は忘れて居つた、此居間を片付けも仕ない掃除も仕

ない、で昨夜の儘で居つた、自分は元來不秩序と云ふ事が大嫌ひだ、室内の不秩序の有樣は、其主人の精密の思想を缺で居るといふこと、家事整理の能力が無いといふことを表白する樣なものぢや、秩序と云ふものは、大切なもので小にしては家、大にしては國家皆秩序を紊亂せぬ樣にするとなければ治安を保つとが出來ない、行政官は行政官司法官は司法官立法官は立法官、其名の異なる通り其職責を盡し、司法官は司法官の職責を盡し、立法官は立法官の職責を盡して行くことが大切である、然るに行政官が自分の職責を後にして、司法官の事を仕たり、立法官の仕事に骨を折つたり、立法官が其職責を忘れて行政司法の職責を犯すといふ樣に、亂脈になれば國家はとても治まらない、家の内でも親は親、子は子それ〳〵守る所が無くてはならない、また人と器物との間に於ける交際にも秩序が大切で有る、床の間には床の間に備付べき物が有る、其物の配列にも亦順序が有る、其小なるものに就いて一例を擧ぐれば、書齋の内の一つの机の上にも硯を右に書を左にと云ふ樣な事、是が即ち秩序で有る、此秩序を紊亂すると、其見た所の樣の惡い計では無い、所用を辨するにも差支が起り一朝事の有る



場合にも差支が起る抔と、考へつゝ家具を片付て掃除をした、そこで今日は何日であつたかしらと、鏡臺の壁間に掛けて有る暦の一葉を除て見た、すると今日の日付、六月七日の所が見えた、神祭の二字が特別に大な字で現はれた、今日は造花祭の日だ、之は巴里の様な大都會では行はないが、自分の郷里では今日は賑かな祭だ、一躰六月と云ふ月は世の中にありとあらゆる草木が、繁生して盛に成長する時である、即ち造花主の恩を感謝すべき時である、稀には秋咲く花もあり、冬咲く花もあるか、草木の殆んと全躰が六月迄には大方結婚をして、一人者と云ふものは先づないといつて宜しい、さう云ふ時であるので、神様の御恩を忘れぬために、祭をする、其祭は自分の郷里では、誰も彼も皆力を盡して、各市街から競うて立派な山車をだすことで有るが、自分も郷里では御祭の中に加はつて、大變に面白く其日を送つた、或年のこと自分が極大切な献げものをした事があるが、夫がどうも忘れられん、夫はどう云ふ

事であつたかと云ふに、大變に各市街から競爭して種々な立派な山車を出した、此時節は最も薔薇の花の多い時であるから、此花を以つて飾つた、山車も澤山有つたが、其中に自分の郷里の自分が生れた街から出した一個の山車が有つたが、それは天幕の屋根を薔薇の花で蔽うた、實に美しい實に見事なもので有つて、それが祭壇の装飾となるに適當であるといふので、祭壇の側に起てらるゝとの噂で有つた、所が天幕の尖つた上に飾り付けたいといふ一輪の大きな花が足りないので、一街舉つて其一つの花を求めて居る、多くの花屋で聞合せてもさう云ふ大きな花は無い、夫で關係りのものが困つて首を傾けて居る、斯う云ふ場合があつた、と云ふものは、前年時分の誕生日に母が薔薇の花を下さつた、其花が誠に大きな善い花で有つた、翌年も善く咲かせたいと云ふので、其道の巧者な人に聽いて大切に夫を培養たそれで其年に成つて大變に蕾を以つたが、其を悉く咲かせると云ふと、小さな花ばかり澤山咲くと云ふ

ので、其中の大きなのを一つ大切にして、他の蕾をば殘らず摘み取つた、それで大きな牡丹の樣な花が一つ咲いた、それは〳〵美しい、それは〳〵香ばしい花で、子供心には世界第一の花と思ひ居つた、人々の大騷ぎをして求めて居る花も、個樣な花であらうと思はれた、さう云ふ場合であつた、自分に向つて誰も貴君は立派な花を持つては居らんかと問ひはしないけれども、自分が知らん顔をして居るのはどうであらうか、縱令人は知らずとも、神が知つて居る、神樣のお祭に用ふる花では有り、他の人々も捧げて有るに、自分は何も捧げて居ない、殊に人々が只一つの花を求め兼て困つて居るのを知りつゝ、自分のみ持つて居ると云ふはどうであらうか、何分人に對し神に對し默して居られぬ樣な心持に成つた、

實に此上もなく惜き花を、斷乎たる決心を以つてとう〳〵鋏み截つて仕舞た、頓て此花を持ち出すとそれは〳〵立派な花だといふので大喝采を博した、のみならず、此一つ花の爲に、天幕の價値を倍加したといつて、人々の喜ぶのを見た、そこで考へた神樣と云ふものは、有難いもので、貧乏人が捧げものを持たぬからとて、コップに水を入れて捧げても、富者が立派なものを上げたと同じに受けて下さるといふことだ、されば自分が母の形見のまたなきものと思ひ居る薔薇の花を上げたからには、さぞ歡んで下さるだらうと、斯う思つた、今當時の事を思ひ出して、小供などゝ云ふものはつまらんことを考へるものだ、抔と獨りて自ら笑ふ樣なものゝ、人々の困つて居るのを見兼て、これに同情を表して、薔薇の花を鋏み截つてこれを寄附したのは、小供ながらも實に天晴な心だ、何うぞ成長く成つた今日の自分も此心を存して置きたい、人から物を求められた時、自分は持つて居りながら、無いと云つて謝絶を云ふのは善い心でない、夫からまた無つて人が困つて居るのに、自分が持つて居るものを知らん顔をして居ると云ふことも正直な人のすることでない、

つまり小供の時の自分の心は善い心で有つたもの

だ、それから愈々其祭の日に成つた所が、其賑やかさと云ふものは實に大變であつた、けれ共愈々式を行ふ時に成つては靜粛であつて、神樣に祈禱を上げる時などは、如何にも神に仕へるには斯う有るべきことだと思はれた、其時には祭壇を中心として見渡すかぎり、香ばしい花が前後左右に滿ちて有つて、其間に髣髴として神樣が在します樣に思はれた、其後も折に觸れて神樣が自分の眼の前に居る樣な心持がした、所が今ではちつとも神樣が見える樣な心持がしない、神と云ふ事は忘れて居る、幼年時代には見えて居つたが、今は忘れて居ると云ふものはどう云ふ譯であらう、今も幼年時代も同じ食べ物で、同じ健康體で有るに、自分の心が何故斯う變つたらう、但し幼年時代には、親から食べさせられて居たが、今は自分で食べなければならぬことに成つた、夫丈の違ひは有る……否親の亡くなられた後、親の遺した模型の中に身を容れて居つたら、安心であつたので有らう、それを自分は不安心に思ふて、夫から前途大い事を仕やうと云ふ事からして、今日のやうな苦しい目を見るやうになつた、これが自分の一身の進歩であらうか、退歩で有らうか、親の模型を其儘に身を處した方が無論安心であつたらう、前途自分で斯う云ふことを行つて見やうなどゝ思つた爲に、此苦しい目を見るのである、夫でつまり神樣にも遠ざかる樣に成つたのであるか、どうも神樣は自分をば苦しめる丈け苦しめるのであらうか、どうも神樣が小供の時には御保護下さる樣に感じた、今はさうで無い樣に考へられる、それで思ひ出した私の叔父にモウリーエスと云ふ結構な人が有つた、時々私が尋ねて行つたが、其叔父は自分が行くと、自分も小供の樣な氣に成つて、自分と倶に遊んで自分を喜ばしてくだすつた、其親切を感ずることが、丁度、夏の熱い時冷しい風を肌に受ける樣な心持で有つた、其叔父が私に向つて、天理をも人道をも懇に敎へて吳れた、其叔父は誠に平常立派な心掛の人であつた、故に不遇ではあつたが、一生善事を以て終つた、

けれども之を書くのは、世の中の人に見せると云ふ爲でなく、自分の身の爲に、叔父の歴史を書いて、さうして夫を手本にして、自分の德義を高尙に仕樣と思つたからである、世の人が兎角云ふことだが、アポロン神の前に出ると、誰れでもが直立して形を整へて、自然に敬意を表する樣に成つて來る、と…今一寸叔父の歴史を書かうと思つたら、自分の形が正しく成つて來た、そればかりではない、此机の上に太陽の光りが輝いて來た、軒端には燕が舞うて居る、風が香ばしい花の匂を送つて來た、それが自然の感應かもしれぬ、何にしても善事を叙するのは、實に何ともいへぬ快心なものである、

故郷の夕

甲賀女史

薄く濃く棚引きし霞の衣やれ果てゝ、咲き匂ひたる花の袂は緑の色に染めかへしつゝ、恨みつる風の音なひも、そゞろになつかしう覺ゆる昨日今日、いとゞ故郷のみ忍ばれて、過ぎにし年の夏の夕ぐれ、青葉茂れるわが山里の、畦の細道たどり行きて、親しき友と、飛びかう螢追ひなどしつゝ、樂しくあそびしほどの事ども、はた惠み深き父母、いと睦ましきはらからと、まとゐして、樂しく語りし涼臺など思ひいづる端々に、理もなう袖をうるほしぬ、時しも、庭の松が枝に、待つとしもなく宿る月影は、涼しき影を軒端に宿して、昔を忍ぶ白露さへ置きそひつ、

されば思はずも

月さえて露おきまさる夏の夜は
過ぎし昔のしのばるゝかな

となん、實に此のなつかしき過去は、吾が淋し、はた悲しと思ふにつれ、いつもうれひの影となりて、いとゞ懷舊の情に泣かしむ、あゝ此の懷舊よ

ゆかしき山川

過ぎにし三年、六月の初つ方、ふりはへて、ゆか

しき故郷を音なひぬ、昔より妾の知れる山と川とは皆其の姿を失はざるに、いとゞなつかしき心地しけり、あはれ、幼き時、親しき友と、常に此の溪流の汀に小石を積みて、たはむれつゝ、打ち仰ぎたる山は、實に忘れもせぬ彼の山なりしよ、攀ぢのぼり行けば、白百合の清げなる、桔梗、撫子、はた名も知らぬ草花など、さながら、昔のまゝに咲き香ひ、川はとこしなへに流るゝ水の、岩また岩にと打ちくだけてとび散る響は、恰も妙なる樂を奏するがこと、はた世の罪惡の汚れを歎くが如く、實に塵世をはなれて、清き彼の地にある心地ぞする、あはれゆかしきは彼の山、彼の川、彼の景色、

なつかしき友

青葉の山に杜鵑の聲を忍ぶ今日此頃、九重の雲深くいりにし友ぞ慕はるれ、思へば霞棚引くおぼろ夜に、花の下陰さまよひて、遊びたりしも君なれや、いさゝ小川に舟浮けて、木影涼しく漕ぎ出でにしもまた君と我となりき、去年の夏には、なつかしき故鄉音なひて、共に手をとりかはしつゝ、露深き夏草ふみ分けて、綠深き山に自然の美を尋ね、共にまでころ語らひし折の、君が優しき言の葉は、今もなほ耳に聞こゆる心地して、そゞろに過ぎこし方のみぞ忍ばるゝ、斯くも親しき吾が友と、幾千代かけて契りし事も、皆はかなきわとゝなりて、君いま遠く在しませば、今年の夏のいとまには、古鄉遠く音なふとも、月に語らん友もなく、清きなぎさに遊ぶとも、共に歌はん君なくば何かせん、折しも、青葉かくれに杜鵑の一聲音づれければ

心あらば友ます方にとび行きて
初音をもらせ山ほとゝぎす

◎**東洋婦人會の生徒派遣** 東洋婦人會清國派遣女教員養成所の生徒山名たき子女史は、今回服部博士の紹介に依り、清國北京城女學傳習所より招聘せられて赴任したり、女史は熊本縣八代の出身にて明治三十八年三月東京府立第三高等女學校を卒業し、三十九年七月東洋婦人會の募集に應じ入學せし人なり、

うき草

子爵　黒田清綱

海邊子規

高砂のをのへはなれてほとゝぎす
　あかしの浦の月になくなり

海邊夕立

かきくらし鯨しほふく心地して
　夕立すなりみくま野のうら

遠夕立

はたゝ神なるとの沖にとゞろきぬ
　夕立すらし紀路のとほやま

月前水雞

我やどの池の中じま月てりて
　くひな鳴く夜のおもしろきかな

水邊夏草

根をたえし池のうき草うきながら
　しげる夏にもなりにけるかな

夏月涼

ゆふ立のかゝれるだにも涼しきを
　軒端の小簾に月のさしたる

片われ月

黄華女史

柳櫻をこき交せて　野邊に錦をはるの日も
心に花を見ぬ身には　曉の霞のそれならで
世を浮雲の搔曇り　袖は涙の春雨に
濡て色さへいつしかも　淵瀨と變る我姿
飢とつかれに疲果てし　心も細きほそ布の
綻初めし衣手は　浮世のうきを包み得で
萠え出る野邊の百千草　草の枕や藁の床
紙より薄き夜の衣　月も傾くわばらやの
隙漏る風は肌寒み　寢み寢ずみ春の夜の
夢ばかりなる手枕に　かひなくよをや明暮し
いつの間にかは春過て　夏來にけらし白妙の

衣ほすてふ時くれど
色も模様も五月雨の
簷の玉水絶間なく
雲井に名のる杜鵑
　われは顔なる花橘
人はそれとは夕綴の
散行く野邊の紅葉ばの
かけて往來の人もなき
　明暮かゝるまがつ事
思へば出る其昔
　忍が岡の春の花
千代にと頼む吾夫は
　煙といつか立つ月日
眼元口元わどけなき
　殘る形見を見るにさへ
力もなげに槇木柱
　生立稚兒の明日の日を
辛き浮世を泣き渡る
　涙かはかぬ冬衣
あやめも分ず降しきる
　心を千々に砕くなり
我憂き事は告げやらで
　心も知らずかほるなる
浮世の秋は忽ちに
　亂れ染にし糸すゝき
賤が伏家の柴の戸に
　過ぎを越し方や行末を
墨田河原の秋の月
　花の色香もうつろひて
仇し野の露鳥部野の
　かたみに眠る稚子の
罪なき面に吾夫の
　いと古への忍ばれて
寄る邊渚の捨小舟
　まつほの浦に燒く鹽の
雁の聲さへ蟲の音さへ
枯て果敢なき夕まぐれ
ものも涙に掻き曇る
吹かへてかも須磨の風
消え殘りにし燈火の
手に持つ針の世の中を
　風より外に音づるゝ
雪氣の空も人の身も
　漏入る冬の閨の裡
照らす影さへいと細き
　子ゆゑに獨り渡るらん

常夏

鳥山啓子

去年の水無月ばかり、我友何某がなり所を訪ひしに、一庭撫子を植え渡したるが、其いろくさ多く、其花の色の種々なる、其形のくさ〳〵なる、綾錦など類へんは中々愚なりき、主人は種となりて參らせんと言ひ契られしが、其秋わまたの種を得させつ、いと嬉しくこれを蒔きて、來ん夏は綾錦はおろかなり、種々の花見んとは思ひつれど、我庭は何某が別業に競べては、十が一にも足らぬ閑なるに、原植えたる花どもゝ、さすがに堀捨てかねて、撫子の種蒔

きし所は、さしも廣からねば種はなほ半ばかりも殘りつ、はぶらかし捨てんもをし、いかにせましと思ひ廻らすに、小一條のおほきおどゞの故事思ひ出でゝ、築地に蒔きつるは、去年の八月の望の日なりき、さるは、其日は撫子の種蒔くによき日なりと、世に言ひ傳ふればなり、さる理はあらなうわらねども何時蒔きてもよき事なれば、世に言ふ事に從ひつるにいとよう生ひ出でゝ、此頃なん花の盛りとなりぬ、さながら錦の屏障引き廻らしたるが如く、大路行く人々も、此築地のつらに足止めぬはなし、こは珍らし、いとようも思ひよられにけり、我もしかこそせめと褒むるもあれば、餘り事好むが憎さげなりとつぶやくもあり、己が心の向々に譽も誹りもするが中に、我心を知りて、是は貞信公の風流心に思ひよられたる古のあとをまねばれたる心にくしなど、あたりの人に其由語り聞かせて、鼻の程をうごめかすを築地の陰にかくれて、立ちぎゝかいまみつゝ覺えず獨笑ひぞせられし、

螢狩

遠山稲子

京都なるやんごとなき歌よみどち、此の頃降りつゞく梅雨に、しめりはてたる心のくもりを晴らさんと、雨間えて螢狩の船を南禪寺のあたりに浮べたまひしに、をりしも立まよふ雲のあしひくゝたれて、あやめもわかぬ闇の夜を所得がほにとびかふ螢のうつくしさ、さながら星をまきたらん如くなるに、人々心も空になりて船の中俄かにさわだちぬ、ある男爵とりあへず、

川上に螢のかげのみえしより
　心せかるゝ船のうちかな

と云へば、某の伯爵

うつくしき螢を見れば我れさへに
　飛び立ちぬべく思ほゆるかな

などいひしらふ内に、船はいつしかめざすところに着きたり、人々あゝと云ひつゝめづる程に、い

つのまにか、さきの『川上』とうたひし男爵、螢三ッ四ッとりて、紙に包みたるを見て、ある子爵いと興なげに、さてもおぬしは歌よみにも似ぬ不風流なる人かな、さらでだに世の心なきものども、螢とるものおほくなりゆきて、そがため此地の風景を損すること尠なからざるを、いと〳〵口惜しきことにおもふ折から、ぬしたちまでが、かゝる業すとは言の葉にもたへたるふまひならずや、かゝる人は我等がむれにはえおかじを、とく〳〵茲去りたまへと人もなげになぢりかくれば、男爵ふところ紙とりいでゝ、

ねもやらで家にまつ子をいかにせん
　もゆる螢はいとをしけれど

子を思ふ心のやみをてらすべき
　螢もがなと思ほゆるかな

と、かいつけ、之れにてゆるしたまへとあるに、子爵も少しかほの色やわらぎて、

わたらしき螢をとるもかなし子が、
　ためにといはゞ何かとがめん

いひわけの種にさへこそなりにけれ
　子は重寶なものにぞありける

と、返歌して、一同どつと打わらひけるとか

其夜男爵が家にて、寢もやらず父君の歸りを待ちわたりけんをさなき人の、此螢得たる時のよろこびやいかにありけん、おもひやるだにいとなつかしき極みにこそ、げに此愛らしき、幼き人のためには、浮世のうさも、うつせみの世の誹りも打ち忘るゝや世の親心なるべき、

ある人の

白金も黄金も玉も何せんに
　まされる寶子にしかめやも、

と、讀まれたるも今更に思ひ出でなん、此頃其地より立ち歸られたる友の物語りを聞くがまゝに、



雜錄

女子の自立心

文學博士 男爵 細川潤次郎

凡そ人たる者は、個々の身體を有する以上は、成年の後は、須らく自立すべき者たるを以て、豫め自立心を養成せざるべからず、自立心とは其人自ら勤勉し、勞苦に耐へ、以て其志を成就し、徒に他人に依賴せざる謂にして、即其人の他日自立すべき根本なり、然れども一方より之を見れば、人類は本群居の動物たるを以て、決して單獨の生活をなす者に非ず此れ即ち人の一家をなす所以なり、一族をなす所以なり、又一邑一國をなす所以なり、此の動かすべからざる原則により、何人と雖も尊長に事へ、卑幼に接するが如き、朋友に對し、其他一般の公衆に對するが如き、何事に付きても自然の秩序あるべきことなれば、一身一個の心に任せて、恣に行動すべき者に非ざること、固より論を待たず、殊に女子に在りては、自立の範圍尤狹隘にして、他人の牽制を受くること更に多しとす、其の家に在るや、父母の命令に從ふこと勿論にして、出でゝ他人に嫁するときは夫及舅姑に事ふるが如き、其他族人に接するが如き成丈其の歡心を得んことを力めざるべからず、之がためには成丈自己の了簡を抑制せざるべからず、此事に付きては、支那には三從と曰ふことありて、父母に從ひ、夫に從ひ、又子にも從ふべきことゝせり天竺にも又此の三從に類似せることもあり、又西洋にては婦人を尊重するの風太盛なるにも拘らず、有夫の婦人を無能力者として、獨立して人と契約する

ことを許さず、他人に贈遺をなし、又他人の贈遺を受くることを得ず、此等の點より考ふるときは、自立と曰ふことは、男子に在りても、範圍狹隘なる者なるに、女子に在りては殆んど自立すべからざる者の如しと雖も、未だ必ずしも然る者には非ず、前にも言ふ通り、人たる者は、已に個々の身體を有する以上は、其の身體を自己の心に任せて活動せざるべからず、其の家に在ると、外に在るとを問はず、一人は一人前の仕事をなさゞるべからず、固より其人の地位と職業に由りて、自己の範圍内に屬する區域の廣狹はあるとなれども、其範圍内に屬する事柄に付きては、自己の心を用ひ、自己の力を用ひて、自己の職分を全くせざるべからず、此れ即謂はゆる自立心の効用にして、他人に依賴すべき者に非ず、男子固より宜く斯の如くなるべし、女子も亦然り、事によりては尊長の指圖を受け、後處置すべき者なれども、其の指圖の範圍内に於て、自己の心力を用ゐる餘地は十分に之あるべし、况や一定の仕事、若くは自己の嗜などの如き、必しも尊長の指圖を要せざるに於てをや、且又尊長は常に己の終身を監督する者に非ず、或は不幸にして尊長を亡ふこともあらん然らざるも尊長の旅行することも、大病に罹ることもあらん、此等はさまで珍らしき事にも非ず、然るを平生自立心なくして、徒に依賴心にのみ一任するならば、斯の如き場合に際しては、驚愕狼狽瞽者の杖を失ふたるが如く、復如何ともすること能はざるべし、是故に人は群居の動物たるに拘らず、世界中に我れ獨生存せる者の如く、他人の倚賴すべき者なき時の覺悟なかるべからず、此事に至りては、日本支那の修身の事に關したる書籍には見當らざる所にして、西洋にて却て喋々辯論する所なり、假如へば童蒙教草に譯したる麥畑の雲雀の話の如き、種々の譯本ある魯敏遜漂流記事の如き、其他いくらもあるべし、此等は寓言にして、實に其事あるに非ず、只其事を借りて、自立心養成の材料となしたるものなり、西洋の諺に相助は自助に若かずと曰へることあ

り、自助は即自立に外ならず『スマイル』氏其の著書を名けて自助論と曰へるも、亦此意を取れる者なるべし、一體西洋にては、各人各個に家をなす慣習にして、我が東洋の族制即古來の戸籍法の如き一家の團結をなせる者と、逈に同じからず、人生れて苟も成年に達するときは、各自獨立の生活をなさゞるべからず、此故に自立心を養成するの必要ありて、其例證となるべき嘉言善行も少からずと雖も、我が東洋に於ては、族制之と異なるを以て、男子たりと雖も、嚴格なる秩序の中に生息し、自己の意に任せて運動することを得ず、殊に女子に在りては、多くは



深窓の中に生長し、他人と交通するの必要なきを以て、自立心を養成する必要もなく、却つて柔順の道に背反する者として、自立心あるを戒むる程のことなりき、然れども此れは明治中興前の事にして、其後は封建の制度を廢し、門閥の弊を除き、四民漸を以て平均せんとするに當り外國との交通も日を追うて盛になり、自然に自由の空氣を吸收したるに由り、從來の族制は依然として在りながら、一般の風習に許多の變更を來し、女子と雖も時と場合に由り、男子同樣に社會の事務を辨する時節となれり、是に於て男子の自立心は言ふに及

ばず、女子の自立心も必要を感ずるに至れり、社會の百事は常に一人一個にて應當すべきものに非ず、從うて人に依賴すべきものなれども、若し此の依賴心に一任して、自立の念慮なきときは、一旦其の依賴する所の人を失ふに及びては、忽狼狽周章して措くことを失し、恰も盲者の杖を失ふが如くなるべし、縱令へ此の如き狀況にまで立到らざるも、總して人に依賴したることは、時日を遷延し易き者なり、事實を誤らしめ易き者なり、且又人に依賴するには、親戚を除く外は、相當の報酬を與へざるべからず、一家の費用を增加すべき者なりとす、若依賴すべきことの中、自身にて爲し得べき限り、成丈自身に之を爲すときは、此等の弊を除くことを得べし、此故に人に依賴すべきことながら、成丈人に依賴することに制限を加へ度き事なりとす、父母若くは夫を始め、其他の親戚は平常其の命令を受け、其訓誨を聽くが如き、尤依賴すべき人なりと雖も生病老死は人生の免かれざる所なり、離合聚散も必然の事なれば、時あつては平常の如く、其の命令を受くることを得ず、訓誨を聽くことを得ざるべし、啻に尊長の常に依賴すべからざるのみならず、同等若くは目下の人に至りては、亦常に依賴すべき者に非ず、朋友懇意の人の如きは、諸般の事に付き相談して事を決すること世に珍らしからぬ例なるが、其朋友懇意の人死亡若くは旅行するが如き事あらば、忽其の相談相手を失ふに至るべし、余が近來閱歷したる一例あり、余は先年一室を建築せんことを思ひ立ちたりしが、豫め自身は在官の身には工事を監督する餘暇なからんことを慮り、何人にか此事を委托せんことを思ひ、幸に一人の余が家の長屋に住居して、其の省に勤仕する者、其省の營繕の掛にて、多少建築に經驗ある者を得て、工事の監督を囑托したれども、此人は公務を帶びたる人なれば、或は差支あらんかと思ひ、更に一人の民間に在りて、工事に熟練せる者を雇ひ、若干の報酬を與へ、監督の事を依賴し、是にて先づ萬全なるべしと思ひ、工事に着手

したるに、中途に至り其一人は公務に付き出張して數月返らず、是に於て兼て依賴せし工事熟練の人有用の塲合となりて、最初の計畫圖に中れりと思ひ居たりしが、間もなく此人も遠方に旅行せねばならぬことゝなりて、遂には余自身に工事を監督するに至れり、此の如き例は一々擧ぐるに遑あらざるべし、此れ同等の人の常に依賴すべからざる所以なり、其他各種の職人の如きも、亦常に依賴すべきものに非す、職工の如きは固より賃錢の爲に仕事を爲すものにて、人の爲に使役せらるゝことを本務とするものなれども、多數の人の仕事を受合ふものにて、常に一家の爲に使役せらるゝものに非ざる故、已れ之を使役せんと欲するときは、恰も他人の仕事を受合ひたるときなるべくして、當にならぬものなり、又目下の者と雖も、常に依賴すべきものに非ず、下女下男の如き者は、昔より忠實にして勤敏なる人物は、至て得難きものなるに、當今に至りては縱令ひ人物を選ばざるも、猶其人を得るに困む、蓋近來は女工の盛なるに由り、從うて相當の賃錢を得る道多きに由り、婦人の雇に應ずる者大に其數を減じたり、將來に至りては、益々其人を得るに難かるべし、縱令ひ其人を得るとするも賃錢の割合次第に增加して是までの如く多數の下女を使役することを得ざるべし、余が米國に在りし時、華盛頓なる日本公使館に雇ひたる下女の給料を聞きたるに、一ヶ月三十弗と曰へり、我國下女の給料は未だ容易に此額に達せざるべきも、其額の次第に增加するは、又疑ふべくもあらず、下男に至りては、其賃錢を得べき仕事從前よりも著しく增加したるを以て、相當の人物を得ること、下女よりも更に難かるべく、且其の賃錢も下女よりも更に多く增加すべきを以て、是までの如く使役することを得ざるべし、以上論せし如く目上の人も、同等の人も、目下の人も、常に依賴すべきものに非ずとするときは、到底自身より外には一の依賴すべきものなかるべし、自身に依賴せんとするときは、自心の心を十分に用ゐ自身の力を十分に用ゐ

て、其の目的を達せんことを期せざるべからず、是れ即自立心の必要なる所以なり、

養鶏の話

農學博士　本多幸介

家禽を飼養する目的は、大別して肉用、採卵、愛翫の三種となる、固より中には一禽で肉用と採卵を兼ぬるものもある、

家禽業は説ふまでもなく、飼養の方法が克く行届けば、利益も從つて夥しい、農家を始め、各業者の副業、或は學校兒童の家庭等に於ける自營事業として、貯蓄の元資を得せしむるには尤も適當して居る故に、家禽は實業的と教育的の兩方面から奨勵すべき必要を有して居る、

飼養上に必要なるは第一禽舍である、禽舍の具備すべき要件と云へば、先づ南向か、若くは東南向の温暖な地位を撰んで、空氣の流通、光線の透徹等に

注意し、常に乾燥清潔を圖るべきである、如斯注意を拂うて居れば、羽虫其他バクテリヤ等の繁殖を妨げ、諸種の病源を除去し得るが故に、家禽は自から健康で、無病で、體重が増して、産卵も多數となる譯である、

嚴寒の候には朝夕可成禽舍に留置き、晝間の温暖い時のみ舍外に放つが可い、夫から濕氣は、禁物である、雨雪の時などは屋外へ出してはならぬ、又禽舍の温度は華氏の六十五度前後が適温である、

雌雄の配數は、採卵の目的が單に食用のみにあるなれば、一雄禽に十乃至十五、或は尚以上の雌禽を以て過するも敢て不都合はない、併し採卵の目的が繁殖用にあるなら一雄に雌八羽以上を配することは不可い、最も種類に依つて相違はあるが

家禽は五歳位までは繁殖用に供することが出來る併し最も强勢な時代は二歳乃至三歳である、

雌禽は雄なくて産卵するが、此等の卵は全く孵化せぬものである、

肉用雄禽は、大低三四ヶ月程で去勢すれば、肉質が柔軟で纎維が細く成つて、脂肪に富み美味となる寒氣に雞冠の太い鷄を飼養すると、往々凍傷を蒙る虞があるので、可成くは小冠のものか、或は複冠のものを撰ぶが可い若止むなくば鋭い小刀、剃刀の類を以て冠を截去つて豫防するのであるが、之も三四ヶ月の時に行ふが可い、

食餌は運動塲の廣狹に依つて相違はあれど、一日に二回、或は三回と、時間を定めて、其食餌は成るべく費用のかゝらぬ碎米、米の掃き溜、麥、麩、糠等を與へ、他に一日一回位は靑菜類を給し、柵飼ならば適時動物質食餌を給與しなければならぬ、靑菜の缺乏は疾病を起し易く、動物質食を怠らば產卵數を減ずるのである、

水は每日器具を掃除して純潔なものを與へねばならぬ、「淸淨の効は食餌の半に値す」といふ事がある換羽期、冬季、若くは霖雨の爲、寒濕を減ずる塲合には、麻の實、又は胡椒等を食餌中に混入するか或は水中に燒酎の類又は綠礬水等の少量を混じて飲ませば、疾病を豫防することが出來る、

運動塲は廣い方が可い、澤山の鷄で地積が無ければ小區域内に入れ置き、別に一大運動塲を設け、日を異へて交替運動をさすが可い、

病禽には流行病が多いから直に隔離して治療を施すか、又は屠殺するが可い、而して禽舍は充分掃除を爲て、石灰乳を以て消毒し、乾いて後家禽を容れるが良い、

卵の貯蓄に孵化用と食用との二種がある、孵化用のものは、產卵後十四日以内のもので成る可く生新しいのが良い、次に食用卵の貯蓄法は水二斗の内に燒立ての石灰四升と、食鹽一升計とを入れて充分に溶解したものゝ中へ、新鮮の卵を浸漬し置けば通常數ヶ月を經ても腐敗することはない、自家用の卵は日光の通さぬ涼しい塲所へ籾殼を箱の内に充し、其中へ卵の大端を下にして直立せしめ、成るべく動かさぬ樣にして置くのである、

才女の俤（只野綾子の事）

大川城山

祖先

眞葛名は綾子、寶暦十三年江戸に生る、行、方にして氣和なり、和文、和歌に巧にして、手跡は瀧本流の薀奥を究め、特に才女を以て其名著しかりしが文政七年、年六十二にて歿せり、祖先を尋ぬるに、別所黨、播磨の城主長井四郎三衛門より出たり、子孫落魄して攝津國大坂に移り、後數世大庵に至り醫を業とし江戸に出で、紀州公に奉仕す、綾子の父は其三男にて平助と名のり仙臺公の醫師、工藤某の養嗣となり其業を嗣ぎ、衛生の術に詳かなり、又思を蘭學に潜め、其發明する所も少なからで名聲高かりき、綾子は其長女にて同胞數人ありたり、

眞葛の名のこと

綾子が末の妹、宮中に奉仕せんとする時、兄元輔後の怠りを誡めて『よく務めよ、兩親の惠みを均し

く受けし同胞は深く其恩を思ふべし、皆心々に違ひなば恰もかの七草の花のとり〴〵なるに似たらんとて、

おのがじゝにほふ秋野の七草も
露の惠みは變らざりけり

と詠みて遣はしたるを、綾子後に聞き傳へて、よくも諫めたることよ、其七草になぞらへて、葛花はめづるばかりのものならねども葉のひろければ、同胞をさしおほふに、似つかはしかるべきとて、之より眞葛とは唱へたり、

志を立つ

明和壬辰大火の頃俄に物價騰貴して、卑賤のものは困窮に陥りし時、眞葛熟々と商賈の慈善心なきを奮慨し、吾、民の父母たる身にしあらば、かゝる淺間しきことはなさゞるものを、と女の身のはかなさを悔い、頻りに救護の策を講じたり、以來決然として勤學に志し、先づ恭敬躬ら謹み、日夜怠らざりきとぞ、

幹事大谷通子呼ばれ、出づれば殿下は御手づから特別徽章を授與せられたり、一等有功章には伯爵、井伊常子、黒三ツ紋羽織切り髮の姿にて出場し、次いで東京支部幹事部長丸山壽滿子宮城支部武笠美代子、神奈川支部幹事石井磯子拜受し、二等有功章には

滋賀支部長　川崎　港子　本部評議員　内山　訓子　同　總領　松子　青森支部評議員　柳原つる子　東京支部幹事部長　武市
春枝子　同　鷲見　幸子　同　金田ゑい子　神奈川支部幹事長　鈴木　春子　茨城支部幹事部長　立花たか子　靜岡支部幹
事部長　桑原との子　東京支部幹事　橫幕武眞子　同　宇津木廣子　靜岡支部幹事　高柳とよ子　東京支部幹事　阿達　榮萋
同　三宅　花枝

三等章は東京支部の武藤悦子總代にて拜受せり、兩殿下は三等章の姓名を讀み了る迄、御起立あり、之にて式了り、二時三十分御退場あらせられたり、會場の崩れ一時に動揺めきたれば、又もや夥しき土煙立ち籠めたり、之れを包んだる白衣服の一在郷兵は、當時の戰場を思ひ出したるかの如き態にて、友を顧みて退却しやうかと語る、入口左手の喫茶掛には、係長大山夫人、副係長岡部夫人あり、中にも金縁眼鏡掛けたる切髮の伊東巳代治夫人彼れ此と立ち働き居れり、茶菓係には鍋島夫人副係長長谷夫人鄭夫人も見へたり、來會者接待係には係長近衛夫人、副係長九條夫人、會場整理係には係長一條夫人、副係長山内夫人各任に當り、本部テントには、今日の司令官なる佐藤少將在り、胸に(本)の牡丹餅大なる徽章を掛け、お婆さん連に取り卷かれて、一々應酬しつゝあり、茲に貴婦人の一團集り天幕一林白襟黑紋付金鎖の貴婦人に充たされたり、洋裝の一婦人は　大阪支部幹事長廣岡淺子にて頭を綺麗にそりこぼち。卷烟草をスパリ〳〵燻らし。胸を反らして控へ居り。黑紋付の品好き四十格好の貴婦人。之れは男爵長ヒロ子とて　愛國婦人會の爲めには。非常に盡力し、今回態々石川縣より出京したりとの事貴婦人室には、先に一等章を拜受せる井伊伯爵夫人、其の母堂の鍋島子爵夫人、共に切髮にて相對し、今日の榮譽を祝ひつゝあり、本郷區接處に今年未だ十六七の少女、他の奥樣連と伍して甲斐々々しき働き振り、何れも感服せざるはなかりしが、此お孃さんは此の年頃にて既に東京支部幹事たる岡本キヨ子と言ふなりき、當日は來賓席には岡部子、清浦男も見へたるが、當會は茶菓子の饗應の外に紀念品として、扇子一對菓子二箱宛を贈りたり、同會中日光に直射せられ、三十餘名の卒者倒を出したるは、偶々以て其の會の盛大なるを知るべし、

愛國婦人會（第六回總會）

愛國婦人會第六回總會は去十九日午後二時風薫る青山原頭に開かれたり、

會場正門は、青山電車停留所の前に當り、東より西より來集する會員、此處に車より吐出し、人波打て會場に入る態、婦人會なるが故に一入美觀なり、紅白の布もて卷ける門の内には、左手市内名區の旗印立ら紫、赤、白のいろ〳〵風に飜へり、右手には地方支部員の天幕相並び陸軍大學裏門を背にして、式場設けられたり、式壇綠葉にて飾り、正面に愛國婦人會の徽章を打ちだし、周圍には白落し濃様の徽章ある紫幕を引き廻はし、壇下左手には大臣、親任官、顧問、有爵貴賓、新聞記者席あり、右手には監事理事の諸貴婦人席設けられたり、廢兵遺族控所の前には、東京支部術附の海老一太神樂の太鼓の音せはしく、朝方より打ち揚げし煙火、又午後に亘りて鳴り響けり、開會間近には、既に三萬餘人の會員入り込みたれば、さしもに廣き會場も限なく满たされ、風無けれども、人の息に土煙立ち登りてオリーブ白、紫杯の洋傘さながら雲の上に浮けるが如く、黒紋附の貴婦人の肩、孰れも白なり、二時には、總裁閑院宮妃殿下御着ある事なれば、陸軍大學裏門より會場に掛けて、人垣を築き蒸が如き暑に汗を拭ひ、埃に塗れつゝ、殿下を迎へ奉りたり、殿下には二時少し過る頃小笠原海軍中佐、堀内陸軍中佐の御先導にて、君が代の奏樂中に入らせらる白に紅き花を配したる御帽子に、白の綾地水色レースの肩掛せられ、御胸には勳一等章を佩ばせられ、又愛國婦人會特別徽章を掛させらる、續て東伏見宮妃殿下、久邇宮妃殿下山階宮妃殿下共に洋裝にて裾を曳式壇に登せらる、總裁宮殿下は會衆に向つて輕く一禮し、赫色地に白赤牡丹を染め出し、井方の金糸縫りせる總裁席に着かせらる、其後方には洋裝せる鍋島御附控へ、殿下兩側に東伏見宮妃・山階宮妃着席あり、東伏見宮妃殿下には淡紅色羽二重に黑の胸當山階宮妃にはヴエールを外させられ、少し隔てゝ著席ある、久邇宮妃には總淡藍色の御服を召させられたり、總裁宮の御前に著席せる、岩倉會長先立つてしとやかに開會の挨拶を爲し、終つて三十七八年戰役に關し、本會に賜はりたる令旨を捧讀し了るや、殿下は立つて次の諭旨を朗讀あらせられたり、

愛國婦人會第六回總會を開くに方り、諸子と親しく相見るは、智惠子の最も喜ぶ處なり、殊に時局に關しては、長くも　皇后陛下より優渥なる令旨を辱うす、今や平和克復日を經るに從ふて、益々同情を表すべき遺族廢兵ありて、本會の責任一層重きを加ふ、諸子彌々奮勵上は　皇后陛下の令旨に副ひ奉り、下は本會主旨の貫徹に努力せられん事を望む、

席にかへらせらるゝや、岩倉會長進み出で殿下の方に向ひて奉答の辭を讀み上げしに、四殿下は共に座を立つて御聽きありたり、奉讀了りて、高松中佐之れより特別及一、二等章の授與せらるゝ旨を報じ、第一番に元臺灣支部幹事部長たりし山形稲子、次いで大阪支部

國文を學ぶ

かくて眞葛は唐ぶみを讀まんと欲せしに、父より女子のかどめきたるは惡しとて、いたく禁じられたれば源氏物語、伊勢物語など常に座右の友として學びたり、眞葛十六歳の時、初めて和文を作りたり、父平助之を村田春海に見せしが、春海は之を見て、師なくしてかくまでに綴れるは才女なりとて、大に稱讃したりければ、眞葛大に喜びて益〻奮勵せり、

或時弟元輔に四書の講義をなさしめ、之より孔子聖人の敎は大方會得せられ、樂みて繙き、大に講究せられたり、

安心立命

眞葛佛の敎は明に知るを得ざれど、念ずれば、必ず利益ありと思ひとりて、年久しく觀音と不動とを信仰して安心立命せり、

仙臺公に仕ふ

眞葛十七才の頃、仙臺公に奉仕するや、自ら深く誡めて、宮仕へは、獨勤なりと思ふこそよけれ、幾多の同役ありとても、勤むることは吾獨りなりと思はゞ心安からんと覺悟しければ、同輩にも憎まるゝことなく、自らは人の怠を敢て咎むることもなければ、終始一貫平穩に忠實を盡すを得たり、

出仕の暇を賜りて、宿所に歸り來りし頃、母の喪に遇ひたり、眞葛慟哭甚だしく、それより家に止まり父に事へて家政を司どり、或は幼き弟妹に敎育を施しなどし、さだ過ぐるまでかくてありき、

只野伊賀に嫁す

偶ま勤番にて江戸番頭なりし只野伊賀と云ふ人あり、祿千石を領せしが後妻を求む、平助よく伊賀を知れるより眞葛を說き勸め、仙城の二の丸に程近き只野氏の屋敷に遣嫁せられたり、

人或は之を諫むるも、眞葛は答へて『遠く仙臺へ嫁せしめんとするは父の心なり、又遠變するは子の心なり、などて子の心を心として親の情願に背くべき』と以て眞葛が性情の一班を知らべし、

父及び良人に訣る

後幾程もなく實父平助、良人伊賀に永き訣れの悲哀に遇ふ、乃只野圖書の世となれり、こは前妻の嫡子なり、只野家に元來頑固なる家則多くして、如何はしき事もあれど、繼母の身なれば、務めて平和を旨として萬事差控え、毫も是非を論ずることなかりき、

書を著す

既に父母を喪ひ、今又良人に訣るゝの悲境に陷りたる眞葛は、悵然として無限の涙を揮ひ、吾幼よりの宿意、女なりとも人に異なる書を著はして、世に知られ乃祖の名をもあらはさばやと、愈著述に身を委ねたり、

當時諸侯の多くは財に苦しめられつゝ、嬖妾に費を厭はず、或は位官を得んとて徒らに金錢を失するもの多ければ、此等を始めとして經濟の可否を論ずる數篇、全書三卷を獨考と名づけたり、時に文化十四年、冬十二月朔、眞葛五十五歲の著述とぞ聞ゆ、此外なほ奥州ばなし一卷、磯つたひ一卷あり、因に記す、婦女子の身にして、しかも似げなき經濟を論せしは、紫女、清氏にも遙に勝りて奇才卓越せる世にも稀なる刀自と云ふべし、

馬琴に書を贈る

文政二年己卯の春二月眞葛の妹栲の尼は從者一人をつれて、突然馬琴を音づれ見參を希ひたり、折柄馬琴は獨り留守居したりしが、急に言を設けて曰く『己は暫時留守するものなり、何事ぞ用向もあらば仰せ置かれたし』と、尼は一通の封狀とさゝかな代と記したる黄金一封と、ふくさに包みたる草紙三卷を取出し、こはみちのくの親しき者より主人に届けまゐらするもの、翁が筆削を賴み侍るとて出でにけり、

馬琴書齋に退きて其の狀を開き見るに、其趣は比丘尼の言に同じけれど、文書の體いと尊大にて、馬琴様、みちのくの眞葛、とのみありて宿所など定かに記さず、馬琴不審に思ひ、かくまでに尊大なるはいかなる人の妻やらん、仙臺侯の側室にて、御部屋など唱ふるものと、はるゞよこしぬる草紙は何を

書きたるやらんと思へば、やがてまきの稿本なり、其說の良否は措きて、兎も角も婦人には多く得がたき見識あり、いで吾志をも見知らせて何事も其後にせんすべあらんとて一書を認む、

馬琴の返簡

おのれはいと早くより市にかくれて、をんなわらんべのもてあそびものとなるよしは、刀自にも、知られたるなるべし、さはれこたみよせられしおん作のさうしは、それらのすぢにはあらぬを、世の人のわれをしれるものと異なる見どころあるにあらずば、江戸には名だゝる儒者も國學者も多かるに、おのれにはたのみ給はじ、さることゝろもてせられなば、などていと尊大なる、およそ人にもの問ふには、禮節あり、いにしへの人は、一字の師をだも、なほおろかにはせざりき、もしまことに問はんとの、みこゝろあらば、かくはあらじを馬琴とさへものせられしはいかにぞや、曲亭も馬琴も、予が戲號なれど戲作狂詩狂歌などのうへにのみ交はる友ならば、しか唱へらんに、咎むべき事にはあらず、もし實學正文のうへをもて交る友に、なほ曲亭とたゝへられ、馬琴といはるゝは、是われをしらざるものに似たり、いかでか予が心に耻づることなからんや、かゝれば、刀自もよく予をしり給へるにあらざるなめり、近ごろ平賀源內が、儒者蘭學のうへには、鳩溪と號し、戲作には、風來山人と稱し、淨瑠璃本の作あるには、福田鬼外としるしけり、又、太田覃は、儒學に南畝と稱し、狂詩に寢惚先生と稱し、狂文狂歌に四方赤良、四方山人、巴人亭、李花園などもしるし、晩年には蜀山人と號したれども、戲作淨瑠璃のうへならでは、鳩溪を風來とも鬼外とも稱するものなく、狂文狂詩狂歌の上ならで、南畝を寢惚とも四方とも、巴人亭とも稱するものはあらざりき、よしやその著きをのみ呼びなれて、虛實の號を混ずるとも、まことによくその人をしれるものは、こゝろに心を用ふべき事か、刀自はよく予を知ら

ず、予は素より刀自を知らず、男女みづから授け受けざるは禮なり、刀自は人の妻か、母か、その宿所だもつゝみ給ふには、われ答ふる所をしらずこゝをもて、只吾志を述べて、おどろかし奉るのみ、

と、書きて下婢に命じて、翌の朝しか〳〵の比丘尼來たらば主人は今日も留守なり、こは昨日の御かへしなり、と告げて渡せよと云ふに、こゝろ得果て、しか計ひたり、

此後廿日ばかりを經又かの比丘尼より便をもてみちのくよりの消息を屆け侍るとて寄越したるに、眞葛の手簡並に楝尼の添文なりき、

眞葛再度の手簡

よろづにあは〳〵しき女のよそをだに得しらねば今はやもめにて、いとおよすけたる身にしあれどをとこに物いはんに、ねもごろぶりならんも、なか〳〵になめげなるべしと思ひとりしより、いやなしと見られにけんの露ばかりも、そなたさまをあなどる心あらば、人には見せぬ筆のすさびを、たのみ奉ることやはある、この後とても、心づきなきこと多からんを敎へられんとこそねがひ侍れこなたのうへをしらせよとあるに、いかでかつゝみ侍るべき、眞葛はしか〳〵なり、又さきにわらはが消息をもて、とぶらひしは妹にて侍る『中略』こゝには詞がたきもなく侍れば、只あけくれに物を考へ、見かへすることの癖となり、病ともなり侍りたり、さておもふやう、何の爲に生れ出づらん女一人の心として、世界の人のくるしみを助けまほしく思ふは、なしがたきことゝしりながら、只この事を思ふが故に、日夜やすき心もなくて苦しむぞ無益なる、今はやもめにもなりつるに、なげきをのこさん事とてもなし、いきのかよはんかぎりは、この歎きやむことあたはじ、なか〳〵生きてくるしまんより、いきをとゞむるぞ、苦をやすむるのすみやかなるべし、と思ひて、ひたすら死なん事を願ひ侍りしに、時は秋のながき曉がた

の夢に、
秋の夜のながきためしを引く蔦の
と、云ふ歌の上のおのづから、ふと聞えたるは、多年信じ奉る観音ぼさつ、しめさせ給ふと覚えて夢心に忝く、此下のつけやうにて、おの一世のうらとならんとまでしめさせ給ふとおぼえて、いとうれしく心いとあわたゝしきものから、世々に栄えんとこそいはめと思ふほどに、さめはてはべりき、四の句いと大事ぞと思ひつゝ、やゝほどありて、たえぬかつらはとつけ侍りし、
秋の夜のながきためしにひく蔦の



絶えぬかつらは世々に栄えん
と、一首のかたちをなしぬれど、いと心もとなくのみ思ひ侍りき、かくたえず物をのみ思ひつみし故によりて、病者となり侍りて、身もよわく、心もきえ〳〵にのみなり増さりしは、不動尊を信じ奉りて後、漸く病もうすくなり侍りしか共、今に右の手のいたみて、筆取ることのまゝならず、眼くらくして、細書をみる事能はず、是れ老の病とぞ覚え侍る、このちかきわたりに、岩不動と申し奉るがたゝせ給ふ、とし毎の五月廿八日には、このわたりなる、わらんべどものつど

ひて御てしをかき荷ひ、御はたあまた持ちて、遊ぶが如くもて渡り侍り、我も赤色なる御はたをたてまつりしを、御先に持ちわたりしかば、御心につかせ給へるならめと、有りがたく思ひ侍りしによひ過ぎてうすねむたきに、いざねばやと思ひて、はしゐしながら、籠にこめたる螢のやすげなくふるまふをまもりつゝ、何心もなくてありしほどに、

ひかりある、身こそくるしき思ひなれ

と、云ふことの耳にきかれてめさむる心地せしは此御佛のしめしぞと有がたくて、

世にあらはれん時をまつ間は

と、又下をつけそへ侍りし、此二歌をちからに、さらば心にこめしことどもを書きしるさばやと思ひ立ちて、いとおほけなきことと共を、いひ出だせるにぞ侍るなる、書き果て後に誰にしらげをたのまばやと、久しう思ひ煩ひて侍りしに、かゝる人に見せよと、不動尊の御しめしありし故、そなた様

にことよせ侍りしこそ、おろかならず、考へを添へ給はらなんと、ねんじ奉りぬ、今のこの身は、たとへば、小蛇の物に包まれて、死もやらず、生もせず、むなしき思ひのこれるにひとし、君あめとなり、風となりて、こゝろざしを引きたすけ給はらば、もし天に顯るゝことのありもやせん、などありて、こたみは瀧澤解大人先生様御許へ綾子と書かれたり、

馬琴此長文を讀みて愍憐の情に堪えずして、復一書を送る、

馬琴の返し

海なす御心の廣からずば、木の枝に鼻をすらる、と云ひけん如き予が言ぐさをうべない容れて、しかく〳〵とは聞え給はし、およそはこたみの御せうそこにて、あし曳の山の井の、かげさへみゆる心地し侍れば、浅くは思ひ侍らねど、不動尊の示現によりてなど、聞え給ふばかりうけられね、そはとまれかくもあれ、たのまれ奉りし一條は、よく

もわろくもなし果て、おん笑ひにこそ供ふべけれしかれども、なりはひの爲に、たのまれたる書きもの丶多かれば、ことしのくれまで待たせ給へ、

また彌生の頃眞葛の消息に

おんなりはひの爲に、筆とらせ給ふにていとまなき、しば／＼わづらはし奉るを、こ丶ろなしとやおもはれ侍りてん、

同じく返し

せがやどの花さくころもみちのくの
風の便りはいとはざりけり

程經し眞葛のかへし

あやまたず君につげなん歸る雁
霞がくれにことづてしふみ

是より後、かねて書きつゞりたりし物をば、妹の尼に淨書せしめ、又馬琴の爲に綴れるものをば、眞葛自ら淨書して種々送りたり、其他眞淵、春海、宣長などを論せしあり、

馬琴獨考論を著はす

か丶りし程に此年も已に霜月になりしかば、眞葛は『獨考のことは忘れ給はずや、かねての約束を違へ給ふは』など馬琴に云ひおこせること屢々なれども今更に其文をひき直さんこと容易ならず、もし其惡しき所を削除せば、殘る所は少なかるべし、こは此儘にうちおきて、別にさとすに如かじと思ひたれば、原本は假名つかひのたがへると寫しあやまれるとに聊か雌黄を施して、別に獨考論二卷を綴りたり、その言少しも諂ひ飾れることなく、是非を擧ぐるに教訓を旨として、痛く高慢の言をば誡められたり、之馬琴と書かれたり、

此時越前の國紙とて珍らしき小形の美濃紙十五帖と、おなじ國のはさみ、みちのくの名取川なるうもれ木の栞、もとあらの萩の筆など贈る、

明春二月馬琴は贈られし喜びを一筆認め送りたる後は、絶えて音信なかりけり、

馬琴眞葛姉妹を忍ぶ

今はた遠ざかりぬる事をいかにぞやと思ふ人のた丶

にはえうわざながら、彼同胞は稀世の才女なり、彼等の齢は五十を過ぐる程なりとも、互に面を知らずして親しみ齢を重ねなば、李下に冠を正し、瓜田に履を容るゝ、人の疑ひなからずや、まして彼等は家則嚴しければ馬琴と交はるを誰にも秘したりと云はれしを知りつゝ、交はるべくもあらず、捨てがたき思ひありて、捨てずしてかなはぬは云ひがひなき事ながら、こは豫てより思ひしなり、

これより春の朝、秋の夕折にふれ、事におひては思ひ出で過去の消息など取出して視る毎に、しのぶの露に袖濡らしたり、

其後馬琴は眞葛の草紙を世に表はさんと思ひしが彼の獨考は禁忌に觸るゝ事のおほく、又自らなせる獨考論も人に見すべきものならずとて、此二書は貸與さへも堅く誡められたり、又奥州話なども憚るべき事あれば、只磯づたひ一書のみ優なる文體と、珍らしき說ありて禁忌に觸るゝ事もなければ、是をこそと思ひたれど、時至らざりしか其儘にて止みにき

婦人と名譽心

橘　経　子

名譽はそも何物なるか。才かしこく行人に勝れてよろづ人の上に仰がれ、此の人なからむ後には誰をか世の鑑とせんとばかり深う敬はるゝは、固より名譽の人なり。芳ばしき名靑史に傳はりて、異國人にも語り草とせらるゝ者もこれなり。身を微弱より起して功績いちじるしき人もこれなり。貧しき中より苦學して、學術技藝に比ひなき名を得たるものも是なり。猶下りては、乞丐にも劣らぬ賤しきものが、時の間に富豪となれる。權門に媚びて僥倖を得たる容色を售りて世に時めける。いづれもこを慕ふ人の目より見たらむには、類なき名譽として、其顰に傚はむとはすらむ。高きも賤しきも、男も女も、賢きも愚なるも、此の心なきはなかるべく、只これを願ふに、或物は厚く、或物は薄く、或物は無形の譽を、或物は有形の利を求むることのみ異るのみ、初より

賢愚の境に居らざるものと、性愚にして其境に入るまじき者との外は、日々の營も大かたは其希望に達せむが爲にて、之を達せしものは則名譽の人たるを得べし。されば名譽は眞に人心を繋く絆ともいふべし。誘多き此の世にありて、能く重き罪惡に陥らぬも、これあるが故なり。あしき人の能く改まり、貧しき人のよく富み、賤しきが能く身を立つるも、皆これ故なり。たゞ一の名譽にして、其中に千差萬別あり。敬はるゝもこれ、辱めらるゝもこれ。能く名譽の理を解釋すべき必要はこれが爲なり。

幼兒の學校に登りて、始めて物のよしあしを知る頃より、書の上に見る敎は、大概古人の歴史にして其小兒の腦髓を司配する力極めて強く、得々として正成を氣取り、紫式部を理想として、覺束なき向上の精神に司配せられつゝ無邪氣にして進む小學時代より、已に名譽の何物たるかを知り、かくて希望裕なる高等女學時代に移れば、更に名譽はたやすう得らるべきものとして、こを願ふ心もいと深かるべしさるを年十七八才に至れば、其家庭の有樣と天禀の資質とによりて、名譽の標準となす人も、吾が定むる目的もさま〴〵に別たる。或ものは良妻賢母たらんとして嫁し、或ものは無意識にして嫁し、或は才色を售りて嫁し、或は富に惑ひて嫁す。志や、高きものは、猶高尚の學藝を修めんとして遂に婚期を失ふものあり。或は始より此の道もて獨立せんとて學ぶものあり。或は一すぢに身を敎育に委ぬる者あり。其執る所の方針の如何を論ぜず、志を用ゐざるものは此時より日々月々に衰へ、志を用ゐるものは此の時より益智識發達して、賢愚のけぢめ明になりゆく、これ確に名譽の光の照すと照さぬとに因るなり。

然るに怪しむべきは嘗て堅忍不拔の精神に富み、多く人より望を屬せられし人の、嫁して後漸々其性格を變ずることなり、境遇は人を移すとかやいひて免れがたき事となせども、吾が本分を知り、わが希望を失はず、わが名譽を重んずる限りは、いかなる

境遇にありとも、全く其性格を變ずるには至らざるべし。故に凡そ其爲す務の何たるを問はず、人皆名譽を保たざるべからず。名譽ある人を模範として進まんことは、いづれの時にも幼少時代の如くならざるべからず。人より名譽を付せらるゝを願ふに非ずして、義務の爲に身を致すは、これ名譽なり、との信念なかるべからず、即名譽の花を羨むに非ずして長く散らざる實を求むべきなり。

されど名譽を重んずると、名譽を好むとを混同すべからず。道を知り身を修めんが爲に諸學を修むるものは名譽を重んずる人にして、吾が才藝を知られんが爲に名を售り、交を衆に求むるは名譽を好む人なり。人の妻にして名譽に耽らば其内政必ず治まらず。學を修むるものが名譽に耽らば中途にして必變じ。敎育者が名譽に耽らば必僞善のふるまひあり。二つの者初は相去ること遠からざるが如きも、彼を學ぶものは自ら其人格を高うし、之を慕ふものは屢々その身を辱めて、終には甚しき逕庭を見るに至らん。

學なき才なき者が辱を受くるはさる事ながら、世には往々その長じたるわざが媒となりて辱を受くることあり。こは婦人の弱點として、小成に甘んじ、機に投じて名譽を得んとする野心あるに因るなり。見よ、少しく學秀でゝ、其名も知らるゝに及べば、我こそは女流の秀才なれ、と人あまたある中にさし出でゝ、嗚呼がましき物語し、又異國人にも名を知られんとして交はり、實なき追從など受けて、もてはやさるれば、いと譽あることゝ心もそらにきらめきまどふ程に、思慮なきふるまひどもありて、さもあらぬ事迄、さま〳〵非難を招くことあり。これ人の與へたる耻にはあらずして、吾が能に誇り、吾が名を天にまでも揚げんとしたる咎なり。即ち吾が才藝が媒となりて導く所の辱なり。

或は都にて物學びしが片田舍に下りて敎育の道にたづさはらんとせしものは、初は其鄕里の未開なるを憐みて心より其開導に身を致せば、文化ひくゝ、

人目せばき地のならひとして、忽ち女流の才物よ、敎育者の龜鑑よ、と崇められ、少しき才能も、所がらに光滿ちてゐてはやさるれば、足らはぬ女子を見ならひたる男子らの、思ひせめて交を求め來たれるが、初は互にけ高う品格を保ちたりしものも、遂には世の愚ものとひとしき汚名を流すことあり。これ亦せまき地に入りて、『吾が爲すことを見よ』、とばかり、己れを高めて、一時の名譽に甘んじたりし結果にやあるらん。

思慮深く、愼重なる人はよく此の理を悟り、且此の般鑑を目前に見て恐れぬれば、わだ〳〵しき迷にも陷らず、此の人こそは名譽を遂ぐべきかとおもふに、年長け、人に許されて、重き位置にも据ゑられ言用ゐられ、行崇められ、人々にも尊重さるゝに至りぬれば、先づ克己の心弛みて放恣となり、己れを足れりとして學ばず、人を愚ものとして之に高ぶるが故に、學も德も日に衰ふるを知らず、猶且名譽比ひなきものとして得々たるが故に、物極れば欠くるならひをも忘れ、益誇り、益人を蔑にしたる末には聲價落ち、名譽失はれて、果ては人に惡まれ、厭はれ、其位置をすら危くするに至るものあり、惜むべきは眞に此人なり。初より稀なる名譽なからましかば、豈かくまでには至らんや。されば功績いかばかり多く、年齒いか計り長ずとも、常に己れを制して小名譽に誇り、或は空しき名譽に耽けるまじきなり年長けて得たる恥辱は、之を挽回すること難くして其後に立つる功績は、人甚く信せざる也。

故に名譽は、仰ぐべく重んずべく、古人の名譽を標準として進む、己れ名譽を今代に得んとの目的の爲に萬事なすべきに非ず。所謂名譽心は、志空虚にして、實なき名を求むるにあれば、之を得んとする者は必失ひ、かくて眞の名譽は、心なくてあらん人に自ら備るべし

和歌兼題

七月　池蓮　納涼

八月　初秋露　常盤御前

九月　秋夕　行路薄

自ら進むの力

稲田太一

『威嚴には二種類あつて、男子の威嚴と、女子の威嚴とに分つことが出來ると云ふことを忘るな』これは、余が先達の誌上で論じて置いたことで、今日の女子が是非、心得て置かねばならぬ事と思ふ、實際、今日の女子の最も著しい缺點は、女子として女子らしい威嚴に乏しいものが多いことである、いひかへれば自信の不足である、併し、自信があれば威嚴があるとは限つて居ない、眞の威嚴は、なか〳〵容易く得らるべきものでない、稀れに、威嚴の尊き力たるを、認めてゐる女子があつても、多くは男子の威嚴との區別を無視し、混同して居る、これは早速改めなければならぬ緊急な事と考へる、考へて見れば、世の中には、女子の地位を高むる爲には、男子の領分を犯さねば不可と考へて居る人が多いのである、女子をして男子の特質を、摸傚せしめ學ば

しめなければ、女子の地位は到底男子と同等とならぬと思つてゐる人が少くない、例へば、色々の事を唯一の標準として、女子を比難するのも、此のやうな感念から來てゐるので、これは抑も、男女性格の根本的の相違、從つて兩者發展の方面が根本的に違つて居ることを、信じないのにもとづく、即ち、威嚴といへば、男子の有して居るやうな威嚴を以て、唯一の威嚴となし、威嚴の全體となし、勇氣と云へば、直ちに男子の勇氣を以て、勇氣の標準とする、又、女子に於ても、かう云ふ考へで暮して居る、爲に女性は、壓迫制限の要なき場合に、壓迫制限を蒙つて來た、まるで玩弄物のやうに、取り扱はれても男子の社會は即ち人間の社會、男子のなす所は即ち人間のなす所、男子の考へは即ち人間の考へ、男子の命令制裁は即ち社會の命令制裁であるといふ考へで、その狀態をば、女子の本性である、天然であると考へ、それに安じて居たのは、古來我が國の女子の狀態であつた、余は此の如き壓制的の悲しむべき

狀態にあり乍ら、甞て自ら進み自らもとめた女子のないのを、甚だ奇体と感ずる、

そこで近來わが國で、女子を尊敬し、女子を優遇し、女子の地位を高めねばならぬといふ議論が盛んになつて、又女自らも、反省の結果、諸種の壓迫の結果、幾分地位を高めて來たところが、矢張此の考へに因つてゐるので、或る女子は、威嚴に著目したはよいが、只管に男子の威嚴を眞似る、又或る者は、勇氣の養成を大切として、男子的の勇氣を振舞うて平氣でゐる、又或る者は、體育を重視して、盛んに活發な男子の運動を學んで居る、此の如きは、決して喜ぶべきことではない、威嚴に、男子のそれと、女子のそれとが有る如く、男子と女子とは、何事についても、とるべき道が別々に一つ宛あるといふことを忘るな、

つまり女子が男子に盲從するのは、忌むべき事で――こゝにいふ從ふは命令を守り、その意に背かぬの意ではない、女子が、男子のする通りに振舞ふを意味するのである――女子たるものは、何事についても、女子のとるべき道を自分で探すのを至當とする、又、最も可とする、從つてそれが出來る程に、己が力を發達せしめねばならぬ、それには第一に『自ら進むの力』が必要である、然るに現今の女子の缺點の一番もとゝなつてゐるものは『自ら進むの力』の乏しい事、これである、故に勿論、此の力は、ひとり女子に限らず、すべての男子に、一時も缺くべからざるものであるが、今後の女子には、殊にこれが養成の必要を感ずる、

『自ら進むの力』を養へといふた所が、親にそむき夫を排し、長上を犯すの力を養へなどいふのでは、無論ない、又は、女子の天性に背いて、彼の獨立生活をなせと勸むるのでも無論ない、『女子として、女子のなすべき範圍に於て、自ら進み、自らとる事が出來る力を養へ』といふのである、例へば育兒、例へば家計、例へば交際、此等の數多の範圍に於て、自ら進み自らとるの力なきものは、眞に、憐れむべ

きものではないか、

物理學に、斯ういふ話しがある、高所にあげられた物體は活動の能、即ちエネルギーを持つてゐる、例へば高所にある水は、流下の際水車を廻して大なる仕事をするが、地上の水は何等の働き、何等の能力をも持つて居ないと、諸子よ、從來の女子は、果して此の地上の水ではなかつたらうか、此の如き女子に何の進歩があらうぞ、又、何事が出來やうぞ、社會の發展は、爲に如何程、沮礙されたか計り難い、戒むべきは消極に陷ることである、

つまり余は社會發達の爲に、女子が『女子として自ら進むの力』を體得せんことを望んで止まない、

婦人の知見

山田素表

夫妻相携へて交際場裡に立ち、又は旅行を爲すと

云ふ泰西の風習は、啻に夫婦の關係の美はしく見ゆるのみならず、之に由りて兎角見聞の狹きに陷り易き婦人をして、諸々の遭遇に依りて其知識を啓發すること至大なるものあるべき也、固より一國の風俗習慣も亦之に伴ふを要するものにて、例令は今日の女服改良の如き、其服裝を改めんには家屋の構造、室內の體裁等も隨つて改良を加へざるべからず、然らざれば到底其普及は望むべからざる事なり、斯の如く事皆比々相俟ちて其改良發達を期せざるべからざるものなるが故に、今我邦に在りて夫妻相携へて交際場裡に立ち、又旅行もするといふが如きは、已に世の一部に於ては行はれつゝある事なりとは云へ之を以て俄に社會全體に望むべからざるや明かなり然れども一の改良は他の改良を促進するものにして殊に斯の如き風習は婦人に與ふる所の利益頗る大なるが故に、苟くも社會の改良に志あるものは努めて其改良扶植を期せざるべからざる事なり、

一體に婦人の位置の猶未だ高まらざる今日、遺憾

なる事固より一にして止まらずと雖も、其見聞を廣からしむる機會の婦人に供せらるゝ事極めて僅少なるが如きは、其最たるものなるべし、終生竟に一度も足を郷關の外に踏出さゞるものも世に少からざるべく、一年相接するは唯鄕黨比隣の極て狹少なる範圍に止まるが如きもあるべし、此等の點に於て男子の頗る便宜多きに比して婦人は甚だ不幸なるものなり、固より男子は多く外の人にして婦人は重に内の人なるに出來すべしと雖も、而も之が爲に兎角其知見を狹量ならしむるものなるが故に、努めて其弊を除去せざるべからざる必要あるものなり、然るに從來の習慣として新なる知見に接觸する機會ありとするも反つて之を避けしむるの傾向あるに依り、益々婦人をして家庭の裡に籠居せしめ、斯て絕えて其見聞に資くる事をせざるに至る、已に社會にありて囂々傳唱する事柄も、婦人の爲には遠雷ほどにも響かざる事あり、世に傳はりて嘖々たる事件も婦人の爲には抑も此起りはと其冒頭より先づ說明せざるべからざる事吾人往々實驗する所なり、若し一家の主人たるもの幸に口豆の男子たらんには、婦人は之に便宜を得る事少からずと雖も、然らざる限りは家庭は全く牢獄の如く、所謂娑婆の沙汰は得て聞くべからず、吾人は勿論今日の新教育を受けたる婦女にして尙且然りとするにあらず、一般多數の婦人は實際斯る狀態に於て生活しつゝあるを云へる也、而して斯る不幸は單に婦人一人の不幸に止まらずして、實に又一家の不幸の伏する所なりとす、夫婦間の不和衝突其原因萬種なりと雖も、雙方知見の甚しく隔離せるより由來することもあるべく、且其家庭に於ける兒女の敎育上、主婦なるものゝ見聞の多寡は其影響頗る大なるを思はずんばあるべからず、

男女の交際を今日より一層自由ならしむるは、婦人の知見を啓發するに最も効力ありとす、然れども社會の道德的狀態にして尙數步の進涉を呈せざるに於ては、就中靑年男女の交際は或は其弊害の大に堪えざるに至らん乎、左は言へ其弊害に畏縮して何時

までも其途を啓かざるは是亦喜すべき事にはあらず婦人の側より見るも男子なくして世に樂しかるべき筈なし、男女の交際は固と自然なり、天性なり、決して怪しき事にあらず、寧ろ此交際をして不潔に終らしむべきなり、儒教の大弊は此自然を撓めて其極端に走れるにある事言ふまでもなく、其餘弊を受けたる我邦の道德は、同じく男女兩性の自然を隔離して其貞操を保たんことを期せり、而も忌むべき醜業婦の勢力を交際場裡に逞うせしめたるは其影響と云はざるを得ず、此矛盾せる社會の狀態は是豈男女交際の到底抑止すべからざる所以を示すものに非ずや故に今日の如く男女の交際を窮屈ならしむるは一方に於て醜業婦の勢力を益々跳梁せしむるものと斷言し得べきなり、吾人は此點より見るも男女間の交際を今少し自由ならしめんことを望むものにして、而も婦人の知見を增進するの途も亦此にありて存するを認むるものなり、

然れども今假に全然たる自由を許すべからずんば少くとも漸を以て其時運を促さゞるべからず、固と兩性の交際は善導すべきものにして、禁壓すべきものにあらず、儒教の謬れるは其後者の主義に依れるにありて、今日と雖も往々一意唯禁壓を主として之を善導する心得なきもの少からず、誤れりと謂ふべきなり、吾人は今男女交際の簡易なる方法として世に奬勵し度き事は、客を招くに其夫妻を合せ招く風習は已に世に多少見る所にして決して嶄新なる方法にあらず、然れども多くの場合に於て現に其然らざるを見るなり、今日の狀態に於ては其招かんとする客の獨身なるか、有妻なるか、子持なるかは全く眼中になく、隨つて主人の家族も客の眼中に存せざる場合多しとす、今之を改めて主客共に夫妻を以て相親む事を得ば幾何多く交際の趣味を覺え、快樂を感じ得べきぞ、此風習を普及せしむるは是れ一般男女の交際を危險なく馴致する基にして、其最も簡易なる方法と思はる、而して不充分ながらも今日の婦人をして其知見する所を多からしむる途なりと認むる

ところなり、生活の豐かなる上流社會に在りては、夫妻相携へて旅行を爲すが如きは容易なる事にして、現に其類多きを見る所なりと雖も、普通の生活に於てはなか〳〵に事情の許さゞるありて、是亦俄に一般に期するべからざる事なるべし、然れども都會に在りては稍々此等の風俗の普及せるは往々見る所あり、例令へば春の花見に上野、向島わたり、左ては亦つゝじ見、藤見など、一家を擧げて遊ぶ所あるは珍らしからぬ事なり、其足跡の及ぶところは狹少なる範圍に止まるにもせよ、都市婦人の此等行樂の間より得來る知見は決して少々なりとせず、其之を地方婦人に比して割合に談話に富めるは固より種々なる刺戟の多きが故なれども、一は亦戸外の見聞に負ふ所あるに由らずんばあらざるなり、然るに之を地方一般の婦人に就いて見んか、夫妻相携へて人前に現はるゝが如きは醜事の一とし目せらるゝ所にして、婦人は所謂閨門の人にして止まるの外なし、今夫れ山間避地の事は云はず、交通の便餘りある地方市街地に於てすら婦人の狀態は依然として憫むべきものあり、餘裕ある生活をなす地方紳士の家庭と雖も、主人の旅行に妻子の相伴ふが如きは頗る稀なりとす、彼等は一宵千金を抛つて酒色を漁する事あるも、曾て妻女の行樂を許すことなく、一年唯舊に依つて依然たる故山の風色と相對するのみ、犬鷄と相親むのみ、風流韻事或は餘りあらんも、廣く實際の知見を蓄積して、一家の內政、子女の敎育等に應用するの點に至りては望むべからざる事なり、今や交通機關普く備はりて舟車の便縱橫に發達せるに拘らず、其恩澤の及ぶ所、一に唯男子に厚うして婦人に薄きは何の故ぞ、畢竟するに社會が婦人の位置を未だ適當に尊重せざるに由ると、一つは婦人自身が舊來の陋習を破つて進むの勇氣なきに因るものとせざるを得す婦人の知見を增進するの途、素より一にして止まらざるべし、然れども吾人は今主として旅行の効能を說かんと欲するにあり、其夫妻相携ふると然らざ

るとは深く撰ぶところにあらず、一般に婦人の旅行を奬勵するは、今日の婦人をして大に活知見を增進する所以なりとするものなり、若し茲に鐵道乘客の男女兩性を區別し、之が比例を示す正確なる統計のあるありて、更に之を泰西文明國に於ける統計とに對照して、兩々相計較する所あらば頗る趣味あるべしと雖も、吾人今此等の便宜を有せざるが故に、精密する觀察を下し能はざるも、女性乘客の數と一國文化の程度とが必ず相平行するものなるは敢て斷言し得べきなり、其最も顯著なる一例は支那婦人の窘足と其國勢是なり、

暖を追ひ暑を避けて旅するも可し、花を觀、月を賞するに旅するも可し、總て行樂は決して無意義なるものにあらず、自然の壯嚴に接し、天然の美妙を撫せらるゝ間、如何に人をして思邪なからしむること多きぞ、然れども殊に吾人が奬勵し度く思ふは慈善旅行是なり、慈善旅行と謂ふも未だ意を盡さゞるに似たりと雖も、要は天災地變等の生ずるありて、

同胞の疾苦に投せられたる場合に、往いて實况を視察し又は之を慰問する等を指せるなり、吾人の實驗に依れば斯の如き慘事の跡ほど、人生の悲慘を極めて而も皇天の大威嚴の地に布けるを覺えざるはなきを以てなり、斯かる天地の間に親しく身を容るゝは百日の講說に耳を傾くるに勝り、千卷の書に眼を晒すに超へたりとす、

夫れ男女間の交際を今少し寬容ならしむる事と、婦人をして努めて旅行の便を與ふるとは、其知見を啓發する捷徑にあらざるなき乎、

○危險な雞卵　雞卵が滋養物だからと云つて、能く品質を見定めもせず、無暗に用ゐるは、非常に危險で、殊に肺病患者の痰など甜めた雞の玉子には、其黴菌を含んで居ることがある、又近頃地玉子と稱して賣つて居るものに、實は上海玉子が多い、それは上海では値段が馬鹿に廉く、一錢に六箇位の相場だからこれを澤山買ひ取つて橫濱に輸入し、それから埼玉地方へ持ち込んで更に東京へ持出すからである、斯かる玉子は全く死んで居るから、之を喰べれば毒になるばかりで効はない、一番安全で新鮮な玉子を得やうと思はゞ是非とも家庭で雞を飼養するやうにせればならぬ(酒井伯爵談)

米國視察談

櫻井女塾長櫻井ちか子女史(五十三)は、教育視察の爲め、昨年三月米國に渡航し、晩香坡より加奈陀、シヤートル、市俄古、紐育其他各地に於ける女子教育を視察し、去月二日無事歸朝したるが、其の談話を左に紹介す(女史の洋行は今回にて三回なり)

▲米國に於ける婦人寄宿舍　流石に米國は總ての教育設備が完全に行き届き、到る處の都會には必らずY.W.A.とて、婦人青年會寄宿舍及び婦人ホームの完全なるものが設立され、就中市俄古市にある婦人青年會の如きは、極めて完備せるものにて、十數階の大建築を以て之れに充て二階三階は運動場、圖書室、炊事場とし運動場には凡ての運動器械は勿論ピアノ、オルガン等を備付け閲書室にはあらゆる書籍を備へて、自由に寄宿生の閲覽を許し、其他毎夜各方面の大家を招聘して、女子に關する必須の學科及び音樂、割烹、裁縫等を教授するなど、實に到らざる處なく、其の四階より上部は總て、寄宿生又は米國の各地、或は海外より來りしもの丶寄宿に充て、其費用は寄宿生は、一週日五弗より十弗迄、臨時の宿泊者は、一晝夜一弗五仙の宿泊料なるが、現今同會に寄宿し居る婦人、約四百人内外ありて、其中には無論學生もあれば、女教師商店の賣子等凡ての階級に渡り、何れも女子にして獨立自活する者を救ふと云ふ目的なるより、一定の收入あるもの丶みなるが、是等四百人の婦人は、一人の總監督及多數の事務員によりて、嚴格なる規則の下に起臥し、且つまた同會によりて、其職業をも周旋されつ丶あり、又會の維持は、一年間に一弗宛を寄附すべき會員を募集して之に充て、會の建物は無論有志の寄附に成れり▲寫眞結婚の弊　日本人にして、米國に移住するもの近來益々其の數を增加し、到る處日本人の姿を見ざる處なき有樣なるより、從つて婦人の渡米者も漸く增加し、日本よりの滊船が米國に到着する都度、必ず旣に米國に渡り居る男の妻となりて來る者五六名あり是等は大抵遠方で寫眞にて見合ひをなし、次で結婚をなせるものにて、本國にある婦人は海外（殊に米國）に渡航したさの餘り先方より送り越したる寫眞によりて、早くも其の妻となり直に渡航するものなるが、渡航して同棲したる後初めて己れの良人の意外なる人物なるを悟り、大に後悔するもの往々ある由なり、これは豫め領事とか、然からざれば彼地に永く住居せし相當の紳士に照會したる上にて決心すべきものにて、輕卒の行爲は愼しむべきものなり、且つまた婦人は上陸すべき土地に保證人引取り人なき時は、上陸を許されざるより、婦人にして米國に赴かんとするものは、豫め移民規則等を熟讀したる上にて行くべし▲日本婦人墮落の制裁　我國の婦人が米國に上陸する際は、必ず船中にて寫眞を撮影され、また妻となりて上陸せんとするものには、必ず船中にて佛教信者は布教師により、基督教信者は牧師を呼來りて、結婚式を擧げさせ然る後上陸を許すなり(尤も太平洋岸より上陸する三等船客)この寫眞は上陸後三年以内に於て、其婦人の墮落したる時は、移民官は之れを探し出して、本國に送り返して若し三年後に墮落せしものは、米國にて墮落せしものと見做し送り歸さゞるなり

おとぎ話 猫の身上談

露國 オ、ム、ミズエワ作
山田藏太郎譯

上

猫が三匹屋根裏に棲んで居ましたとさ其中の一匹は純白で一番奇麗でございました、其次なのは脚丈け白い黒で、三番目は灰色でございました、

其おッ母さんである牝猫は同じ家の階下に棲んで居まりた、然し能く遣つて來ては自分の子供等を見舞つて屋りました、子猫共はおッ母さんに温く優しく抱かれては籠の中で一所に寐ました、ですが子猫共が最うおッ母さんのお乳を吸はなくなつたほど生長しましたので、おッ母さんは朝飯や晝飯を其處へ運んで世話して居りました、然しそれも一時の事で子猫共が段々大きくなるに連れて澤山御飯を食べ出すのでおッ母さんは大層困つて來ました、設令おッ母さんが自分の貰ふのを皆んな子供に遣つて自分は

食べないで居ることが度々であつても、最う兎ても養ひ切れなくなつて仕舞つたのです、

そこで或時おッ母さんが子猫共に言つて聞かせるには、

「可愛い私の小供等よ、私は悲い事をお前達に聞かせなければならないのです、最う是から私達は別々にならなければなりません、私の御主人は大層私を可愛がつて善く飼つて下さるとは云へ私の貰ひ分丈で四人の活計には兎ても足りません、であるから是からはお前達は各自に自分の身を立てなくてはなりません、何方かのお家庭の人達のお世話になることを爲さい、何故なれば猫の身分としては御主人の無いといふのは何處へ往つたとて譽められたものでありませんからね」

おッ母さんや又自分等お互迄別れなければならんと聞くと子猫共は泣き出しました、おッ母さんは之を慰めて言ひますには、

「お前達は何時だつて復私に逢ひに來られるのでせ

う、今別れても復皆んなと一所に逢へたなら其時の喜びは如何なでせう、先づ一月と過ぎたら私は此處でお前達に會ふと云ふことを言つて置きます夫迄はお前達は何誰かの許に身を落付けることが出來ると思つて居ます、

間もなく子猫共は球のやうになつて互に緊く抱合つて寢ました、それは眠れるやうに温かにしてありましたからです、嘸や何かの夢でも見ましたらう、

翌日の朝になつておッ母さんが來て子猫共を呼起して自分の晩飯の中から用意した牛肉を呉れました子猫共は元氣付いた時、おッ母さんは樓上から降して庭へ連れて來まして、

『可愛我が子供よ、サア、御機嫌能う』

と云ひながら一人づゝ舐廻して、

『お前達は出世なさいよ、何卒善良猫にね、左樣なら』

おッ母さんは最後の離別に抱いて舐めて而して皆んな別れ〳〵になりました、

中

猫の親子が別れ離れになつてから丁度一月經つた其朝早く母猫は屋根裏へ來て子猫共を待ちに待つて待ち焦れて居りました、若しや小兒等に何か變事でもあつたのでは無からうか、左なくとも孰の兒が何うかしたのではあるまいかと胸をドキ〳〵させて心配して居りました、

すると屋根裏の小窓の許へ白い若衆が一匹現はれました、此は白猫兒が來たのでありました、おッ母さんは嬉さの餘り飛付いての喜びでありました、間も無く黑猫兒も灰猫兒も來ましたので扨もおッ母さんは何一つ不足の無い幸福者となりました、そこでおッ母さんが言ふには、

『サア、可愛い私の小兒等よ、たう〳〵私はお前達皆なに逢ひました、お前達が元氣で健康で居たのが嬉いです、お前達も左樣でせう、サア、早く如何生活して居たかお話し、白猫兒やお前から始めお前が今日一番先きに來たのですから』

白猫兒は宛も得意な樣子で話出しました、
『ハイ、おつ母さん、私は本當〳〵に倖僥だつたのよ、私達が別れて後、私は阿母が私達を離した彼の庭の垣に沿うて暫く往つたの、すると到頭美しい心持の善い小さな家の前へ出ました其家の玄關に年増な夫人が日向暖して居らしたのよ、私はほんの二歩許しか離れて居なかつた、夫人はお人の善い人相な方で之に私は幾何か勵まされたけれども、私に未だ近寄らなかつたの、すると夫人は莞爾しながら私に目を注けてニャ〳〵や〳〵と言て自分の許へ呼びなすつたので、私が驅寄るとお膝へ私を捕つて撫でながら鼻聲かなんかで『何とまアできりやう猫だらう、何とまアお前は白くつ清洒してるだらう』
さうも私が氣に入つたかと見たので私も甘へ出して夫人が部屋に行かうとして起つた時、裾にからまつて勢一杯ゴロ〳〵を遣つたの、すると『ニャ〳〵よお出でゴロ此方へ、私と一緒に臺所へお出で、お前は多分お腹が透いゐてるだらうから、牛乳を飲ませませよう』と夫人は言ふの、
何で私がそれを厭と言ひませう、到頭此の機會から私も其家に住むことゝなつたの、私の御主人はね、旦那の無い方で而して全くの一人生活だの、兄弟もなく姉妹もなく甥もなく姪もなく、畢竟身内といふものは何にも無いのよ、私の大喜びでしたの、何故と言へば私の御主人は此通り好い方でしたもの、若も誰か身内の者が居たらば、其方を澤山可愛がるでしようから其時は夫人が私で面白がることも尙少く亦是程には私を可愛がりは爲ないでせう、却說私の爲に別に財產といつては無かつたが、然し牛乳罐は何時も絕えなかつたのよ正直な處を言ふと私は本當に氣樂な猫でしたの、每日牛乳を吞むし、時としては乳漿さへも亦、これに新しい生肉も燒肉も貰うことがあつて私は立派に養はれたのよ、それに私に特別な小な夜具があつて、それは夜になると溫い暖爐の傍へ置いて私

を温く寐させる爲なの、けれども私は長椅子にでも腰掛にでも主人の寐台にても、一口で言へば何處でも氣儘に出來たのですが然し私は自分の夜具で寐るやうにしたのよ、こんな工合で私は何時も腹一杯であつて鼠を獲らなければならん骨折もなく、何處か鼠奴が嚙つて居ても素知らぬ振して居たのよ、でも私の好主人は少ともそれで怒つたことはないのよ、おッ母さん、猫の仲間中で私より僥倖なものは無いといふのは僞ではないでしようね、』

母猫は答へて、



『さう、其は本當だ、私はお前の爲には喜びますがお前がそんなに自己主義で怠惰者だと思ふと私には少とも氣に入りません、若し他人がお前にそんなに新切であつたなら、お前からも何かに付けて忠義を顯さなければならん亦お前を愛して呉れる人には何かで報をし、少しなりとも其人の利益にならなければならんものです、

ササ、お前は如何な暮しをしましたか』

と言つて母猫は黑猫兒を見返りました、

黑猫兒や、お前は如何暮しましたと母に問はれて、

『おッ母さん、私の暮方も矢張不平は無いのですけ

れども白兄さんのやうに左樣早速には甘く行かなかつたのです、先づ庭から戸外へ出ると、丁度其處に球遊戲をして居た五六人の人間の小供が居ました、私は其れへ近寄りました、すると私を見付けたものと見えて、

ヤツ？猫、猫、逃げやがる、此ン畜生？

とばかり其中の一人が早くも石を取つて私に投げ付けました、が幸に石は私に衝りませんでした、私は甘く逃げたからです、兎も角此の出來事は此日の中に身の落付方を尋ねて定めることが出來なかつたほど大に私を驚懼させました、其中に日が暮れて來ましたし、其れに腹は大變減つて來たので、最一度人間の棲處へ飛込んで見やうと決心しました、すると今度は幸にも運が向いて或る家の下女が私に雛雞の骨を幾らか投げて呉れました、固より舐枯して骨ではあり、又腹一杯とは行かなかつたけれども兎にも角にも肉の殘屑に存付くことが出來たのであります、夫から私は其家の傍に在る納屋の庇下に宿を取りました、寒くて辛いのは勿論でしたが先づ〱寐ました翌日又下女の許へ行きますと食事の殘物を私に投げました、然し夫れは臺所で自分の手許へ投げて置て呉れたのでは無いのです、

斯くて三四日過ぎまして、私ば如何したならば彼の好い下女と臺所でお近付になれるかと色々思案しました、處が私が臺所の入口段に坐つて居た時下女が自分の夫人に話して居るのを聞付けました

奥樣、貴女は先刻天井裏に鼠が澤山で困るから猫を置いたらばとおツ仰いましたが、先程何處からか猫がお邸へ來ました、多分家無で御座いましようから貴女さへ宜しければ私が摑へて來すから天井裏へ上げて置きますか如何、

夫人は之を承知なさいましたので、そこで私を天井裏へ運びました、成程鼠は澤山居ります、私は夜になると幾何かづゝ捕へたので其れからは何時も滿腹でありました、其れに時偶には下女が食事の

殘りを呉れました、唯一つ私に面白くなかつた事は私が飼れて居る其家に一家に棲んで居る惡い小兒がわつて私に石を抛付けるのです、私は何時なりと好い機會を見て讎を打うと思つて、既是迄もちよい〳〵私の爪を驗させて遣りましたが、到頭美事に搔裂いて遣りました』

母猫は、

『無益な事をしたものだ、我可愛兒よ、勿論人間も時として動物を虐待ることがあつて善くないことであるが、然し我々はそんな惡い事をしてはなりません、

扨亦灰色猫兒よ。お前は何如暮しましたか私にお話しなさい、

と言ひました、

灰猫兒は自分の小鼻を脚でちよいと擦つてから話出しました、

『おッ母さん、貴女が皆なを別れ〳〵になすつてから私は獨り殘されて言ふに言はれぬ哀しさを覺えて暫くは其處を離れることが出來ませんでした、到頭私は何處と當度はなく唯目の向處へ眞直に行きましたが全く無我無中でした、やがて狭い汚い街へ出ました、其が何處をどうして來たのか自分でも覺えが無いのでした、ところが突然に何處からか四五人の子供が駈出して來て、私がハッと思ふ間に早や其中の一人に捕まりました、

『見ろ、こんな猫が』

と私の耳許で叫んでからに

『どうだ友達、此奴の尻尾へブリキ罐を如何かして縛り付けて馳しらさうぢや無いか、此奴が馳出すとブリキ罐が後から曳摺られて敷石の上でグワン〳〵鳴るだらう、此奴馳出す、ブリキ罐グワン〳〵……どうだ面白いぢやないか、

私は、戰慄として力一杯逃げやうとしたれども到頭駄目でした、中々堅く私を抱締て居るのです、其時苦んで居る私の許へ一人の子供が參りました

『何卒、此の猫を僕に呉れ、僕の姉さんのマーシ

ヤへ其れを遣り度いのだから、姉さんは極く動物が好きだから屹度喜ぶに違ひないから』

小供は私を捕へた儘なか〳〵承知しませんでした然し仲間の中で二人迄其賴に賛成者が出たので到頭私をマーシャの弟に呉れることになりました、其子は私を顏へ當てながら確と抱いて驅足で町を通つて、小さい貧乏さうな部屋へ飛込みました、其處には病人と見える蒼白い瘠せた十三才許りの娘子が寢臺に寢て居りました、

『さ、マーシャ、僕は姉さんに上げるものがある』

と莞爾して寢臺の上の姉の許へ大事さうに私を置きました、

『おや、猫、なんと好いのでせう、嬉いね大きに難有う』

と娘は叫びました、嬉しさに其の目を輝いてさうして兩手で弟の頸を抱いて熱い接吻をしました、さうして又私を撫でたり接吻したりしました、弟のコーリヤは此時最う部屋から驅出して仕舞ひました、娘は私を眺めながら、

『お丶、嬉しいこと、猫が出來て、私も是で最う獨りボッチでなく爲れる、今迄の退屈と言つたら、私達は貧乏ですから父さんも母さんも毎日〳〵働きに出なさる、私は一日中唯一人で寢て居るのですから其一日の長いにも〳〵コーリヤは本當に良い子で能く私を愛して呉れますけれども彼子とて全日部屋に私と一所に閉籠つては居られない、時々は出歩いたり又お友達と遊ぶのは無理もないことです、私には重い病氣があるのです、何と言つたか忘れましたが、其後 私の脚は切斷されました、ですから歩めないばかりか立つことも出來ないのです、私はお前をなんと〳〵可愛がつてやるよ、だがね、私は時々惡人になることがあるよ、折節お前を虐めることがあるかも知れないよ、何故なれば度々病氣が大層惡くなることがあつて、其時は至つて我儘な而して怒り易くなるのよ』

娘は私と斯う話して居る時は心持が好ささうに見

えました、ですから私に接吻したり、撫でたり、抱いたりして樂み、又自分の一切の悲みを私に話したりしたことが如何に度々でしたらう、私も亦慕しく思つて如何事があつても別れまいと決心しました、私は度々食べ無いことがありましたが、其とて娘が私を養ふのを好まない譯では無くマーシャの兩親は貧乏で自分等の食事すら中々で、度々白パン一つ外無いことがある位なのです、扨又不憫な此娘は成程我儘を起すことが折々あつて何に付けても癇癪を起して、それと共に私に迄當るのです、尻尾や耳を引張たり、逐ひ飛ばしたり。打たりするのです。けれども私は此不幸な人を愛するとも辱めることは出來ませんでした、どうして〳〵斯んなに苦んで居る不幸な娘を怨むなんて出來るものですか。

此話に涙と共に感動して老猫は叫び出して、

「オヽ、私の可愛い兒よ、私は我子供の中で一番お前を愛します、お前がさうも善い子であるといふことが、どんなに私の喜びでしやう、何卒何時迄も其通りでお出で、私はお前のお影で自慢が出來ます。

下

此の對話のあつた後再び猫兒供は母猫と別れました、さうして猫兒共の其後の消息は頓と明らなくなつた、母は程久しく逢ひませんでした、然し讀者よ若しお望みとあらば余は此猫兒供の成行を語ることが出來ます、

母猫は一年過ぎて老病で死にました、飼主は其最後まで大層可愛がつて親切に養つて吳れました、

溺愛者の白猫兒は益々慾張の、怠惰者となつて、到頭食飽れとなりました。

亂暴者の黑猫兒は自分の亂暴で亡びて仕舞ひました、或時小供の頰を引搔き其上目まで引搔かうとして其子供に投付けられ、それから何時も保護て居た下女も大層怒つて袋の中へ縛付けて河へ投げて仕舞つたのです。

善良な灰猫兒は其親友である不幸な病氣の娘が死ぬまでも忠實に盡して、娘が恐しい苦しみで死んでからは一人の富んだ令孃に取入りました、其人はマーシャを大層可愛がつて其存命中たび／＼病氣見舞に來て其度毎に親切と温い手で慰めた方であります、で、マーシャが死んでからは宛も彼の不幸なる致命者を弔ふものゝ如く能く令孃に勤めました、此猫兒が、富んだ令孃の手許で幸福に生活してゐたといふは言ふには及びますまい。

孝行なる姉弟

家貧にして孝子を思ふ、元鮫ヶ橋南町四十八小林庄太郎(二十一)一家は、舊幕の頃御目見得以上の家格なるが、移る時勢の習にて、明治維新後は見る影もなき衰落をなし、母のお祿(四十九)は先夫竹次郎が、長男濟助お玉(二十四)の二人を殘して、去る十九年頃苟且の病が根となり果敢なき數に入りし後、馬具職の三浦金藏と云へるを二度の夫となし、前記庄太郎の外初(十九)つる(十六)しま(十三)福太郎(十一)幸造(六ツ)の三男三女を擧げたるが、長男濟助は卅三年中板橋の遊女に耽り、遂に獨り心中を爲せしを、弟庄太郎は悲嘆の淵に沈み、一時は精神病となりし程にて、兄妹相揃ひて母の心を安めんと、手内職又は會社の職工に傭はれたるが、繼父が底なしの放蕩に貢ひ果され、泣きの涙に其日を送るの不幸を重ねたり、年幼きおしまは一家のこの窮狀を見て、子供乍らに自分が特種小學校に通學せるを、泌々と心に感じて必死となりて勉強したれば、成績表を抽き六年にて卒業したるが、在學中より一日十五錢の賃銀にて煙草の工場に通ひ、家事の手傳をなし、卒業後は四十九錢の日給を受くる身となり、所得の金は一厘も無駄費せず悉く母に手渡しその喜ぶ顏を見て、唯一の樂とせしが、誤つて工場の二階より落ち、右の足を傷め、それが元にて今は生れもつかぬ跛となり、工場に通ふこと能はざれば、ひそかに小さき心を悶えつゝあるを、鮫ヶ橋小學校長室町市之助氏は憐れに思ひ眞砂町の某家に女中奉公の周旋をさへなせしも、おしまは一家の上に氣をひかれ、之を辭し宅にありて手内職をなし、弟の福太郎の學資を貢ぐこととなれり、福太郎は姉の厚意を太く喜び、學校の餘暇を偸みて、兄の庄太郎の工場へ午後三時より通勤しおしまの心勞を頒ち、兄妹の温かき情をうけし身の、自づからその小弟幸造に酬ひんとて、二葉幼稚園に送り只管その生長を樂しみ居れりといふ、悲風慘雨荒らき波に揉まるゝこの哀なる一家の中、自からなる友情孝誼は、暖衣飽食の徒が頂門の一針ならずや。

後藤男爵夫人の洋行談

去る廿四日渡米の途に就かれたる後藤男爵夫人和子氏が、洋行を企てられたる次第を聞くに

同行者は新渡戸博士夫人と夫人の甥子さんとの三人連れで、往復と滞在とで六ヶ月の豫定で厶いますが、滯在中は新渡戸夫人の御住宅に御厄介になりまして、其處から通つて、方々を見物する積りですが重に中等以下の生活情態、其他一般の風習等を見て來たいと思ふので、別段何々を研究の爲めなど云ふのではありません、主人にも言はれましたが、米國地方に行くと、男の方でも兎角神經過敏になり易い、女子は尙更であると云ふので、只暢氣にブラッと行つて、ブラッと返る樣にとの事でありましたから、私も其のつもりで極く氣樂に行て參る考へです

私も若い時は、體が弱い方でしたが、努めて運動に注意致しまして、夫からは病氣と云ふものもなく臺灣に行きましても病氣に罹つた事もありません、能く衛生とか何とか云ひますが、常に體を無理に使つて、非常の場合に堪へ得る樣に心掛くる事は肝要ですから、時には山にも上りますし、隨分危險な旅行も致しました、當世のお若い方は兵隊におなりなさるにも、左樣な習慣が大切と思ひまして、子供等には努めて之を奬勵して居ります、世間では若い奥樣方が何不自由なく、何にもせずに御内にばかり居られるのを見て、嘸お樂だらうと申しますが、私は却て夫れは甚だお苦しい事であらうと思つて居ります位で、……併し私は今申す通り、身體は非常に丈夫ですが、彼方の言葉と言ふものが、皆目出來ません彼の末廣重恭さんのお書になつた『啞者の旅行』と云ふのを見ましたが、誠に可笑い事があります、私も全く其通りであらうと思ひます、去とて言葉を習つてからなど云うて居ると、年は老る、出掛る機會は無くなりますから、物は當つて砕ろとやら、耻を搔いたり差支を生ずると、自然勉强する氣になりませうと思うて大膽に出掛る事と爲ました、云々

大的發展

▽鹽井雨江君の新體詩斷雲　▽佐々木信綱君の萬葉なる杜鵑
▽岩村男爵の美術に於ける婦人の勢力　▽吉松醫學士の育兒法
▽井伊直方君の寫眞實驗談　▽嘉悦孝子君の支那料理法

右の外、從來本誌に執筆せる諸大家の文に談に、ます〳〵本誌の面目を新にすべく、之に加ふるに本誌編輯局が時々催すべき、女子教育講演會に於ける諸名家の筆記を以てし、記事嶄新にして豐富に、殊に家事經濟衞生の事に重きを置き、衞生談の如きも、すべて專門家の術語を用ひずして、何人にも容易に會得せらるゝやうにし　實用に適することを主として、從來掲載せらるゝものゝ外に、西洋料理實驗談、菓子製造法等、有益なる記事、殆んど應接に遑あらざるべし、

これと同時に詞藻欄を擴張し、選者には左の諸先生、之に當らるゝことゝなれり、誌友諸孃は奮つて投稿あらんことを望む。

文學博士本居豐穎君　雜題和歌　　佐々木信綱君　兼題和歌
文學士鹽井雨江君　短文、新體詩　　内藤鳴雪君　俳句

女鑑の大大的發展

大的發展

女鑑投稿規定

本誌第十七年第七號より、誌友欄を再び詞藻欄と改め、舊の如く誌友諸君の投稿を歡迎す、

兼題和歌は佐々木信綱君之を選び、二題を通じて天地人、及秀逸を拔き、天賞一圓、地賞五十錢、人賞三十錢を呈す、

短文、新體詩は文學士鹽井雨江君之を選び、各天地人と秀逸を拔き、各天賞二圓、地賞一圓、人賞五十錢を呈す、尙短文は從來百字內外とせしが、廿三字詰三十行以內とす、

雜題和歌は文學博士本居豊頴君之を選び、天地人秀逸を拔き、天賞一圓、地賞五十錢、人賞三十錢を呈す、

俳句は內藤鳴雪君之を選び、天地人、秀逸を拔き天賞一圓、地賞五十錢、人賞三十錢を呈す、

賞金は當選者の望みにより現金又は價格相當の物品をおくる、又秀逸の人には繪葉書を呈す、

投稿はすべて婦人に限り、〆切は毎月十日とし、翌月の本誌に揭載す、但し俳句は選者の都合により六、七月は十五日〆切とし、其の次即ち九月號に揭載すべき分は、七月三十一日を〆切とし、爾後締切を揭載前々月末日迄とす、

本誌詞藻欄に投稿せらるゝ方は、左の書式によりて撰者に便利を與へられんことを望む

兼題和歌（もしくは短文、新體詩等）

題　　府縣名　　姓　名

歌ならば二行に、短文新體詩等も天地をあけて、字のあまりつまらぬやうに願ひたし

國郡町村名

右は兼題和歌の甲乙、短文、新體詩、兼題外の短歌俳句それ〴〵別の用紙に認められたく、又同じ用紙に二人またはそれ以上の名を並べることなきやうに願ひたし、用紙は葉書にても差支なけれど、相成べくは半紙に認めて、開き封（第四種郵便物として）にておくらるれば殊によし、



貴族院議員 文學士 男爵 千秋季隆君選

和歌兼題 梅雨

天

賤のをが田に引く水のあらそひも
此ころたえてさみだれのふる
東京 小島榮子

地

すだちするのきのすゞめの聲さへも
しめりがちなる梅雨のころ
旭川 佐藤光子

人

うなゐ子が蜆あさりしさとがはの
橋も落つべくさみだれの降る
甲府 名取正代子

秀逸

○○
さびしさは秋にもまさるさみだれに
しめりて聞ゆ山でらのかね
兵庫 田淵みき子

○○
山ばとの聲もくもりてさみだれの
ふる家の庭になしのはなちる
新潟 岩本芳子

、、○
五月雨のふる音たえてすゝかゝは
まかねの橋もうきぬとぞみゆ
東京 中島茂子

、、○
若葉かげをり〳〵鳩のこゑもれて
雨しづかなるまやでらの庭
越後 大石ます子

、、○
取いそぎさなえを植うる賤の女が
小笠の上にさみだれのふる
兵庫 田淵ふじ子

○　東京　林　鶴子
いにしへの友と語りてさみだれのともなき宿をくらすころかな
○　兵庫　梶原京子
賤の男の小蓑ほすへき隙もなきうらのしほ屋のさみだれのころ
○　佐賀　尾方綾子
そらすめる名も玉島の川なみもにこりそめたりさみだれのころ
○　東京　益田逸子
夏ひきのてひきの糸のうちはへてなが〱しひにさみだれの降
○　甲府　風間千代子
竹のこの軒よりたかく伸るまてふりつゝきけりさみたれのそら
○　東京　五十嵐濟子
たゆみなく降さみたれに水まして池のまこもゝなみのしたくさ
○　佐賀　尾方やゑ子
たれこめてはるゝひまなき思ひかなとふ人もなきさみたれの頃
○　東京　土田八重子
胸わたす淺瀬やいつら宇治川のせきゐもわかぬさみたれのころ
○　和歌山　村田濟子
しけりあふ木の下陰にたちよれはしつくひまなきさみたれの空
○　信濃　足立てる子
やうやくに晴れしとおもふほともなく降るを知らせの雨蛙なく
○　長崎　坂本てる子
けふもまた雲の行きかひさみたれてわひしさまさるたち花の宿
○　宇都宮　加藤菊子
雲間よりもれてうれしき月かけをまたもかくしぬさみたれの空
○　東京　河合濟子
ふしのまのをやみも見えぬさみたれに入えの芦も波のしたくさ
○　三重　米與とめ子
さみたれに川おとたかくみなきりていかたにさはる岩角もなし
○　東京　原三幸子

あかつきしときあらひ衣すゝぎてもかはくまもなき五月雨の降
○　東京　星野千代子
徒然のおもひをやらんかたもなしそらさへとづる心地のみして
○　相模　大谷津みね子
たきつ瀬のとゞろき落るひゞきしてさみたれしきるふもと七村
○　下野　高松雪子
里の子がかけし小川の丸木ばしふるさみたれに浮きてながるゝ
○　神奈川　鈴木まつ子
をやみなくふる五月雨にわか庵をいよ〱人のとはすなりぬる
○　磐城　木幡きよ子
生しげる庭の木たちもとしふりてむかしをしのぶ五月雨のそら
○　神戸　足立あさ子
天の戸は雲にとざしてみちか夜もあくるにおそき五月雨のころ
○　横須賀　柏原みな子
梅雨にぬれて折つるものを花あやめ添えて贈らむ歌なきそうき
○　千葉　瀧口まつ子
梅の實をひろひあつめてまゝことにうなゐせはしき五月雨の頃
○　東京　爾津梅子
五月雨のふりみふらすみ晴れもせて小くらき窓はいふせかりけり
○　常陸　岡田萬子
昨日今日水かさ増さりて飛鳥川ふち瀬もわかすさみたれのふる
○　下總　中川千鶴子
雲とぢてをやみあらせぬさみたれを旅路の人やいかにわひしき
○　清國　宮成梓子
ことし生の軒のなよ竹さみたれの露にふしつゝいくかへぬらん
○　埼玉　横田やな子
すみ田川つゝく綾せもいし濱もみえぬとしまのさみたれのころ
○　埼玉　横田政子
ほとゝすぎおのかさ月もさみたれてまつかせさむし琴ひきの山

○　東京　島村作子

降るまゝに垣根の梅もうみはてゝとふ人たえしさみだれのやと
○　東京　西村直子

山梁の花のちるまてふりはへてはれむともせさすみたれのそら
○　下野　井上倫子

ましはたく烟もしめり飼ふ駒のいなゝきゆるしさとのさみたれ
○　秋田　岡はな子

ふりくたす梅雨に色ますわかき葉やおつる栗もみとりいろして
○　東京　吉岡龜子

さみたれはいくか降らむ露と見し梅のみさへもうみはてにけり
○　和歌山　植木撫子

今日もまた軒のしづくの絶えもせて心さへにもはれぬさみたれ
○　越後　松永しけ子

晴るゝかと降りにし日数指折りておもふもわひしさみたれの空
○　東京　高野元子

やちまたに行かふ人のあとたえて晴まも見えぬさみたれのそら
○　東京　神田けい子

五月雨はいく日降るらむ庭たつみ日こと〳〵にふかくなり行く
○　東京　林瑕子

蟹小舟もやふ綱さへ朽つるまてひさしくなりぬさみたれのあめ
○　岩代　岸野常子

さみたれのいくよを旅にやめるみのもの思ふかすやのきの玉水
○　東京　小浦たか子

梅の實のなり〳〵おちて五月雨に文よむこゝろおとろかれけり
○　神戸　今西操子

茂りあふ軒のあを葉に露しけし降りみふらすみさみたれのころ
○　東京　高橋珍子

けふいく日ふるやの軒のくち柱こゝろもとなきさみたれのころ
○　北海道　牧君子

月かけをまたむよすかもなかりけりはれ間なくふる五月雨の空
ゝ○　東京　曾根靜子

世をわびて結ふみ山のくさの戸になほものうくも五月雨のふる
ゝゝゝ　埼玉　濱野ひて子

ふりつゝく梅雨のみ空に幾たびか出しては入るゝ旅ころもかな
ゝゝゝ　土佐　秋月應江子

あまきみの說經しつけきおくにはの牡丹くづれて五月雨のふる
ゝゝゝ　東京　青木たま子

五月雨の日をふるまゝにいけ水も魚見えぬまてにこりはてけり
ゝゝゝ　三重　大西くすよ子

風そよく若葉すゝしく梅雨晴れてゆふつきはほふ川つらのやと
ゝゝゝ　常陸　堀光子

五月雨に軒のしつくのはれまなくうめにはあらて[illegible]朶つるかな
ゝゝ　埼玉　横田秋子

波あれてはせつる舟もおこたりぬつくたの沖のさみたれのころ
ゝゝゝ　朝鮮　原野みき子

五月雨のふりてふる家のいふせきに池のあやめの白きをめてぬ
ゝゝゝ　神戸　高嶺ゆき子

こゝろなく唯かりそめに彈く琴のしらへつたなきさみたれの軒
ゝゝゝ　千葉　佐久間いち子

さみたるゝ庵に栞ひとこゑすなりいつかはれ間の月も見えんと
○　神戸　足立ゑい子

影うつす水もにこりてかゞみ山くもるもひさしさみたれのころ
ゝゝ　秋田　古瀬惟子

まれびとをもてなし盆の菓子までもみるまにしめる五月雨の空
ゝ　伯耆　錦織さち子

なく乳兒をすかしながらの軒のつま竿のほしもの握りては見つ

和歌兼題　撲螢

天

はからずも君が門まできつるかな里川つゝみほたるおひつゝ

岩代　岸野常子

地

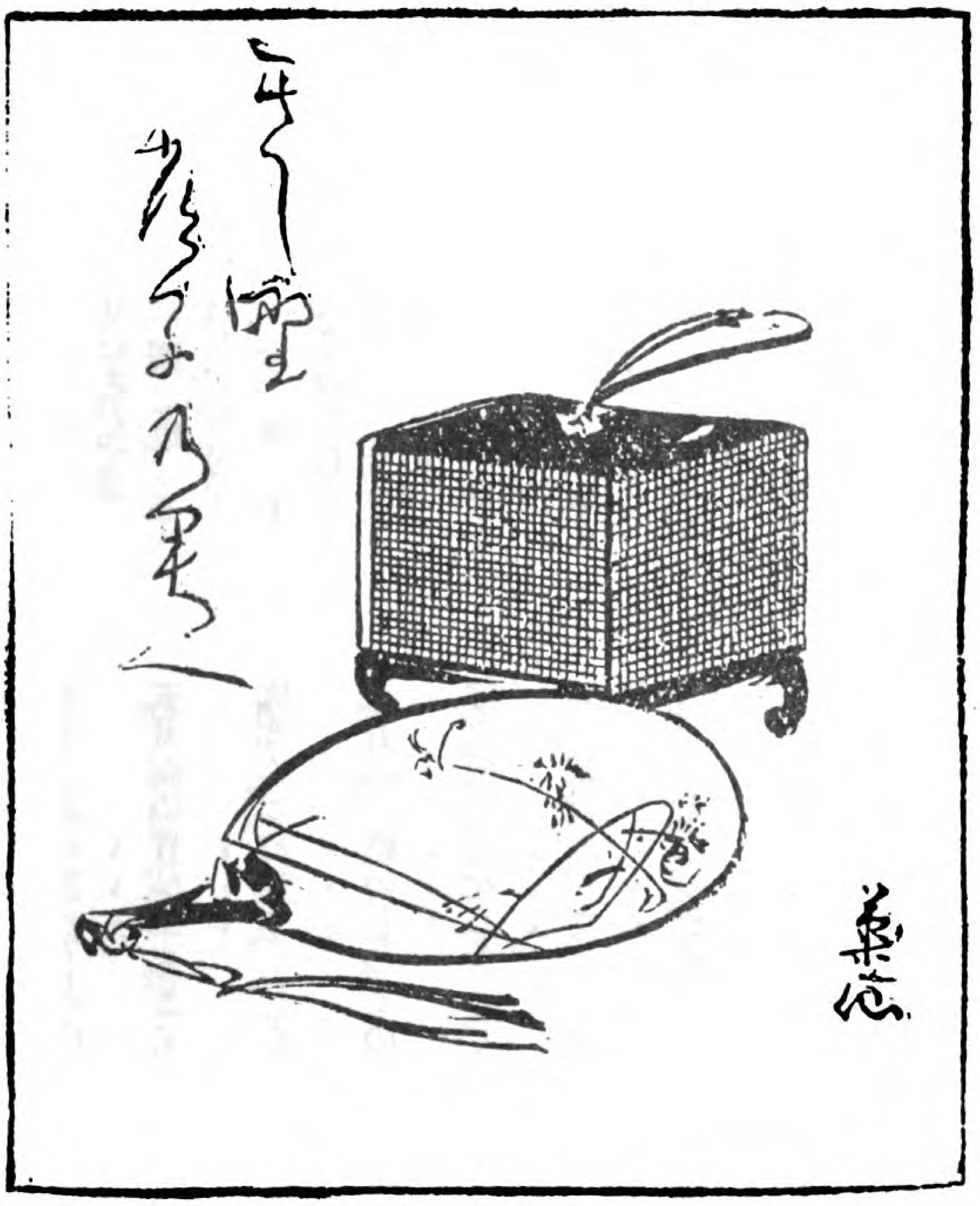
うなゐ子がうちしわふきの風もれてひよくへ高く行くほたるかな

東京　原三幸子

人

小さゝもてうては露おく草むらに玉とまがひてちるほたるかな

佐賀　尾方綾子



、○をとめ子がうちし扇の風それてすゞしの袖に入るほたるかな　東京　小島榮子

○うちはもて取らむとすれば水の面にとびてゆたかに行く螢かな　東京　土田八重子

さ夜ふけてひとり書よむ窓の邊に光るを見ればうちもやられず　下野　高松雪子

○ほたるとぶ小川の流あざやかにおひかくる袖になつの風ふく　常陸　堀光子

○追ふ子らのかこみをぬけて川一重かなたに高くとぶほたるかな　千葉　瀧口まつ子

○川なみのよるくへ出てゝ少女子の涼みがてらにうつほたるかな　常陸　岡田萬子

○文の道てらせとのみそ祈るなる螢はいつか籠にみちにけり　長崎　坂本てる子

○夕風にたもと吹かせてうなゐ等が螢追ひつゝ野べにあそべり　新潟　岩本芳子

○うなゐ子がうちしわふきの風うけて雲井はるかに行ほたるかな　東京　五十嵐清子

○さとのこがうちはの風やのがれけむ川上とほくほたるむれとぶ　東京　高野元子

東京　吉岡絲子

うつ人のあふきのがれて中空のかぜにふかれてゆくほたるかな
○　東京　西村直子
あらそひてまれくあふきの下風に川むかふまてゆくほたるかな
○　下野　井上尚子
撲ちにしを螢はとひて繪うちはのかせになひきぬきしの青やぎ
○　埼玉　横田秋子
籠に入てかへるうなゐに物とへばあの川わたりほたるとひかふ
○　東京　島村作子
うちまれく乙女の袖になひかぬは誰にこかるゝほたるなるらん
○　三重　米奥とめ子
雨晴れてほたるみたるゝ川の邊にあそふゆふべは夏としもなし
○　旭川　佐藤央子
神さひし池のみぎはにとふほたる里のうなゐらうちそわつらふ
○　神戸　足立あさ子
宮城野のあさゞは水にあさからぬ契りやはあるむれしほたる火
○　伯耆　錦織さち子
手にもちし團扇は露にそぼちつゝうちたるほたる星のごと見ゆ
○　東京　青木たま子
うなゐらがはらふうちはにそこはかとみたるゝ玉は螢なりけり
○　東京　林黠子
空たかくほたる飛ぶ見ゆ涼みするひとの團扇やいまのかれけむ
○　東京　林環子
うつしくもゆる螢のかずしくにうつ手たゆたふこのゆふへかな
○　東京　高橋珍子
をとめ子がうちはの風そ声間より玉とみたれてとふほたるかな
○　佐賀　尾方やゑ子
いさゝ川流るゝ星はたをやめがたもとにうちしほたるなりけり
○　甲府　名取正代子
追行けは川の中州におちのひてうしろやすけにとふほたるかな

○　横須賀　柏原みな子
乳母が背にいつかほたるのうたやみて草に落ちたる絹團扇かな
○　東京　曾根静子
野はら咲き夕月かほるいさゝ川さとの子むれてほたるうちかふ
、、、　磐城　木幡きよ子
家つとゝ袖にほたるを包み來しよるのにしきもまばゆかりけり
、、、　埼玉　濱野ひで子
濡あみして木影にすゞむほどなれやとひゆく螢手にて撲ちけり
、、、　清國　宮成梓子
うたばやとおもふ秋の風それてみきはのほたるいつちいにけん
、、、　和歌山　植木撫子
夕されは里川づたひあくかれてたもとすゞしくおふほたるかな
、、、　越後　松永しげ子
河かぜにみたるゝほたる追ひにけり袖にかつ散る露をはらひつ
、、、　埼玉　横田政子
まうで來る人はかへりて江の島の岩やつたひをゆくほたるかな
、、、　埼玉　横田やな子
夜をふかみ人影みえぬ野の花のとり居くゞりてとふほたるかな
、、、　土佐　廣江子
乙女子の團扇くゞりてみそらゆくほたるは星をしたふなるらむ
、、、　神奈川　中島茂子
乙女子がうつにまかせてまたもゆる螢やむれをこかすなるらむ
、、、　秋田　古瀬惟子
草のはにすかる螢をかりいてんこをおもふ親のやみにまよひて
、、、　東京　星野千代子
田のあぜも人足しげくなりにけり夏のほたるの出づるまにく
、、、　神戸　足立ゑい子
螢火の燃るかけをも消しぬべき撲つ手に月のさすぞつれなき
、、、　大阪　木村春江子

うつとみしたもとをもれて小野のはら露ちる野邊に螢とぶなり　千葉　佐間久いち子

草ふかき小川にほたるまれぐ子はみやこ大路もおもはざるらん　甲府　風間千代子

うなゐこか打や扇をのかれつゝひかりかくしてとふほたるかな　小樽　牧　君子

まだあさき青田の風にうつろひて影かすかなる夜牛のほたる火　神戸　今西操子

たちばなの花ちる里のゆふまぐれふりわけ髪はほたる追ひつゝ　三重　大西くず子

○いもをとのすさびはづれしほたる來て青くてらしぬ我歌ぶくろ　東京　照内せい子

ほたる飛ぶ里川つたひ來て見れば闇もこよひはうれしかりけり

短文

天賞

新緑　相模　大谷津峰子

はつ夏の空しめやかに、夜來の降雨やめば一と際目立つ青葉若葉のにほひ、さながら夢の樣、向ひの小岸にはゆく春の仇なる宿りとも知らで、尚花にあくがるゝか、胡蝶の羽袖、折りふしの風にヒラ〱と迷ひゆく、

地賞

友の心　東京　禰津緑葉子

懐しき浪子樣より、久々にての御たより、いとゞ嬉しう封ひらけば中より出づる菫の花三つ五つ、濃紫の色幽しく、香りも尚ほ高し、實にやさしの姿よ、親しき友よ願はくは、こを妾か心とおほしてよ、といつもながらの筆のあとの清らかさ、

人賞

渡しの五月雨　常陸　岡田萬子

水嵩増す入江の葦に鳴く行々子の聲もしめりて、昨日も今日も時間なく降りしきる五月雨に、鴎の浮巣も流れ出づべし、今し翁の簑笠しとゝに濡れながら、濁る淵瀬に棹さすは、渡守にやあらん、ふと彼方を見れば、聲も及ばぬ遠岸に、イむ傘の二つ三つ、あはれ舟待つ旅の人にや、

、、〇雨後の庭　　和歌山　植木撫子

花は散りすぎ、鳥は古巣にかへれる、この頃、昨日より降り出でたる雨、すが〳〵しく晴れ渡り、前栽の若葉、恰も緑したたらんばかり、幾多の瑠璃の玉をつらね、今しも山の端よりのぼりたる、月影斜に庭を照し、そよ吹く風にゆられ、飛石にくだけて光をはなつ、一滴、二滴、

、、〇をりにふれて

松山　田村多豆子

世の人の心はかりたのみ難きはなかるべし、むかしより櫻の花のさくかと思へは、やかてうつろふを歎きしもさる事なから、實に〳〵、人の心ぞ風も吹あへぬ、とよくも歌ひ出るものかな

、、〇逝く春　　和歌山　島田千代子



花落ち水流れて九十の春光も早や名殘少うなりにけり、昨日と暮し今日と明して、山に川に野に原に遊びくらし花の數々、ながめもあかぬを、清明は我をすてゆきて、春の日は早やいぬめり、我友とせし蝶や小鳥はいかに暮しけん窓前雨細うして春愁の深きを如何せむ、

、、〇敏ちやん

岩代　岸野常子

敏ちやんは京人形を抱いたまゝ、いつのまにかスヤ〳〵と寢てゐる樣子、暖かな正午(ひる)さがりの日影が一ぱいに桃の木の影と蝶の影とを映した障子の外には、何に戯(じや)れてか玉(猫の名)の鈴音が優しう聞える、どこかに長閑な飴賣の太皷の音がして、枕元の風車が獨りクル〳〵と廻つて居る。

〇杜若　東京　神田けい子

蛛手に流れし八橋の名殘なるらむ、板は朽ちて半泥に埋れ、杭は浮ひて水草の根さしとなれり。岸の枯蘆水の面に蔽ひかゝり、古りたる落葉は漂ひて、池の面は荒れまさりぬ。其中より氣高くも立てる杜若、實に色ばかりこそ、昔のかたみなりけれ。

〇田舍の夕　下野　井上倘子

夕燒の空に日光の諸山は際立つて浮繪のやう、產砂の森の公孫樹に鳴きよる小鳥は、くるゝ日を讃するかの如く、菖蒲さく小川に米とぐ男の手が黑いので米がくつきりと白い、山歸りの女が通る、青田ふく風が凉しい、どこからか鄙唄がきこゆる、

〇若葉の露　神奈川　鈴木まつ子

朝雨は名殘なくはれて、青葉に渡るかせ、えもいはれすこゝちよし、まさし朝がほの芽ばえも、いと愛らしくみるうちに、いてふの若葉に、つゆのかゝれるが、いとうつくしくて、きゆるまでもはらふことのをしまれてなん、

〇ほたる　長崎　坂本てる子

まし水のせゝらぎ清き小川のほとり、とびこふ螢の五つ六つ、ちりの世照らせよとての、神の使か、あなあやし、

〇蝶　常陸　堀光子

曇りも果てず、日の光りぬるう射し入る樣に、何心なく立ち出て見れは、畑の黃金の花は跡絕えて麥靑く桑の葉のしげきを見る、庭の片隅に未だ咲き殘れるすみれの花に、愛らしき、又いぢらしくも見ゆる蝶の止れば、ふら〳〵と動くに、心落着ざりけん、又とび、又とまり、幾度か繰返しつ、遂に高く飛びて、櫻の靑葉の森に靜にねむれり、「アヽ蝶よ汝は此櫻の花の咲こほれる時、其美しき翼、愛らしき姿にて、舞ひつ狂ひつ、花に一しほの風情を添へたらめ、さるを榮華の夏は永からず、何時か嵐に花はうつらひ、香はうせぬ、今は舞ふにすべなく、狂ふに花なし、五月雨の期も近づくに、汝は如何にかすらん、あはれ蝶の全盛も一夜の夢とすぎにしか、

、〇花曇　越後 大石ます子

月、朧に霞めり、
今宵しも、花の七日、花の幕き引て、はては、たゞ夢の如、ほろ〳〵と散る櫻の吹雪、花の下蔭、紅ぼんぼりの、おやうけに明、又滅、誰れに泣けよの三味の遠音か、折々散らす撥の冴え！

、〇鶯籠　越後 大石ます子

鄙びたる小障子、連翹の影のぼれり、蒔絵の鳥籠桃嫉む樣の緋總、京振りのいと、相應ひつる哉、筆おきて、朝の餌、晝の餌、若腕の丹精すゞろ鶯の身に染みてや、さへづりの妙に、神にかよふよ、
我は、歌の卷紙、細き手に、そとのべやりつ。

、〇折にふれて　下野 高松雪子

雨呼ぶ池の蛙の聲にぎはしく、汀に咲ける白藤の末長う水の面につき、そよ吹く風に波打ち寄する樣の、實にたとへんやうもなくて、筒井筒振分がみの其昔、姉よ妹よとむつましう、露子の君と、此處にて、ゆかしく匂ふその花をとりて、まゝごとなして遊びたる其かみを、そゞろに思ひ出でて何となうなつかしう、はたかなしう覺ゆれ、あはれなつかしき其友や今いづこ、時を違へず花は咲きぬるを、あゝ君に再び此世にて見ゆる事のはや得叶ぬか、いざや手折りて、せめては御墓に手向けん、

〇螢　三重 大西くすよ子

我が身を忘れて、丸木橋を渡つた。
柳の枝を團扇で寄せろと、螢がゆら〳〵つと下へ落ちて、青く光りながら流れて行つた。

〇苗代田を見て　埼玉 濱野ひで子

「カラコロ」と聲の限りに鳴きしきる蛙をおどかして、おり立つ田子の蒔きけむ米の粒、愛土の惠みにもれて、綠の木末若やかに現しつ、
村の田吾作翁、若子の安否きづかひてか、朝な夕なの暇々には、必ず訪れ來て、水の掛引に餘念もなし、
あゝ賤の男が腕に育てらるゝ此早苗こそ、げに〳〵五千萬同胞の命の本なるぞ、
名におふ瑞穗の稻も、之なる哉之なる哉、

〇夏夕　上野 吉田靜子

池に沿いたるあづま屋に、紫薫る房も床しき岐阜提燈の光淡く、柳の枝に結ばれし、水に黛蕊染出たせる短册、墨の跡新らしく、匂ふもうれし、甘き露に飽きたる螢は、汀に茂る草間より、清き池上に三ッ二ッ、

、○折にふれて　群馬　小暮柳子

朝の快きと共に嬉しきは、是より後夜の樣にて候はずや、夕立通り過ぎし後、洗ひ出したる一痕の月懸れる、涼味更に謂きず候、たとひ月はなくとも、入浴して、糊硬き浴衣身に纏ひ、門に立ち出なば、風は柳の梢より起り候て、そよ〳〵と面を撫でつべく候、此の時の心地全く蘇生したるが如く覺ゆるものに候

○妾の妹　越後　松永しげ子

此頃の菜の花今を盛り、甘き露をなめ、高き香に醉ひ、花に眠り花に舞ふ、幾群の胡蝶、黄白相むつるゝを、妹いつか伴ひ來りけむ、吾が紅皿になとたる砂糖を胡蝶に與ふ、如何に味よけむ、肥肉の掌より今し吸ふ、妹曰く「姉樣妾妹にしたのです」

○郭公　紀伊とく子

文机によりて、今日さしたるばかりの、瓶の菖蒲を弄び居りしが折しも、さやかに名のる郭公の聲に、直に雨戸くり明けぬ、時は恰も三五の宵にて、今しがた向ふの山より登りたる月は、松が枝にかゝりて、皎々と照り渡れど、今聞えし聲は少しもなく、何時まで待てども影だに見せれば、いと本意なくて伏戸に入りぬ、されど尚眠られでありしが、又一聲高く泣きて過ぎぬるに、あなにくや待てる時には來らで、と思へど、又去ぬるを告ぐると思へばいと愛らし、

○田舎の春　信濃　足立てる子

こゝかしこに咲き出でたる、梅さくら、遠山の雪とまがふばかり七ツ八ツなるをとめ子の、歴もあらはな筒袖に、藁草履はきたる二三人、悠々と流るゝ小川の岸をたどりて、餘念なき摘草、彼方の岡には三四人の花見連、木綿の紋付羽織着たるは、其土地の資産家の主人と見えしが、互に心おきなく語りあふ樣、虚禮、虚榮の露ほどもなき、田舎の春こそ眞にうるはしけれ、

○新茶　東京　土田八重子

今朝實家よりの小包何かと開けば薫りも高き新茶、姑の君は他にもましてにこやかに、「何よりの好物」とよろこび給ひぬ、妾も又母上の御機嫌よきにいとうれしく、朝餉の膳に向ひぬ、此のぶんならば、かれて實家へ一夜泊りの願ひもきゝ届けられさう、

○未來の東京灣　東京　高橋高子

遠く房總の山々を斜めに見る、第一錨地の邊り、安藝、最上、利根、伏見の諸艦、瑠璃紺青の大空に翩々として旭日旗を靡かせ、威風堂々として、港内を睥睨しつ、棧橋一里、東洋無比の防波堤は、蜿々として凹字形をなし、百の巨舶、千の帆船、港内狭しと輻輳しつ、黑煙を吐くもの、白波を蹴つて來るもの、去るもの、駛するもの、艀は織交ふ如く、當時天下の富の集散場たる東京灣頭も、渺々たる台場に釣鐘の大砲のせし昔を思へば、いとなかし、

、、○朧月　韓國　原野みき子

春の女神のもすそをたれ給ひたらん如き、濃き紫の夕雲に、今こそ夜の姫神は天降り給ひぬ、平和なる春の御空は、小羊の步安らかに眠れるに似つらめや、なよ風に梳けずらるゝ青柳の糸誘はれて、出て給ひしや、時を得顏の緋櫻の枝に、朧の月姫ホホと笑み給ひぬ、

、、○鐘　越後　松永しげ子

いつの頃よりか此の鐘てふものを用ゐけむ、えしらねど、あはれに又面白きものなるかな、その音

の濁れる清める、いつれもをかしからぬはなし、かの春のあした、夕べ、霞がくれに御寺の堂のいらがのみ見えて、其のあたりよりひゞきいでたる鐘の音。偖からずや、花見の折、あるは紅葉狩の夕べ、はしなく告ぐる鐘の音、まだひゞかでよと願はるゝもをかしや、月も冴え渡る夜、犬の遠吠の淋しき夜半のひゞき、腸を斷つの思ひす、短夜の曉告ぐる鐘の音、心からにや眠けなり、夕立したる後、なほ木々の雫の殘りけるに響き出し音、心もすかすがし、雪につけ雨につけ、風あらし、朝夕、時こそかはれ、いつれもをかしきは鐘の音なるかな、朝は勇しく、夕べはあはれなる、まして病の床に呻吟したる折は、殊にあはれに感じ、野邊のおくりの鐘は涙を催さしむ、されど讀經の聲などにつれて、小さき鐘のひゞき來る何となくおくゆかし、されど暖き夢を破る半鐘の音は、胸をつく思ひす、古里に在る折はまたしも、遠き里に在らん折は……わぢさひの花、雨にぬれにし夕べなり出でし鐘の音に、心引かれてかくはものしぬ、あはれ深きは鐘の音かな、

○噫軒端の紅梅　陸奥　堀口ふじ子

吾が叔父君に一人の童女あり、發世子と云ふ、天資温順にして、いと愛らしき嬰兒なりき、思へば去歳の告天子鳴き、胡蝶飛びて長閑なる春の日、漸く歩み初めしより、四ヶ月ばかり經し、嬰兒の手を引きつれて、己が軒端の紅梅の樹下に遊ばしめけるに、ひら〳〵と飛び散る梅の花を、無心に拾ひては捨つ、その無邪氣に愛らしきは、神遊とやいはん、

またしも長閑なる作に遇ひ、己が軒端の紅梅は、時をたがへぬ春風に笑へど、樹下に來り落花を拾ひし嬰兒は今いかに、彼の嬰兒は落花を拾ふに厭きしか、あらず、あらず、花の如く愛らしき嬰兒は、病魔にかゝりて、ことし一月の初に、哀れ〳〵僅か二歳を一期とし、果敢なくも永き眠に就きにしなり、軒端の紅梅は爛漫として枝も撓はゝに咲けり、春風は枝より枝を吹けり、されども花の如き嬰兒の面影はまた見るすべなし、この紅梅を見るにつけても、涙自ら流れぬ、伐截せん哉軒端の梅花、伐截せん哉軒端の紅梅、噫、

○國民の記憶より忘れられたる戰傷勇士　越後　岩本芳翠子

日露交戰の當時にありては、戰傷者に對する國民の敬意、同情は實に其の極度に達し、あらゆる手段をつくして、そが慰藉に努めたりしが、平和克復と共に、死者遺族は、夫々恩典に浴し、生者は各自の戰功に准じて、胸間に勳章を輝かし、國民亦戰後の經營に餘念なきの今日に當り、全國各地の官設病院に殘留せる、名譽の戰傷者の、氣息えん〳〵たるものもしくは、終生の不具者たらざるべからざる者あり、茲に國民の記憶より忘れられたる、不幸なる戰傷勇士、左記の二氏新潟縣北蒲原郡新發田衛戍病院にある

た、諸姉の君に紹介す、

◎歩兵十六聯隊八中隊附後備伍長齋藤與喜藏　腹部貫通銃創、三十七年十一月二十八日旅順背面二〇三高地に於て負傷、内地へ後送、三十八年十一月十二日新發田豫備病院へ入院、

◎後備歩兵十六聯隊第五中隊一等卒志田松吉　左大腿盲管砲創齋藤伍長と同日二〇三高地に於て負傷、三十九年一月十七日、新發田豫備病院に入院、

志田松吉氏は、新潟縣中蒲原郡新津町出身、歳三十二、戸主にて家に妻子あり、

齋藤伍長は同縣北蒲原郡加治村、早道場出身、歳三十三、家計甚だ寬ならざる上、六十餘歳の親及妻子あり、志田氏の傷所は日を追うて快方に趣きつゝ有るも、齋藤氏は何分重傷の事とて、日に衰弱に陷れり、到底今日の場合全癒の見込なしと、諸姉の君よ、不幸なる勇士に對しては、感謝の辭を致し、又家族の方々に慰藉の情を寄するは、我々の義務ならとん存ず、取分將校婦人會の方々及愛國婦人會の方々に、御盡力くださる樣希望に堪へず、

大石ます子氏の慣用手段

晃南女史

初夏の候、貴社益々御隆盛奉賀候、陳ば本月發行女鑑誌友欄に於ける越後大石ます子の新體詩「信濃河畔」は端書文學第三卷第七號の南品川西野森江君の「六鄉河畔」と同作にて只六鄉と信濃の二字相違あるのみ、一度ならず二度迄も斯る行爲に出る大石君のあさましさ、實に歎はしきことに候はずや、編輯局に於ても充分の御取しらへあらんことを願上候、かゝる事記者閣下に通ずるは、ニガ〳〵しきことながら、こは誌友欄の體面を重じての事なれば、宜しく御諒察あらん事を、伏して願上候、終に記者御一同の、いよ〳〵御健全にて健筆ならん事を祈り上候

新體詩

地賞

農家の夏　　下野　井上倘子

梅雨にしめりて吾肩に　重きみの笠ぬぎすてゝ
花ふさ長くさかりなる　藤だな下にゆあみして
竹の小椽にひねもすの　つかれ忘るゝにごり酒
山海の珍味あらずとも　けふ植ゑをへし八反の
青田眺めてをさな子の　笑顔をみれば事は足る
すべて自然の山さとに　淸き空氣にかこまれつ
蛙の歌に耳かして　青田ふきくる風うけて
黑髮やまにむかふまは　王者に似たるおもひ哉

入賞

殉難看護婦　　常陸　岡田萬子

眠る御魂も靖國の　社の神と祭られて
大和武男と諸共に　國の鎮めと仰かるゝ
嗚呼壯烈の看護婦よ　心の色の紅は
櫻の花と咲き出て　幾春かけて匂ふらん
木の下蔭にさまよひて　並ふ戰利の紀念品
大砲小砲水雷に　其花片のちら〳〵と
散るにつけても思ふ哉　陸海軍の武夫か
愛し妻子を顧みず　皇御國の御爲と
戰の庭に走せ向ひ　彈丸は霰と降る中に
敵に後を見せしとて　深き痛手に病む時
玉の腕をさし伸へて　卷く綳帶の白妙も
唐紅に染まりつゝ　流るゝ血汐包む時
鬼をもひしく武夫も　熱き涙の湧き返り
天つ使と仰きけん　大海戰のありし後
火砲の響靜まりて　煙も消えし海原を
照らす月影物凄く　病院船の床の上
更行く波の音聞きて　夢は故郷に走する時
白衣の姿美しき　愛の御神を如何に見し
敵と味方の區別なく　仁愛こむる赤十字
か弱き女子の身なからに　任務は重し國の爲
斃れてやまぬ魂は　なと益荒雄に劣るへき
眠れ御魂よ永久に　花の顏散りぬとも
譽れは高き七重八重　九重迄も匂ひぬる
いさぎよき哉あはれ其花

、、○水上夏月　　和歌山　植木撫子

みそらに高くすむ月の　ひかりをたゝむ水の上
吹きくる風にゆら〳〵と　こがねの波を打よせて
くだくる月を眺めつゝ　柳のもとにたゝずめば
しつ枝の露のをり〳〵に　かゝりて凉し夏のよや
折りしも過る雅人の　いとも妙なる笛の音に
つきぬ思を行く水に　流してかへる月のよや

、、○逝し春　　土佐　廣江子

暮れ行く春の悲しさに　みたるゝ髮をかき上げて
夕の野邊を逍遙へば　果敢なき色に散る花の
末にも似たるうつし身や

ほゝゑむ花をつゝみたる　運命說きしは誰ならむ
裝ひ若く忍び音の　淸きをほこりし思ひ出の
つらさは何れ劣らじな
あせし花瓣口つけて　何今更の淚なる
悟ればあはれならはしの快樂うたひし世も人もか
かくてぞさむる夢なりし
さもあらばあれ夢の世の　花永遠に秘むる共
うつるに早き月影に　ひきてぞ細き我かげの
いつかはもとにかへるべき

〇曾我兄弟　神戸　足立あさ子

「幾代かをりし菊の名の。曾我のむかしは秋ならで。頃は皐月の末つかた。富士の裾野のみ狩場に。出るぞ猛きはらからは。夫といはねど垂乳女に。盡ぬ名殘のをしまれて。夢かうつゝかしらま弓。引きはかへさじ益良雄の。名をば高嶺にあげにけり」

〇友を思ひて　大分　佐藤家子

長き春日もくれはてゝ　高ねにひゞく山寺の
かねの響もあはれなる　やれし垣根に只一人

君をしのびてたゝずめは　月もかすめる大空に
友よび交はす雁の聲

〇朧月夜　越後　大石ます子

笠にやすらむ月姫の　若葉櫻のおぼろ夜を
庭をめぐりて垣近き　小女の歌の靜けさに
禰宜も淸めしおん庭の　散れる櫻を集めては
今宵も焚ける火煙に　霞み初めたる欄干や
淋ひけりな丹塗欄干おほどかの
花も參らぬ夜とぞ思ふに
彼にはあらじ八重咲を　帶する枝のかよわくて
なびき易なる欄干の　丹塗の色や褪せぬらむ
ゑまひ心地の薫りにて　夢むとしもにあらねども
をばしま通ふ黑髮を　佐保姬とこそ思ひしか
まろび寢醒し夢の如　花見がてらの思ひでに
帶せる笛をいや吹けば　春雨まがふ糸ざくら
その花吸うて歌うたふ　少女心の花に似る
夕とばかり思ほへば　又花吹雪く八重糸櫻

〇祝友鑑　兵庫　田淵ふじ子

雲かとまがふみ吉野の　櫻をおきて花なしと

人は云へどもさにあらず　高雄の山のからにしき
紅葉をおきて色なしと　人は云へどもさにあらず
櫻花にも紅葉にも　ましてめでたく麗しき
人の想の花もみぢ　植ゑ並べたる此園の
さくらにまさる櫻なく　紅葉にすぐる紅葉なし
いざ思ふどち諸共に　この御園べにつどひきて
うたひはやせやこの櫻　めでたゝへよやこの紅葉

、〇折にふれて　　下野　高松雪子

春の心に誘はれて　其身は蝶にあられとも
きのふは東今日は西　うかれ遊びし時過きて
雲か雪かとめでられし　名所の花もいつしかと
あとなく散りて野も山も　みどりの衣とぬきかへぬ
我日になれし此旦も　又一しほのなかめ添へ
木の間に見えし草ふきの　ふせやも見えずそこかしこ
見渡す限り小山田は　心をこめてつくりにし
其人々の稲見せて　青き波こそ打ち寄すれ

、〇春の暮　　東京　星野千子代

春は落花の恨さへ　やる方なけのおはしまに
獨りたゝつむ夕まくれ　ちにむせかへる一聲の
山ほとゝきすやみを破れる

、〇夏の夜　　東京　禰津綠葉子

星の寶等乙女等か　小笹うちわとりとり／＼に
小川のほとりこゝ彼處　螢追ひせし影もなく
中空高く照り渡る　月の光も清くして
涼しく更けし夏の夜の　ふき來る風も心地よし

、〇梅　花　　陸奥　堀口ふじ子

春のみかみのみ惠に　あひてやうやく咲し梅
手折らんものと爭ち上る　罪なき童兒のうたてさよ
梅はしつかにいひけらく　やよやわらはへ今しはし
折らすしてたべ己か枝　思ふかまゝに咲かしめよ
色うるはしく咲き匂ひ　世のあてひとにめでらるも
今宵嵐の襲ひなは　やかて散らなんわか身なり

、〇友　　神戸　足立ゑい子

むつみ語らふ交りや　いつまて草のいつまても
變らぬ人のこゝろこそ　友となる身の寶なれ

、〇夏　夕　　東京　平塚白百合子

せゝらきゆるゝ森かけを　小草に夢のひゝきして
きよく流るゝいさゝ川　夕風かるふさや／＼と
うすき秋に入りにけり　山の端いてし新月は
しづかに高くかゝやきて　水澄虫ひとりくる／＼と
胸にしみ入るすゝしさよ

〇夕の思　　大阪　木村春江子

雲のはたれにもの思ふ　こゝろにひゝく入相の
鐘の音遠くうちけぶり　露まさりゆく袖なれや
幸をはれたむ鵬神　いつか我家におとつれて
杖とも頼む父君を　よみの國へと誘ひぬ
露けき袖のまた乾ぬに　うきよの嵐吹きすさひ
黄金の花を枯らしつゝ　圓けき夢を破りけり

富にあつまる人こゝろ　朝に夕に音つれて
閉つるまもなき門の戸を　今はおとする人ぞなき
昨日の佛今日の鬼　頼めど甲斐もあらばこそ
日頃手なれしもの迄も　とりいてゝゆくうしろかげ
さかりの春は夢とすぎ　憂になれし今日の身の
貧にやつれし我姿　いかでうしとやなげくべき
浮よの塵にまだしまぬ　はしき二人の妹が
其行末を思ほへは　はらへとおつる涙かな
思ひは同じ母上の　色にないてぞ昨日今日
笑顔をよそほひ玉へとも　みるたひにます波の數
あゝ母上と妹を　思ふ心の涙にぞ
二つの袖をしぼるなれ　神よあはれみ玉ひなば
幸なき母と妹に　とはの惠をたれませや

〇鐘の音　　埼玉　濱野ひで子

落花の雪に踏みまよひ　櫻狩せし夕まくれ
塒求むる群鳥の　聲さへ悲しき折からに
獨り過行く森の影　何とはなしに淋しくて
心は千ゞに亂れつゝ　暮れ行く空をながむれば
片山寺の鐘の聲　諸行無常と聞ゆなり
あはれかなしや森の鐘　きくもわびしや鐘の音

短歌

天賞

春風　　長野　上條つね子

菜の花にねむりてむすぶ蝶の夢
さまさぬほどに吹けよはるかせ

地賞

梅雨晴　　東京　河合清子

さみだれの雲は晴ゆく大そらに
はやくもわたす虹のかけはし

人賞

水鶏　　常陸　岡田萬子

夕つき夜やなぎの影に見え初めて
いさゝ小川にくゐななくなり

秀逸

〇〇春夕　　千葉　秋葉八重子

鹿ねむる春日すぎ山あめやみて
はるのゆふべは鐘のこど暮れぬ

〇〇夢　　横須賀　松下勇子

さめてこそ思ひの種となりにけれ
かりそめならぬ夢のうき橋

〇〇友の墓參して　　宇都宮　加藤菊子

おくつきに手むけし水はすくなくも
友はくむらむ深きこゝろを

ヽ〇首　夏　紀伊　とく子

朝なゆふな花にいとひしさくらにも風なさへまつ夏はきにけり

ヽ〇首夏の夕　東京　土田八重子

[illegible]にいま灯や入りし庭の面のわか葉のみどりいろまして見ゆ

〇初時鳥　横須賀　柏原みな子

咲きのころ花もやあろとたづね入ろ山路にきゝぬ初ほとゝぎす

ヽ〇郭公一聲　東京　原三幸子

月影ものぼらむとすろ山のはにひとこゑたかくなくほとゝぎす

〇旅中杜鵑　磐城　木幡きよ子

旅ごろも日數かさねてほとゝぎす聞きつゝたどろあしがらの山

〇早　苗　神戸　今西操子

みわたせば小田も山田も植ゑあまろ早苗の色のたのもしきかな

ヽ〇螢　神戸　足立ゑい子

なつ川のよどみにしげろうき草によろ咲く花はほたろなりけり

〇雨中螢　大阪　木村はろえ子

さみだれてあやめもわかぬ闇なれは螢よのべのみちしろべせよ

〇花菖蒲　東京　神田けい子

水の面は茂ろみくさにわかれどもかをろあやめの花はかくれず

ヽヽ〇閑居新樹　神奈川　鈴木まつ子

とふ人のたえにしいほもそよ〳〵と青葉にわたろ風はありけり

ヽヽ〇夕蚊遣火　東京　島村作子

きえのころ霧かと見えて蚊遣火のけむりに暮ろゝ山もとのさと

〇梅雨晴　東京　益子逸子

さみだれはけふやかぎりに晴ぬらんみどりの空に雲のたちまふ

ヽ〇行路夏草　兵庫　田淵みき子

ころもてにほたろすがりて夏の夜は草のこみちも嬉しかりけり

〇避暑　埼玉　横田すま子

[illegible]むすびひろ泉はすれとなつの日のあつさも夢もたゞ長くして

〇梅　花　陸奥　堀口ふじ子

軒の端の今朝咲き匂ふ梅が枝にこゑうろはしくうぐひすの鳴く

ヽ〇山早蕨　松山　田村多豆子

うれしさなさくらの花になりそへて家つとにせん山のさわらび

〇菜　花　秋田　岡はな子

ちごおひて西山あたりきてみればゆふ日なゝめに菜の花かをろ

〇川　霞　埼玉　安部とみ子

ほの〴〵と暗ろゝ霞のあひたよりゆき通ふ舟の見ゆろのどけさ

ヽ〇山　吹　新潟　岩本芳子

やまぶきのこぼろゝかげのいさゝ川あらふ給筆に月はくたけぬ

ヽ〇藤　下野　高松[illegible]子

住む人のあろとも見えぬかやの軒にかゝりてにほふ藤なみの花

〇同　北海道　牧君子

しげりあふ青葉のなかにふぢの花春のなごりのゆかりとゞめて

ヽ〇山許藤　下野　井上尚子

[illegible]樫のくちしはしらにまつはりてさびしうさけろしらふぢの花

〇落　花　静岡　内山たよ子

親とりのせなにはかひにたはむろゝ雛のにはとり花ふぶきする

ヽヽ〇逝　春　土佐　廣江子

いづかたと行衛もわかず春ゆきぬわれにかたみの花もなくして

ヽ〇折にふれて　三重　米奥とめ子

わか屝ふみやこの人に身のうきをかたりきかせよ山ほとゝぎす

ヽ〇同　越後　松永しげ子

はてしなき思ひは胸にひめおきて死なば血になく鳥とならばや

ヽ〇同　岩代　岸野常子

ことの音のもれくろ方に灯かゝげさして雨のおばしま人おぼろ也

〇同　神戸　高嶺ゆき子

なかで見し夢ふと醒めて古郷のたより絶えたろ友をしぞおもふ

ヽヽ〇同　埼玉　濱野ひで子

行きくれてたよろ燈火と立よれば木影ににほふつゝぢなりけり

、○みどり子　東京　爾津梅子
いだかれてねむるみどり子顔見れば母に似たるよ目もと口もと

○大師詣　兵庫　浦上政子
日もすがらさくらはなちる須磨寺に詣づる人のこゝろゆかしき

○船　韓國　原野みき子
風和ぎて潮の香ゆらぐうなばらを沖をはるかにしら帆たゞよふ

○醫妙　埼玉　横田やな子
あしびきのやまひの道草おもふにもふかき心ぞくすりなりける

、、、雨中述懐　常陸　堀光子
たに川の水もろともにうきことのかづまさりゆく五月雨のそら

○別れ　横濱　金田まつえ子
あした夕べ睦みし人とわかなくに別つたもとの身に惜しきかな

○梅雨　神奈川　吉田はな子
ゆく春を袖にとめてぞいましばしまたせたまへや花のさかりを

○師の君へ　靜岡　内山たま子
年ごとにほまれいやます師の君のめぐみにおふるなでしこの花

俳句

天賞

田植　越後　岩本芳子

花嫁のはじめてうたふ田植かな

地賞

春風　横須賀　松下蔦里子

春風や笠よりかすむ富士の嶺

人賞

日永　同　渡邊久子

唖一人留守るをあづか日永かな

○給日傘の小さく見ゆる野路かな　東京　爾津梅子
○心地よし翠の波の麥畑
、、、短夜の鼠も捕らて明にけり　常陸　岡田蔦子
○家の風吹かせてしかな五月鯉
○崖道や思ひ懸なき藤の花
○八つ橋に彳む妹や杜若
○若葉影池をめぐりて風薫る
、、、日曜日坊ちやん庭の草むしり　信濃　足立てる子
、、、琴の音の聞ゆるたびに手をやすめ
、、、さみだれや天井をぬく露の玉　相模　大谷津みれ子
、、、さみだれや文士わびしき住居哉
○詩集讀む隣の重し啼く蛙　長野　上條つれ子
、、、月の糸柳の糸に懸りけり
○行く春に賑にせん歌の會
○乙女子のかしらにしほむ菫かな　大和　晴子
○汐踏んでながむる富士の夕日かな
、、、山吹を手桶にそれて散らしけり　大和　岩子
○古瓦ひろひつゝ見る寺の花　松山　上原のぶ子
、、、酒わりごつきてもさらぬ花見かな
、、、ひとへ縫ふ針のたゆみや五月雨　土佐　廣江子
、、、水無月や夜道に馴し驛の馬　神戸　足立あき子

、、、蕗も蛙も老てほとゝぎす
、、、思ひきやかゝる山家に牡丹とは　神戸　足立　ゑい子
、、、蜘の子や有か無きかの風に散る
、、、時ならぬ雪や竹の子掘る笠へ　和歌山　島田　千代子
、、、柳には雪より重し五月雨
、、、橋に来て瀧の音聞く若葉かな　兵庫　梶原　京子
〇順帽の顔うつしゆく清水哉
〇五月雨や故郷戀し杜若　磐城　木幡　きよ子
、、、都なば雲に隔てゝ夏の山
〇五月山間もいそかし杜鵑
〇啼かぬなら啼かぬと告けよ時鳥　岩代　岸野　常子
、〇白蓮や水の上ゆく小雪洞
〇朱の欄に藤をめでゐる女官哉
、、、谷毎に田あり家あり桃の花　三重　大西くすよ子
、、、法螺貝の籠から春を覗きけり
、、、磯村や妻皆壮に海苔砧
、、、提灯になきやむ小田の蛙哉　横須賀　柏原　みな子
、、、杜鵑里に鳴く夜や三日の月
〇鴨川や軒にすゞしき絵提灯
〇衣更て新樹の風に吹かれけり
〇菜の花にふと亡き母を思ひけり　越後　大石　ます子
〇菜の花の中の道行く俥哉
〇山越えて行かばや桃の乳母か村
〇蛍狩り一人夜路も戻りけり　東京　土田　八重子
〇目さむれば昨日に同じ梅雨の音
、〇春の野や使ひする子は遅れがち
、、、落雷に俯して晴衣の泥模様　埼玉　濱野　ひで子
〇一聲が何の惜かろほとゝぎす　千葉　瀧口　まつ子
、、、月の出て木かげ木かげをとふ螢

〇懐さまのもすにかすめてとふ螢
〇一村は花ばかりなり桃の中　大和　榮山　村雨
、、、川尻の長きうねりの汐干かな
〇夕立や市の人の牛叱る
〇短夜や犬の吠えつく町端れ
、、、潺々と水の流れや巌の藤
〇五月雨やまた讀返す古雑誌　新潟　岩本　芳子
〇夏木立休みし石に和歌一首
〇夏の夜やくさめに覗く子のね顔
、〇菜の花や手折らば蝶の夢さめん　東京　岸　常　子
〇菜の花の向ふに笑ふ筑波か奈
〇紅脂流す阿房の池や水ぬるむ
、〇隠れたる浪士が門や桐の花　東京　本橋　つや子
〇薫風やこゝ不忍の朝ぼらけ
、、、見本ほど伯母にも分けし新茶哉
、、、初孫の幟を誇る翁かな
、〇蚊遣して犬待つ椽や松の月
〇借りた牛返す暇なき五月雨　横須賀　吉田　幸子
〇呼ぶ聲のいとゞ涼しき金魚賣
〇京の紅買ふて戻るや菖蒲賣　相模　渡邊　きん子
〇三千の美女の歔欷や春の雨
〇辻堂に供へて行くや赤つゝじ
〇春雨や出先の知れぬ迎ひ牛
〇永き日を鳴きつかれたる鶏かな
〇故ありて女つくりや桃の宿　横須賀　吉田　染子
〇山吹がありて根岸の下宿かな
〇人憩ふ峠に茶屋や春の風　東京　高野　みち子
〇片町に灯ともし初めぬ春の夕
〇燭もる店一軒やる櫻咲く

ヽヽヽ三國の將會しけり桃の花
○見合してほゝ笑む烟や春の風
東京　橋本千代子

ヽヽヽ向上の歌高く誦せ揚雲雀
○痩月や野飼の牛に風薫る
○一人旅若葉の雨の峠かな
東京　杉江光子

ヽ○葉櫻や提灯うつる京の川
○草笛の人に夜風や月涼し
○別院によき人居ます牡丹かな
○橋に紙燭かざせば風薫る
東京　中川ゑい子

ヽ○掃き溜めて一箕に飾る落椿
ヽヽヽ家居して水よき里や夏近し
○怠りの面のそき行く蛍かな
ヽ○人込や仇し扇のもらひ風
横須賀　藤原すみ子

○馬子唄の節おもしろや柳の戸
○行春や君懐かしき歌日記
横須賀　松下萬里子

○由良さんの後姿や春の月
○永き日や御堂の守りの蓋縫哉
横須賀　渡邊久子

○女給師の宿かる寺の白牡丹
○行く春や女載せたる淀の舟
○古池の星影亂す蛙かな
横須賀　坪内たか子

ヽ○拙くも歌かき添へて初櫻
ヽヽヽほゝ笑めば花皆開く心地哉
ヽヽヽ何事も風のまゝなる藤の花
横須賀　佐藤君子

○道問へば彼方に霞む鐘の音
ヽ○宅町や桃咲く家の歌の會
ヽ○上加茂に住ひうつして春の水
横須賀　藤野雪子

ヽ○酒濺げて通る僧あり朧月
○蘆の湖に逆さの富士や風薫る
ヽヽヽ五月雨や四ツ手に鮒の潑溂す
東京　土岐ゆき子

小櫻　　陸軍教授　五弓雪溪著

本書は日露の役に沙河、黒溝臺、奉天の三大戰に參與し、殊勳を樹て、途に敵彈に中りて節に殉したる將校筵津中尉の小傳にして、五弓教授師弟の誼により執筆せられたるものなり、事は乃ち千古の美事にして、文に自ら生氣あり、途に上聞に達して天覽を賜ふの榮を得たりと、一たび之を讀まばその孝に泣き、二たび之を讀まばその忠に泣き、楮表淚痕を止めずんばやまざるべし、實に武勇絶倫ある中に人情の掬すべきものありて、所謂花も實もある日本武士の面目を發揮したるものなり、更に風化の上に稗補するもの尠からず、中尉が生前兩堂に贈りたる手跡を左に摘記すべし、

大君に仇なす敵を射止めずはなどむすぶべき古郷の夢、右は只今の兒の決心に御座候、今や國家存亡の關する所、一身の生死固より問ふ所にあらず、殊に不肖の身を以て陛下の御前に於て忝ふせる過分の榮譽を回想すれば、一死固より君恩に報ずるに足らず七生報國は兼ての覺悟に有之候、父母海嶽の御鴻恩、決して忘るる時御座なく、故郷自然の愛決して離るゝ理無之、戰鬪悲慘の狀決して知らざるに候はず、傷者呻吟の苦、亦決して覺えざるに候はず、唯之を己の果すべき義務、報ずべき君恩に比すれば、九牛の一毛にも及ばざる故に、內地の土を踏む能はざる次第に御座候云々身は鮮血に染まるゝとも、後送さるゝを肯んぜず、創を裹みて之を記したる中尉が心情また哀しからずや、　書名「小櫻」と稱するは、筵津中尉が英魂に對して、千歲祭祀を絶たざらしめんとて、小櫻神社を建てたるによる、（發行所は東京京橋區南小田原町三丁目九番地、樂山堂書房、定價僅に三十錢郵稅六錢）

千壽

下田歌子作

本月廿二日本誌編輯局の催にかゝる、女子教育講演會餘興として演奏すべき箏曲の歌

燭は暗し數行虞氏の涙　夜は深し四面楚歌の聲
御いたはしやいとほしや　きのふは翠帳紅閨のうちに
錦をかつぎ綾をしき　おほとのごもりしたまひけむ
比翼連理の夢さめて　けふは吾妻にとらはれの
御身とならせたまひては　旅雁の妻をしたひ
孤猿の友を呼ぶ聲ならで　寢ざめことゝふものやなからむ
一樹の陰、一河の流　他生の緣ときくものを
鴛鴦のふすまは重ねずとも　同じむしろ一つふしどに
わけくれなづさひまゐらせし　君がこころものうつり香の
いつの世にかは忘られん　流水去つてかへらずは
落花いかでかとゞまるべき　かりの宿りにむすびつる
露のちぎりを忘れずば　淸き汀にさくといふ
はすのうてなのうへにだに

新刊紹介

趣味	第二卷第五號	東京 彩雲社
新公論	第廿二年第五號	同 新公論社
中央公論	第廿二年第五號	同 反省社
流行	第四卷第四號	同 白木屋
正教要語	第八卷第五號	同 教要社
慶應義塾學報	第百十七號	同 慶應義塾
花ゆり	第三卷第七號	同 女子文壇社
婦人世界	第二卷第六號	同 實業之日本社
六合雜誌	第三百十七號	同 日本ゆにてりあん弘道會
工談雜誌	第百九十號	同 工談會
日本婦人	第九年第五號	同 帝國婦人協會
日本の三越	(時好臨時增刊)	同 三越呉服店
日本の家庭	第五卷第五號	同 同文館
婦人と子供	第七卷第五號	同 フレーベル會
體育	第百六十一號	同 體育會
女子文壇	第三卷第六號	同 女子文壇社
女學世界	第七卷七號	同 博文館
教育實驗界	第十九卷八、九號	同 育成會
成功	第十一卷第四號	同 成功雜誌社
東京經濟雜誌	每號	同 同雜誌社
なでしこ	第七卷第七號	同 大日本女學會
婦女新聞	每號	東京 婦女新聞社
愛國婦人	每號	同 愛國婦人會
家庭週報	每號	同 櫻楓會

定價

一册	前金	貳拾錢
三册	前金	五拾七錢
六册	前金	壹圓拾錢
拾貳册	前金	貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行		金三拾錢
半頁	三十二行	金八圓
一頁	六十四行	金拾貳圓
表紙一頁		金拾六圓

(色刷は特に御相談に應ず)

御注文規定

一切前金の事(但郵券代用一割增の事)●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地二丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便局へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治四十年五月廿八日印刷

明治四十年六月一日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社國光社

右代表者　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　橋本忠次郎

印刷人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　河本龜之助

發行所　株式會社國光社　(電話新橋二六九三番)(電話新橋特八八番)

國光社發行

理學博士 坪井正五郎先生講述

人類學講義

總クロース製 菊判

全一册 正價金壹圓拾錢 送料拾錢

坪井博士が人類學の泰斗たるは普く世人の知る所本書は同先生が極めて平易なる言文一致にて講述せられたるものにして創世紀の人類說、人類一種論と人類多種論諸種族系統探り方、人類の大別小別、日本種族論等あらゆる人類に關する要件を網羅せられたれば歷史及人類を研究する人には勿論普通人士も之れを一讀せば無限の趣味を感ずべき座右必須の良書たるを疑はず

國光社發行

島田三郎先生序　小畠幾次郎先生著

腦力增進論

全　送料六錢　正價三拾五錢

沼南島田三郎先生本書の冒頭に序して曰く心身の二者を保養して人始めて其發育を完全にするを得べし、心性を措ひて偏へに身體を說き身體を外にして專ら心性を論ず二者各其半面を語るものにして全局を蓋ふの見解に非ずと、著者夙に玆に見るあり世の青年學生の腦病に罹る者多きを慨し研究を積み推考を重ね汎く專門諸大家を歷訪し其所說を叩き大に悟る處あり遂に此書を作せり、賀古耳科院長、井上眼科院長、中濱回生院長、此木ドクトル、三浦大學教授、岩佐告成病院長、鈴木胃腸病院長等の卓說高論は著者の實驗及び古今に涉れる實地談と共に輕妙快活なる文章に由りて描寫され一讀の下頓に精神の壯快なるを覺ふ蓋し心身の二者を保養するに於て極めて必要なるのみならず一般學生の爲めに無上の清涼劑たるべし

小畠幾次郎先生著

體力增進論

全　送料八錢　正價四拾錢

著者前に腦力增進論を著し世に裨益せしもの少なしとせず更に本書を公にし相俟て心身の完全なる發達に資せんとす由來體質の軟弱なるは我が國民の一大缺點殊に一般學生の通患なり希くは此書に據り研究鍛錬して軀幹長大體力剛健の人と爲り以て戰捷國の民たるに負かざれ

文部省體操遊戲取調委員
井口あくり　可兒德　川瀨元九郎
高島平三郎　坪井玄道　諸先生共著

第五版 體育の理論及實際

總クロース
菊版五百餘頁
正價金壹圓參拾錢
郵稅拾錢

目下新式體操書の發刊せらるゝもの其數尠からずと雖ども概ね一個體操家の手に成り單に一部動作の形式方法等を示すに過ぎず其斯學大家の共著に成り學說實地全體を網羅して完全無缺なるは世間唯本書一あるのみ本書は曩に文部省體操遊戲取調委員として調查研究せられたる前記諸先生が其取調報告書に基き教育上生理上の學說及實地演習の動作方式等を詳細(新式基本姿勢は特に詳密に)解說せられたるものにして姿勢動作等には百六拾餘個の木版運動服體操教室等には石版摺着色畫を挿入し丁寧親切に說示しあれば此書を繙く人は恰も諸先生に就て親しく教授を受くるが如しされば新式體操に志す人は勿論中學校高等女學校及高等尋常小學校には必ず一本を備へざる可らず

發行所　東京市京橋區築地二丁目　電話新橋特八八、二六九三　株式會社　國光社
大賣捌所　大阪市東區南本町　合資會社　積文社

明治四十年六月一日發行　毎月一回一日發行　第拾七年第六號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可



東京築地株式會社國光社印刷